

田楽辻子周辺遺跡 (No.33)

浄明寺二丁目 569 番 10

例 言

1. 本報は「田楽辻子周辺遺跡」内、浄明寺二丁目569番10における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2. 調査期間 2012年6月14日～同年7月26日

調査面積 60㎡

3. 本調査地点の略称はD Z 1201とした。

4. 調査体制

担 当 者 原廣志

調 査 員 吉田桂子 森谷十美 根本志保

作 業 員 秋田公佑 片山直文 赤坂進 安藤宗幸 永野幹晴

5. 本報告作業分担

遺構図整理 根本志保

遺物実測 吉田桂子・森谷十美・根本志保

同墨入れ 吉田桂子・森谷十美・根本志保

同観察表 根本志保

同写真撮影 須佐仁和・根本志保

原稿執筆 根本志保

編 集 根本志保

6. 出土遺物、図面、写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管する。

7. 本報の凡例は以下の通りである。

挿図 縮尺：全側図：1/50 遺構図：1/40 1/20 遺物図：1/1 1/3 1/6

数 値：文章中の（）数値は復元径を示す。

遺 構 図：遺構の標高は海拔高の数値を示している。

遺 構 図：黒塗りは土器・陶器に付着した油煙煤、漆、紅色顔料を表現している。

分 類：火鉢は河野眞知郎氏による分類に従った。

瓦は原廣志氏による分類に従った。文献はいずれも参考文献に記した。

編 年：常滑の編年はの愛知県史(2012)の中野晴久編年による。

現地調査及び資料整理に際して以下の方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい。

尚、施主小松氏から物心両面の援助をいただき感謝を申し上げる(敬称略、五十音順)。

上村和直・上本進二・河野眞知郎・熊谷満・古田土俊一・後藤建・汐見一夫・玉林美男

(株)博通・能芝勉・馬淵和雄

目次

第一章 調査地点の概観	267
第1節 遺跡の概観	
1. 位置と立地	
2. 歴史的環境	
3. 周辺の遺跡	
第二章 調査の概要	276
1. 調査の経過	
2. 測量軸の設定	
3. 層序	
第三章 検出された遺構と出土遺物	281
1. 第1面の遺構と出土遺物	
2. 第2面の遺構と出土遺物	
3. 2面下深掘り坑出土遺物	
第四章 まとめ	339
1. 遺構の変遷	
2. 出土遺物と計量比について	

挿 図 目 次

図1 周辺の遺跡	268	図19 第2面 建物2	302・303
図2 中世の鎌倉地形図(『鎌倉・逗子地形発達史 7』加除筆)	271	図20 第2面 建物2出土遺物	304
図3 明治15年頃の調査地点周辺(『迅速側図』加 除筆)	272	図21 第2面 かわらけ溜り・出土遺物	305
図4 グリッド配置図	277	図22 第2面 土坑(1)・出土遺物	306
図5 調査区堆積土層図	278	図23 第2面 土坑(2)・出土遺物	307
図6 第1面全体図	280	図24 第2面 土坑(3)・柱穴71・出土遺物	310
図7 第1面 井戸1	282	図25 第2面 土坑30(1)・出土遺物	311
図8 第1面 井戸1出土遺物	283	図26 第2面 土坑30(2)・出土遺物	312
図9 第1面 かわらけ溜まり・出土遺物	284	図27 第2面 柱穴(1)・出土遺物	314
図10 第1面 土坑(1)・出土遺物	286	図28 第2面 柱穴(2)・出土遺物	315
図11 第1面 土坑(2)・出土遺物	287	図29 第2面 1面下2面上出土遺物(1)	318
図12 第1面 柱穴	288	図30 第2面 1面下2面上出土遺物(2)	319
図13 第1面 柱穴出土遺物	289	図31 第2面 1面下2面上出土遺物(3)	320
図14 第1面上出土遺物(1)	293	図32 第2下深掘り坑出土遺物	323
図15 第1面上出土遺物(2)	294		
図16 第2面 全体図	296		
図17 第2面 建物1	298・299		
図18 第2面 建物1出土遺物	301		

表 目 次

表 1 周辺の遺跡(1)269	表 11 遺物観察表(7)330
表 2 周辺の遺跡(2)270	表 12 遺物観察表(8)331
表 3 第1面遺構観察表290	表 13 遺物観察表(9)332
表 4 第2面遺構観察表317	表 14 遺物観察表(10)333
表 5 遺物観察表(1)324	表 15 遺物観察表(11)334
表 6 遺物観察表(2)325	表 16 遺物観察表(12)335
表 7 遺物観察表(3)326	表 17 遺物観察表(13)336
表 8 遺物観察表(4)327	表 18 出土遺物計量表(1)337
表 9 遺物観察表(5)328	表 19 出土遺物計量表(2)338
表 10 遺物観察表(6)329	

図 版 目 次

図版 1342 第1面近景(南から) 第1面全景(井戸1を中心に・北から)	図版 7348 第2面建物・柱穴53・87(東から) 第2面柱穴87遺物出土状況(南から) 第2面かわらけ溜り(東から)	図 11 第1面柱穴 図版 13354 図 12 第1面上(1) 図 13 第1面上(2) 図 16 第2面建物1
図版 2343 第1面全景(南から) 第1面上遺物出土状況(北から) 第1面かわらけ溜り遺物出土状況(東から)	図版 8349 第2面土坑19(南から) 第2面土坑20(東から) 第2面土坑23(東から) 第2面土坑26(西から) 第2面土坑27(西から) 第2面土坑29(南から)	図版 14355 図 16 第2面建物1 図 18 第2面建物2 図 19 第2面かわらけ溜り 図 20 第2面土坑(1)
図版 3344 第1面井戸1(北から) 第1面井戸1西面(東から) 第1面井戸1東面(西から) 第1面井戸1南東隅接合面(北西から)	図版 9350 第2面土坑30・35(北から) 第2面土坑30(北から) 第2面土坑35(東から)	図版 15356 図 21 第2面土坑(2) 図 22 第2面土坑(3) 図 23 土坑30(1) 図 24 土坑30(2) 図 25 柱穴(1)
図版 4345 第1面井戸1南面(北から) 第1面井戸1南面鑿痕アップ 第1面井戸1北面(南から)	図版 10351 第2面土坑35(南西から) 第2面上遺物出土状況(南から) 第2面柱穴50(北から) 第2面柱穴50 遺物出土状況(北から)	図版 16357 図 25 第2面柱穴(1) 図 26 第2面柱穴(2) 図 27 第2面1面下2面上(1)
図版 5346 第1面柱穴102(南から) 第1面土坑1(南から) 第1面土坑3(北から) 第1面土坑4(北から) 第1面土坑5(西から) 第1面土坑6(北から) 第1面土坑13周辺(東から)	図版 11352 2面下深掘坑(東から) 調査区南壁土層堆積 調査区東壁土層堆積	図版 17358 図 28 第2面1面下2面上(2) 図 29 第2面1面下2面(3) 図 30 2面下深掘坑
図版 6347 第2面全景(南から) 第2面全景(東から)	図版 12353 図 6 第1面井戸1 図 7 第1面かわらけ溜り 図 8 第1面土坑(1) 図 9 第1面土坑(2)	図版 18359 出土した釘 チャート 使用痕のある軽石 鉄滓

第一章 調査地点の概観

第1節 遺跡の概観

1. 位置と立地

調査地点は「田楽辻子周辺遺跡(県遺跡番号NO.33)」の範囲内、浄明寺二丁目569番10に所在する。鎌倉市の東部の六浦道(県道金沢・鎌倉線、以下「六浦道」に統一)沿いの杉本寺前に架かる犬懸橋を渡り、住宅街に入った中にある。周辺は字名を「宅間」と言い、その範囲は現行の町名である浄明寺二丁目とほぼ一致する。調査地点の南西側には犬懸ヶ谷があり、「宅間」「犬懸」ともに上杉諸流の名字である。

六浦道とほぼ並行に流れる滑川は十二所に源を発し、谷を開析し所々蛇行しながら西に流れ大蔵付近で二階堂川と東御門川、南から釈迦堂川、大御堂川と合流し約20mの川幅を持ち鶴岡八幡宮の東側あたりで大きく南に向きを変え、鎌倉市中心部の沖積平野を形成しつつ相模湾に流れ込む。

現在「田楽辻子のみち」とされているのは大御堂橋を南に渡り、大御堂ヶ谷、釈迦堂ヶ谷、犬懸ヶ谷の開口部を経て宅間ヶ谷に抜ける東西道である。道幅は狭いものの滑川を挟み県道六浦道とほぼ平行して走る。調査地点は滑川左岸であり、六浦道と「田楽辻子のみち」に挟まれている。上本進二の「鎌倉・逗子地形発達史」によると鎌倉時代この辺りは谷底平野・山麓平野にあたる。(上本2000)。また鎌倉市中の主峰とも言うべき衣張山は調査区の南に位置する。滑川を越えた北東の平地には浄妙寺があり、その東側前面の字名を「御所之内」と言い、鎌倉公方の屋敷があったとされる。

2. 歴史的環境

古代以前

今回の調査でも弥生式土器の壺と思われる土器片が3片出土している。

縄文時代では図1からは外れるが周辺の荏柄天神辺りや明王院の周辺、鑪ヶ谷北遺跡で土器片の発見がある。弥生時代になると沖積低地に遺跡が見られるようになる。調査地点からほぼ1km西の滑川右岸の大倉幕府周辺遺跡群では弥生時代中期から古墳時代初頭の集落が展開する。古墳時代には駅周辺の低地部で集落が見られ、丘陵部には横穴がある。調査地周辺では当該期の遺物が採集されている。また衣張山の山頂付近では弥生時代末から古墳時代の高坏、甕が出土している。山頂に小規模な集落があったのか、もしくは祭祀的な場であったかと報告者は指摘している(鈴木・菊川2001)。奈良・平安時代には今小路西遺跡(御成小学校地点)で鎌倉評家が発見されているように、鎌倉旧市街地に評家関連遺構とそれに伴う集落が検出されている。調査地周辺でも竪穴住居の発見や土師器片が出土されている。弥生時代から平安時代にかけては雪ノ下や杉本寺周辺に集落が点在するが、浄妙寺以東ではまとまった集落址の発見はなく開発は浄妙寺より西側で先行するようだ。だが、浄妙寺以東でも点的ではあるが遺物の出土例はあり、主だった生活域を浄妙寺以西と決めるのは尚早である。中世に幹線道路となる六浦道の原形がどこまで遡るかという点も併せて考えると興味深いところである。

表1 周辺の遺跡(1)

田楽辻子周辺遺跡(NO.33)

地点	地番	報告書/他
1	浄明寺二丁目569-10	調査地点
2	浄明寺字宅間562-33	大上周三 1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8 鎌倉市教育委員会
3	浄明寺一丁目661-1	森孝子 2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会
4	浄明寺一丁目676-1	未報告
5	浄明寺一丁目556-6外	福田誠 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会
6	浄明寺一丁目691-4	未報告
7	浄明寺一丁目652-8	森孝子 2009『第19回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所他
8	浄明寺一丁目556-6	押木弘己 2012『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』28 鎌倉市教育委員会
9	浄明寺釈迦堂658	手塚直樹 1990『釈迦堂田楽辻子遺跡』釈迦堂田楽辻子遺跡団

杉本寺周辺遺跡(NO.158)

10	二階堂字杉本912	馬淵和雄 2002『杉本寺周辺遺跡』鎌倉市教育委員会
11	二階堂字杉本912	未報告
12	二階堂字杉本903	松尾宣方 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
13	二階堂字杉本932-1	宮田真 2007『杉本寺周辺遺跡発掘調査報告書』(株)博通
14	二階堂字杉本903	田代郁夫 1988『報国寺境内やぐら・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書』杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団

浄妙寺旧境内遺跡(NO.408)

15	浄明寺字向小路78	鎌倉市教育委員会 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
16	浄明寺字稲荷小路129-2	原廣志 1985『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1 鎌倉市教育委員会
17	浄明寺字向小路90-1	田代郁夫・原廣志 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 鎌倉市教育委員会
18	浄明寺三丁目6-3	大河内勉 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会
19	浄明寺三丁目115-2	松山敬一朗 1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15 鎌倉市教育委員会
20	浄明寺三丁目16-1	松山敬一朗 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 鎌倉市教育委員会
21	浄明寺三丁目126	原廣志 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21 鎌倉市教育委員会
22	浄明寺三丁目119	瀬田哲夫 2004『神奈川県埋蔵文化財調査報告』46 神奈川県教育委員会
23	浄明寺三丁目101-13	斉木秀雄・降矢順子 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会
24	浄明寺三丁目3-2	福田誠 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
25	浄明寺三丁目122-1・2	馬淵和雄 2011『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』27 鎌倉市教育委員会
26	浄明寺三丁目115-14	熊谷満 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26 鎌倉市教育委員会
	浄明寺三丁目115-3	熊谷満 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26 鎌倉市教育委員会

公方屋敷跡(NO.268)

27	浄明寺三丁目143-2	原廣志 1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10 鎌倉市教育委員会
28	浄明寺三丁目151-1・151-4	宮田真 1996『公方屋敷跡発掘調査報告書』公方屋敷跡発掘調査団
29	浄明寺四丁目237	熊谷満・斉木秀雄 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会
30	浄明寺四丁目297-12外	未報告

大楽寺跡(NO.262)

31	浄明寺字胡桃ヶ谷251-1	田代郁夫 1989『神奈川県埋蔵文化財調査報告』31 神奈川県教育委員会
32	浄明寺四丁目246-1	宮田真 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26 鎌倉市教育委員会
33	浄明寺四丁目181	根本志保 2007『神奈川県埋蔵文化財調査報告』51 神奈川県教育委員会
34	浄明寺四丁目181-12	未報告

報国寺遺跡(NO.306)

35	浄明寺字宅間533	松尾宣方 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
36	浄明寺字宅間520-1	武淳一 1994『東国歴史考古学研究所調査研究報告』1 東国歴史考古学研究所
37	浄明寺二丁目474-11外	原廣志 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
38	浄明寺二丁目474-12	原廣志 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
39	浄明寺二丁目533	田代郁夫 2006『神奈川県埋蔵文化財調査報告』49 神奈川県教育委員会

表2 周辺の遺跡(2)

上杉氏憲邸跡(NO.258)

地点	地番	報告書/備考
40	浄明寺一丁目699	馬淵和雄 1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11 鎌倉市教育委員会

积迦堂遺跡(NO.257)

41	浄明寺字积迦堂642	松尾宣方 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
42	浄明寺字积迦堂597-1	斉木秀雄 1989『神奈川県埋蔵文化財調査報告』31 神奈川県教育委員会
43	浄明寺621	手塚直樹 1989『浄妙寺积迦堂ヶ谷遺跡』浄妙寺积迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団
44	浄明寺一丁目598-21	未報告
45	浄明寺一丁目598-35	未報告
46	浄明寺一丁目602-1他	未報告

青砥藤網邸跡(NO.269)

47	浄明寺五丁目434-4	未報告
----	-------------	-----

鎌倉城(NO.87)

48	浄明寺五丁目448・1449	鈴木庸一郎 2005『鎌倉城 浄明寺五丁目地内』(財)かながわ考古学財団
----	----------------	--------------------------------------

川越重頼邸跡(NO.270)

49	浄明寺五丁目305イ外	斉木秀雄 2006『川越重頼邸跡発掘調査報告書』(有)鎌倉遺跡調査会
50	浄明寺五丁目318-1	未報告
51	浄明寺五丁目423-1外	未報告

横小路周辺遺跡(NO.259)

52	二階堂字荏柄9-1	菊川英政 1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6 鎌倉市教育委員会
53	雪ノ下五丁目557-1	野本健二 1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 鎌倉市教育委員会
54	二階堂字荏柄10-6	福田誠 2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会
55	二階堂字荏柄10-1	原廣志 2003『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19 鎌倉市教育委員会

大倉幕府周辺遺跡群(NO.49)

56	雪ノ下四丁目565-4	菊川英政 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 鎌倉市教育委員会
57	二階堂字荏柄3-6外	未報告
58	雪ノ下字天神前562-30	未報告
59	雪ノ下字天神前562-29	福田誠 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会
60	雪ノ下字大倉耕地562-16	福田誠 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 鎌倉市教育委員会
61	雪ノ下四丁目567-7	馬淵和雄 2004『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20 鎌倉市教育委員会
62	雪ノ下四丁目573-4	未報告
63	雪ノ下四丁目569-1	馬淵和雄 1990『大倉幕府周辺遺跡群』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団

天王館跡(NO.409)

64	浄明寺三丁目104-1	未報告, 河野真知郎 1995『中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』講談社選書メチエ
----	-------------	---



図2 中世の鎌倉地形図(上本2000図7に加除筆)

田楽辻子

「辻子」というのは小路より更に小さい通路のことを呼んだのではないかとされている(石井1989)。「田楽辻子」の史料による初見は『吾妻鏡』による嘉禄三年(1227)正月二日条、「戌の刻、田楽辻子の東西一町余焼亡す」の記事である。「東西一町余」ということから東西に通ずる路であることが分かる。次に出現するのは、正嘉元年(1257)十一月二十二日条の「若宮大路焼失す。(略)田楽辻子に至りて、火止まる。」という記事である。若宮大路からそれほど遠くない、南北の大路と交差する路のようにもとれる。おぼろげに田楽辻子は見えてきたが判然としない。後述するが図1の地点3・9では道路状遺構の検出がある。13世紀半ば以降滑川左岸に東西道はあり、そして、六浦に抜ける道に合流していたのではないだろうか。また、『相良家文書』による正応三年(1291)五月八日付の迎蓮(相良頼俊)の讓状に鎌倉の釈迦堂の前の地としてその四至を注して、「東限てんがくの地」というのが見られ、てんがくは田楽であり、釈迦堂は元仁元年(1224)に北条泰時が亡父義時追福のため造立した大御堂ヶ谷の東の釈迦堂ヶ谷にあったであろうから、現在の「田楽辻子のみち」とそう変わらないのではないかという指摘もある(高柳1967)。

名前は、釈迦堂前に田楽が住んでいた。田楽座を構成していた。といわれ、それに由来する。「田楽」自体は、平安後期から見られるようである。当初は実際に水田耕作に携わる直接生産者とその労働の効率を良くするために奏した音楽であったが、その後、農事を伴わない芸能としての「田楽」に発展し、11世紀には悪霊を退散されるためとして田楽法師が出現し人気を博していたようである。鎌倉時代には祭礼芸能の主座を占めるようになり、また、14代執権北条高時が田楽に狂していたとも言う。史料では『吾妻鏡』の寛元三年(1245)八月一六日条に「(略)入道大納言家棧敷において御見物ありと云々。馬場の儀、神子田楽、馬長等常のごとしと云々。(略)」という記事がある。また、宝治元(1247)年九月一六日条では「相模国毛利庄の山中に怪異等あり。毎夜田楽の粧を成すの由、土民等言上すと云々。」との記事がある。



図3 明治15年頃の調査地点周辺（『迅速側図』加除筆）

六浦道

現在は大倉辺りから朝比奈を越え武蔵国六浦に通じる街道を指す。また、頼朝が鎌倉に入る以前は現在の寿福寺にあったといわれる義朝の館まで通じていたとされる（馬淵1994）。

六浦道は、鎌倉時代国際的な貿易拠点としての湊を持つ六浦と鎌倉を結ぶ道であり、湊からの物資が流通し、時に軍用ともなる主要道路であった。また六浦は鎌倉の一部もしくは境界領域として考えられていた。鎌倉の内と外については様々な議論があるが、一例として『吾妻鏡』の元仁元年（1224）十二月二六日の記事で、疫病流行のため四角四境鬼気祭、陰陽権助国道が申し行われる。東は六浦、南は小壺、西は稲村、北は山内とある。

鎌倉幕府開幕当初は東西方向の六浦道を基軸にしていたが、嘉禄元年（1225）の御所移転後は南北の若宮大路を機軸にするようになる。しかし大倉あたりの邸宅が廃棄され荒野に帰することはなかったし、鎌倉府が浄妙寺の東に置かれた際には再び六浦道が基軸となり武士たちの居館も六浦道沿いに移転したのである。上杉氏も鎌倉府に近接する犬懸、宅間に邸宅を持っていた。また山内・扇谷にも居館があり、山内は今小路が北の武蔵国府へと向かう地域であり扇谷は寿福寺のある亀ヶ谷に近接していることを考慮すれば、室町時代の鎌倉における要地が六浦道沿いと武蔵国府に向かう道沿い・扇谷周辺にあったと考えることができる。この状況が、今小路と六浦道の交差点である亀ヶ谷に館を構えた義朝の頃と似ていることから、室町期の鎌倉の構造は義朝の頃のような自然発生的な本来あるべき鎌倉の姿に回帰したものであるとの指摘もある（石井1988）。

鎌倉公方と上杉氏

鎌倉公方とは室町幕府が東国統治のために置いた鎌倉府の首長の通称であり、鎌倉御所、関東公方とも呼ばれている。あくまでも京都にいる将軍の代理であり幕府の正式な職名ではない。

東国の統治は足利一族が五代（足利義詮－基氏－氏満－満兼－持氏）にわたり行った。時代が下るにつれ幕

府から権限が移管され次第に独立した支配をするようになるが、管領上杉憲忠を殺害したため(享徳の乱)幕府に追討され鎌倉を追われ、下総国古河に移る。これら歴代の鎌倉公方の居住地(御所)は浄妙寺の東側に比定され一帯は公方屋敷の遺称がある。17世紀に編まれた『新編鎌倉誌』にも記載があるため江戸時代始めには一帯は「公方屋敷」として認識されていたようだ。

鎌倉公方を補佐していたのが関東管領上杉氏である。上杉氏の始祖である重房は元々公家であったが建長四年(1252)宗尊親王が将軍として鎌倉に赴くのに随行し、側近としてそのまま鎌倉に定着した。以後足利氏と姻戚関係となり重んじられる。暦応三年(1340)には鎌倉公方の補佐役として重能が任ぜられる。以後幕府の抗争もあり退くが尊氏の死後、貞治二年(1363)公方基氏の要請により再び補佐役となる。それ以来、関東管領の職名が確立し、その職は上杉氏の世襲となり山内・犬懸・宅間各家で持ちまわる。しかし、室町開府以降、幕府と鎌倉府、公方と管領の抗争は絶えることはなく鎌倉府が安定していたわけではない。応永二三年(1416)には犬懸家の氏憲(禅秀)が公方足利持氏・管領(山内)上杉憲基に反旗を翻し上杉禅秀の乱が起きる。禅秀は一度は政権を奪取するが、基氏が室町幕府の援助を得て反撃し結局公方・管領が勝利した。これにより犬懸氏は滅亡した。これ以降管領職は上杉宗家である山内氏が独占するようになる。管領の勢力は大きくなったが、公方との対立は収まらず加えて扇谷家上杉氏との抗争も激化する。しかし永享・享徳の乱で鎌倉府が事実上崩壊すると管領職も実体を失い、さらには後北条との対立により勢力は衰退に向かう。天文十五年(1546)、憲正は管領職と上杉姓を長尾景虎(謙信)に譲り、形式上管領職は相続されるが謙信の死により消滅する。

宅間ヶ谷

調査地点は字名を宅間ということは先に触れた。宅間家の祖は上杉重能で、父は勸修寺道宏、母は上杉頼重の娘加賀局である。祖父重房も元は勸修寺家の出であり、重能は母の兄弟である憲房の養子となる。同じく頼重の娘を母とする足利尊氏とは従兄弟にあたる。元弘三年の六波羅攻めに参じるなど、永く尊氏に功があったが貞和五年(1349)に高師直によって殺害される。実子がなかったため管領山内憲頭の子能憲を養子とした。能憲は応安元年(1368)に憲頭の跡を受けて管領となり永和四年(1378)に亡くなるまで職にあった。この間義堂周信を開山に迎え、西御門に報恩寺を開創している。義堂周信の日記『空華日用工夫略集』には能憲の死に際して彼が「琢磨谷」の屋敷を訪れたと書かれており、14世紀末までは宅間ヶ谷に宅間上杉氏の屋敷があったと推測する。その養子憲孝(山内憲方の子)も明德三年(1392)から応永元年(1394)まで管領を務めた。しかし憲孝以後の宅間氏は活躍することなく途絶えてしまう。

文献で「宅間」は「詫間」「宅磨」「沢間」と書かれることもある。「宅間」という名の由来は宅磨派の絵師が住んでいたためという伝承がある。『風土記稿』もその説をとっている。吾妻鏡によると京都の絵師宅磨派の祖、宅磨為遠の三男為久は元暦元年(1184)正月とその翌年の文治元年(1184)に頼朝に京都から招かれ、勝長寿院本堂の壁画、二十五菩薩図の制作に携わった記事が載る。また宅磨為行は為久の子かとも言われる。『吾妻鏡』寛喜三年(1231)十月六日条に将軍藤原頼経の命に応じ五大堂建立予定地で「左近将監為行」が図を描いたことがみえる。為久・為行が始祖となりその後、14世紀半ば以降に宅磨長祐・浄宏(法眼)などの名がみられる。鎌倉宅磨派の絵師・仏師は南北朝・室町期まで活躍を見せ上杉氏の名字になる前「たくま」という地名があったと考えられ、その由来となろう。

また、五山文学僧として知られる中巖円月の自選年譜である『仏種慧济禅師中岩円月和尚自曆譜』には円月13歳の正和元年(1312)「是年予十三(略)後学秘密教於三宝院、日々詣詫間谷、礼宝篋欄等、巡百匝而帰拜弘法大使像百拜」とある。14世紀前半代に中巖円月が詣でる寺院が宅間ヶ谷にあったのではないか。

3. 周辺の遺跡

弥生時代から平安時代までの遺構の検出、遺物が出土するのは、調査地点数の粗密や後世による削平、滑川の氾濫なども視野に入れるべきではあるが、先にも述べたとおり浄妙寺以西が主体である。地点8では古墳後期から平安時代の遺物包含層が発見され古墳後期を中心とした土師器、須恵器がまとまって出土している。地点61では弥生時代から平安時代までの河道と遺物が出土されている。地点53では弥生土器が出土している。地点5では土師器が出土している。地点13では縄文時代から平安時代までの遺物の出土と窪地の検出がある。地点10では弥生時代中期から後期の土器と石器、住居址の検出がある。地点2では古代の溝状の遺構、地点18では弥生時代土器の出土がある。唯一浄妙寺以東の発見例の地点26では須恵器の甕片が出土している。

全地点で中世の遺跡は検出されている。ここでは大きく田楽辻子、六浦道、杉本寺から犬懸ヶ谷に抜ける南北道、各谷戸、公方屋敷を意識してみたい。

調査地点に一番近い地点2の鎌倉時代の遺構は東西に延びる溝が検出している。その南側の肩は土塁の可能性があると報告されている。地点3・9では13世紀中頃から15世紀代にわたる東西の道路状遺構を検出している。現行道路と平行・重複し田楽辻子を彷彿させる。また各地点とも13世紀後半から14世紀前半に貝砂、玉砂利の張り替えがあり、宗教関係を思わせる場との指摘がある。特に地点3では『吾妻鏡』の康元元年(1256)一二月の記事の勝長寿院焼亡と比定する焦土の検出の指摘がある。地点9の道路状遺構は6回の改修が施され、開始時期は13世紀頃まで遡ることが指摘されている。

この道筋に展開する一番西側の谷の釈迦堂ヶ谷の地点7では合計9面調査され、その内4面の13世紀前半から中頃にかけて武家屋敷を想像させる規模の礎石建物の検出があり、特記すべきは礎石建物の周りは白砂で覆われていたことであろう。しかし鎌倉末から南北朝期にかけては屋敷の縁辺部的な様相を示すと指摘されている。地点43は谷戸内の平場全域とそれを囲む尾根の調査であり、尾根からは瓦に囲まれた常滑の蔵骨器の出土がある。平場の遺構ややぐらの存在から寺院址の可能性を指摘出来よう。また須恵器の甕片の出土がある。

犬懸ヶ谷の地点40では南北に延びる道路状遺構と共に15世紀代の炭化層の検出があり、応永23年(1416)の「上杉禅秀の乱」であると見てよいのではとの指摘がある。この南北道は後述する犬懸坂に抜ける道であろうか。谷戸開口部の地点6では、古墳時代から古代に帰属する溝状遺構と13世紀から15世紀の3面の生活面が調査され礎版を持った柱穴や玉砂利敷きが検出されている(山口正紀氏教示による)。屋敷もしくは寺院の一角の可能性が考えられよう。

宅間ヶ谷では東西の山裾に展開するやぐら群と、東やぐら群ではやぐら群の前面を「崖下遺構群」としての調査がなされ、検出された遺構は屋敷もしくは寺地の一部を構成する遺構群として捉えられている。また地点37・38では13世紀前半から後葉までの宅間上杉氏を想起させる建物址の検出と14世紀前葉から15世紀にかかる報国寺に関連すると見られる遺構の検出がある。報国寺境内の地点35では鎌倉末期から昭和初期までの整然と積まれた東西の石垣と、南北方向の道路状遺構の検出がある。

地点10では平安時代末期(12世紀第4四半期)から南北朝時代(13世紀第3四半期)まで存続する南北に延びる道路状遺構の検出がある。遺構は当初、軸線を異にするものの次第に六浦道に直交する方向に変化していく。この道路に対して報告者は、道路の南側の延長が犬懸坂に真っ直ぐ続くことから、杉本寺から始まる坂東札所の巡礼道ではないかと考察している。巡礼道について、『新編鎌倉志』は「(略)土俗、衣掛山とも云う。此所と、釈迦堂谷との間に、切抜の道あり。名越へ出るなり。昔の本道とみへたり」(巻之二「犬懸谷」との記述がある。更に、時代を遡り『源平盛衰記』巻二十一「小坪坂合戦事」によると、

小坪合戦以前に「イササカ公用」のために鎌倉を訪れていた和田義茂は、小坪において源氏方の三浦一族と、平家方の武蔵武士との間で合戦が行われたとの報を聞き「犬懸坂ヲ馳超テ」名越方面へと向かっている。(『神奈川県史 資料編』1-826)との平安時代末期の資料があることを踏まえ、この道は杉本寺の麓から出ており、犬懸坂に続く。平安時代後期から長く使われ、決して仮設的な存在ではない。おそらく準幹線ともいう役割を担っていたはずと指摘している。また報告者は以上の点と石井進の推論(石井1986)を合わせ、遺跡自体に対して杉本(=和田)一族の本拠地であったと言及している。地点10ではほかに4期にわたる遺構の変遷があり、13世紀前半には埋没されてしまう薬研堀の溝や12世紀第4四半期から13世紀第1四半期の和田一族と指摘される有力豪族の大型の居館や13世紀第2四半期から13世紀第3四半期を中心とした有力武士の建物址、13世紀後半から14世紀前半に渡り、寺院の一角から職能に関わる人々の活動空間への変遷が指摘されている(馬淵2002)。

六浦道は仁治2年(1241)の朝比奈切通しが開かれた際の整備以前からの路であろう。現在の寿福寺にあったとされる義朝の館は六浦道と武蔵国府に向かう現在の今小路との交差点という要地を占めていたと考えられている(馬淵1994)。この今小路とつながる六浦道沿いには参道がほぼ直角に交わる荏柄天神や道に面して位置する杉本寺など頼朝の都市設営以前からの存在が想定される寺がある。だが、現在の六浦道と平行・重複する明確な遺構の検出は少ないが、地点64では鎌倉時代の六浦道と考えられる両側に側溝を持つ幅5mほどの道跡とその南側には屋敷跡が検出されたという。地点10には、ガス管理設工事に伴う立ち会い調査が行われた際に発見された、幅6.9m以上の泥岩地形による舗装道路と北側側溝の発見が報告されている。ただ地点13で12世紀末から13世紀初頭頃の東西に延びる道路状遺構の検出はあるが、「六浦道とは考えにくい」との指摘がある。しかしながら地点10の12世紀第4四半期から始まる大型建物は六浦道に直交すると指摘がある。13世紀頃以降になると六浦道を意識した区画は多く見られるようであり、地点26では13世紀中頃から14世紀前半の六浦道と平行する東西溝や、南北の道路状遺構、柱穴列など六浦道を意識した区画を採っていると指摘されている。地点27では遺跡を3期に分け、その中で13世紀前葉から15世紀前葉まで連続と続く木組の側溝を持ち浄妙寺と足利邸(公方屋敷)とを結ぶと推定される東西道路の検出がある。地点17は13世紀前半から15世紀前半までの南北方向の道路状遺構の検出がある。現在の六浦道沿いの地点28は遺跡を3期に分け中でも13世紀後葉から14世紀初頭に最盛期をもつ遺跡であり、この地域が当時六浦道を軸に捉えた町割り展開していたと予想されるという。地点29では13世紀前葉から14世紀代の遺跡として礎石建物、通路、それに伴う門、溝、玉砂利敷き等の遺構が六浦道を軸にした地割に準じていることが推測されている。また地点56では六浦道と直交する荏柄天神の旧参道と指摘される土塁状遺構と13世紀前半には機能を失う薬研形の溝の検出がある。この同時期に機能を失う薬研形の溝はほかに地点54、55、60に見られる。浄妙寺以東では全体に13世紀中頃から14世紀代の遺跡が目立ち、足利氏関連の遺跡の姿が見えてくる。地点25では13世紀前半から15世紀前半までの遺跡を7期に分け、建物等の遺構を武士住宅から都市住民の小型住宅、その後武士住宅もしくは寺院の一角と変遷し、更に後半の一世紀に面の更新がないことから鎌倉時代が終われば鎌倉は「都市性」を失うと言及する。地点32は鎌倉府の盛衰と符合するように遺構が変遷する。地点23では13世紀後半から14世紀前半の建物が検出され、町屋的な空間と指摘されている。地点21は13世紀後半から15世紀の遺跡で区画溝、建物、粘土採掘坑等の検出があり、足利氏に外護された浄妙寺旧境内に関連していると指摘。地点24では池が検出され、13世紀前葉から14世紀前半の平瓦がまとまって出土している。杉本寺の別当もしくは浄妙寺の前身の寺の可能性が考えられよう。

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

調査地点は鎌倉市の北東に位置し、杉本寺前の犬懸橋を渡り、県道金沢・鎌倉線より南の住宅街に550 m程入った鎌倉市浄明寺二丁目569番10に所在する。今回の発掘調査は個人専用住宅建設の計画があったため、工事の実施により掘削深度が60cmであり埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのあることが予想された。このために鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地地下15cm前後まで現代の客土が確認され、それ以下は南北朝時代から鎌倉時代の2時期の遺構面（生活面）とそれに伴う遺物が出土し、具体的に埋蔵文化財が存在することが判明した。これにより当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業主と協議を行ったところ当初の計画に基づき建築工事を行いたいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成24年6月14日から約1ヶ月半の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は6月14日に機材を搬入した後、試掘データに基づいて遺構面まで人力で掘り下げ、遺構の確認・検出を行った。

調査面積は60㎡が対象である。調査の結果、建物址、井戸、柱穴、土坑などにより構成された遺構群が検出された。出土遺物は、かわらけを始め、貿易陶磁器、国産陶器、瓦質製品、石製品、金属製品、など13世紀後半から15世紀前葉の所産である。また、6月21日より南隣接地の発掘調査が始まる。調査は(株)博通が請け負っており、調査にあたって使用した測量軸等の設定の協力を得た。

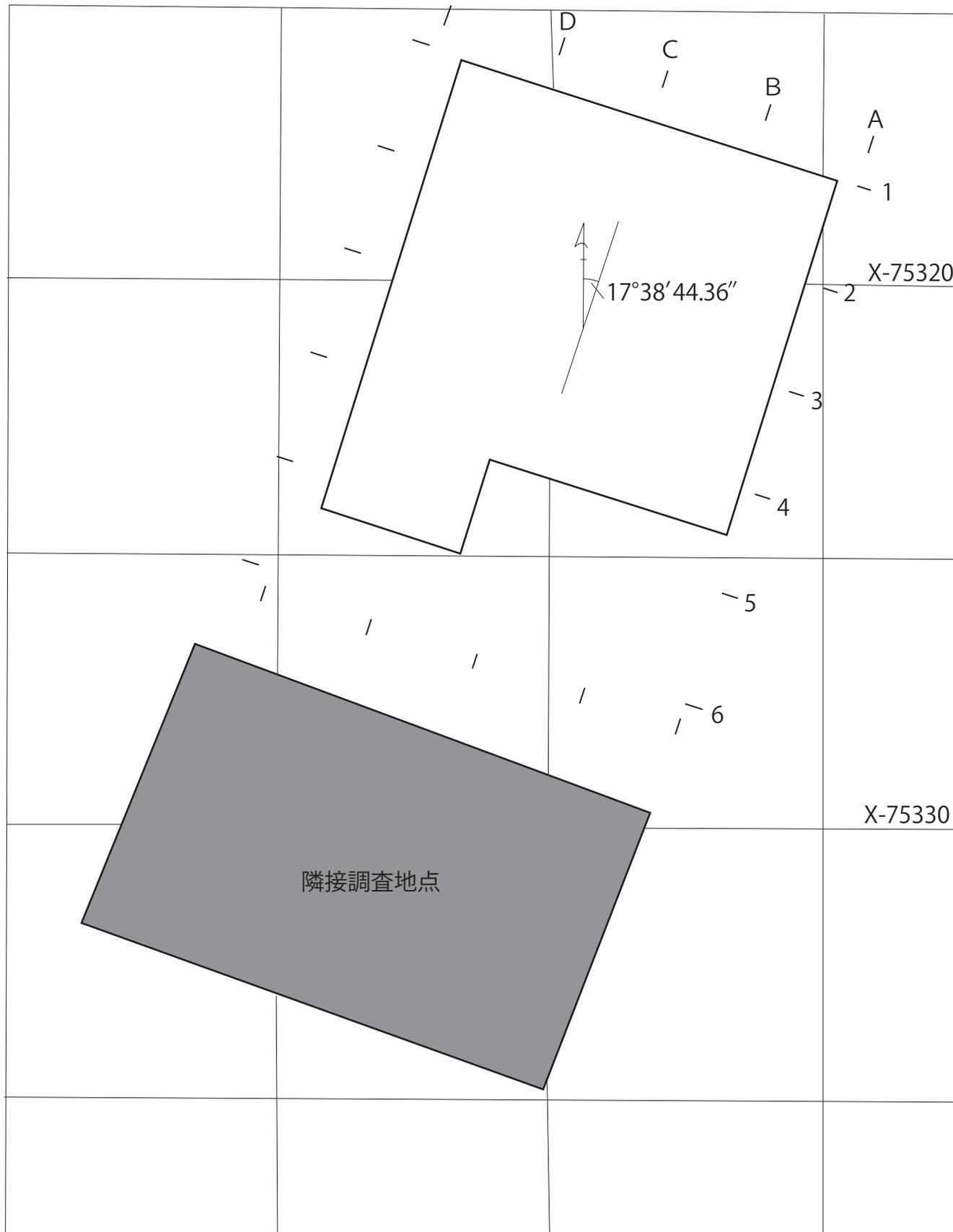
調査は平成24年7月26日までの間に必要な記録作業を行い、同時に機材を撤去して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

日誌抄

- 6月14日(木) 調査区を設定して現地表下15cmまで人力で表土掘削を実施。測量用の海拔高を鎌倉市三級水準点から原点レベルを敷地内に移動。機材の搬入。環境整備。
- 6月25日(月) 鎌倉市4級基準点を基に測量軸方眼の設定。
- 6月26日(火) 第1面の遺構確認作業を開始。
- 7月2日(月) 第1面平面図、個別遺構断面図作成。
- 7月5日(木) 第1面全景写真の撮影、個別遺構の写真撮影。第2面まで掘り下げ。
- 7月10日(火) 第2面遺構確認作業を開始。
- 7月20日(金) 第2面平面図、個別遺構断面図作成。
- 7月23日(月) 第2面全景写真の撮影、個別遺構の写真撮影。
- 7月24日(火) 最終深堀設定、掘削、図面作成。
- 7月26日(木) 現地調査終了。機材撤収。

Y-24190

Y-24180



S = 1/100

図4 グリッド配置図

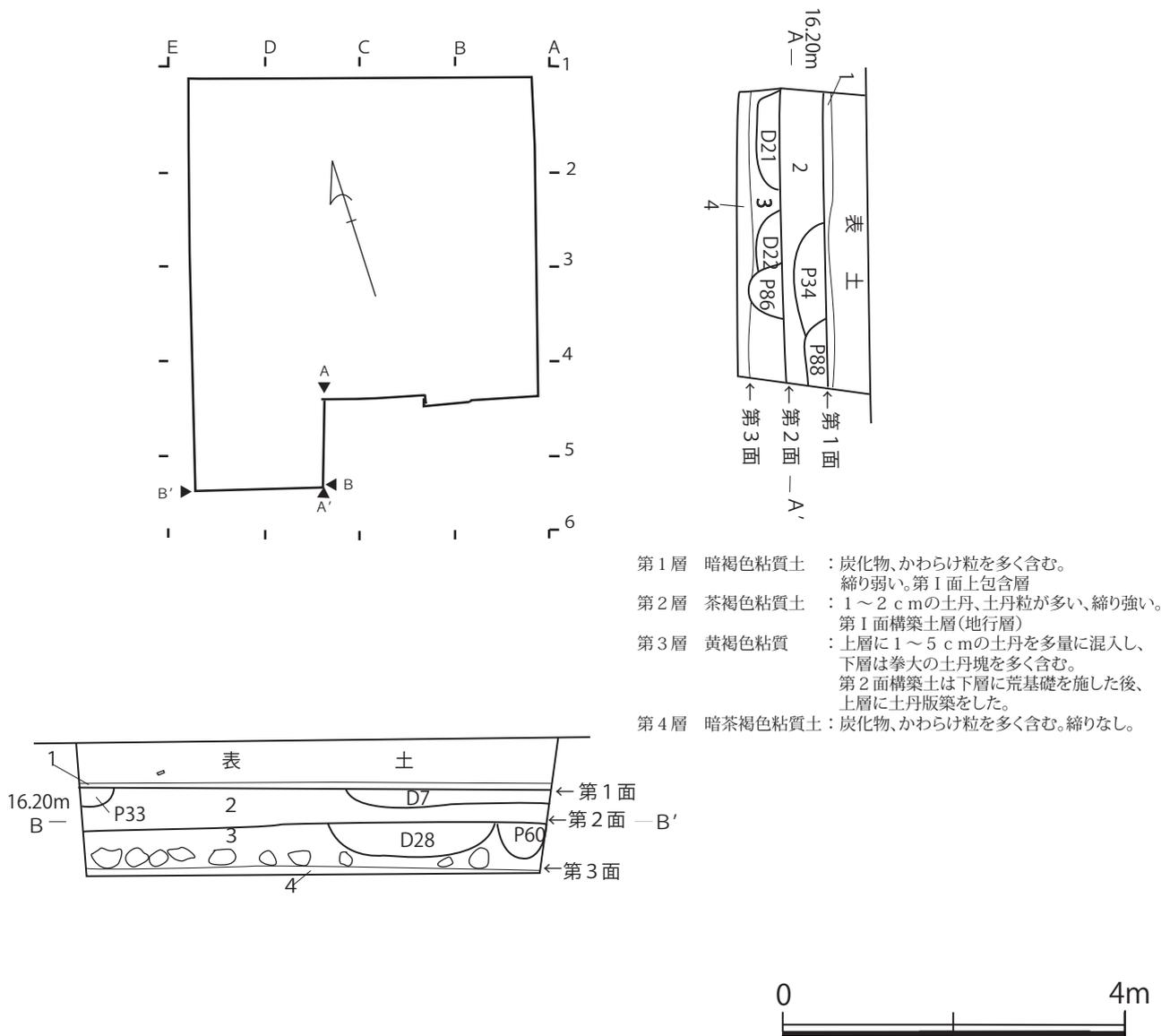


図5 調査区堆積土層図

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量軸の設定には図4に示したように国土座標の数値(世界測地系IV系)を用いており、測量グリッドは調査区の軸方向にほぼ平行して東西の基準軸を設け調査を実施した。また南側の隣接した地点は(株)博通による発掘調査が重複した期間(平成24年6月21日から6月28日)で実施された。近接した地点から考えて同一敷地内の遺構検出も予想されたので(株)博通の協力により測量軸を統一して設定することにした。4級基準点2点の関係から開放トラバース測量により算出して測量基準点にあたるグリッド杭を設定している。更に測量軸は東西軸と南北軸2m方眼による軸線を配し東西軸はA~Eのアルファベットの名称、南北軸は1~6の算用数字をそれぞれ付してグリッド設定を行った。なおグリッドの南北方位はN-17°38'44.36"-Eである。

3. 層序

調査区は現地表面の海拔の高さを約16.60m測る。調査区の北側は若干下がる様相を示すがおおよそ平坦な宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査を基に、現地表下約15cmまで堆

積していた近現代の客土を人力により掘り下げ、遺構の確認を実施した。調査は深度規制が現地地表下60cmまでであり、土層の観察もそれまでとする。土層堆積は表土以下の第1層の遺物包含層から現地地表下60cmの間に3枚の生活面が確認される。調査区南壁、東壁の土層堆積の観察は図5に示した通りである。

表土の堆積土を除去すると、締りの弱い暗褐色粘質土の遺物包含層第1層が薄く堆積するのが観察された。この包含層を取り除くと1～2cm大の泥岩、泥岩粒を多く混入した締りの強い茶褐色粘質土の地形層である第2層が検出され、これを第1面として調査を行った。第1面の海拔は16.40 mである。遺構は井戸、土坑、柱穴、かわらけ溜りを検出した。第1面を構成する地形層は20cm～25cmの厚みを持ち、これを掘り下げると、泥岩を版築した地形層第3層が現れる。これを第2面とした。第3層は黄褐色粘質土で上層は1～5cmの泥岩を多量に混入し、下層は拳大の泥岩塊を多く含む。下層に荒基礎を施した後、上層に泥岩により版築をした様子が観察できる。第2面の海拔は16.20cmであり、建物址、土坑、柱穴、かわらけ溜り等の検出がある。第2面を構成する第3層は30cmの厚さを持つ。土層の観察をするために設けた最終深堀坑では調査区壁面で第4層を確認した。海拔は15.90mであり、これを第3面としたが掘削深度規制を上回るため、土層観察のみの調査である。しかし、これにより、以下の土層にも遺構が存在することに期待が持てた。第4層は、暗茶褐色粘質土、炭化物、かわらけ粒を多く含み締まりはない。

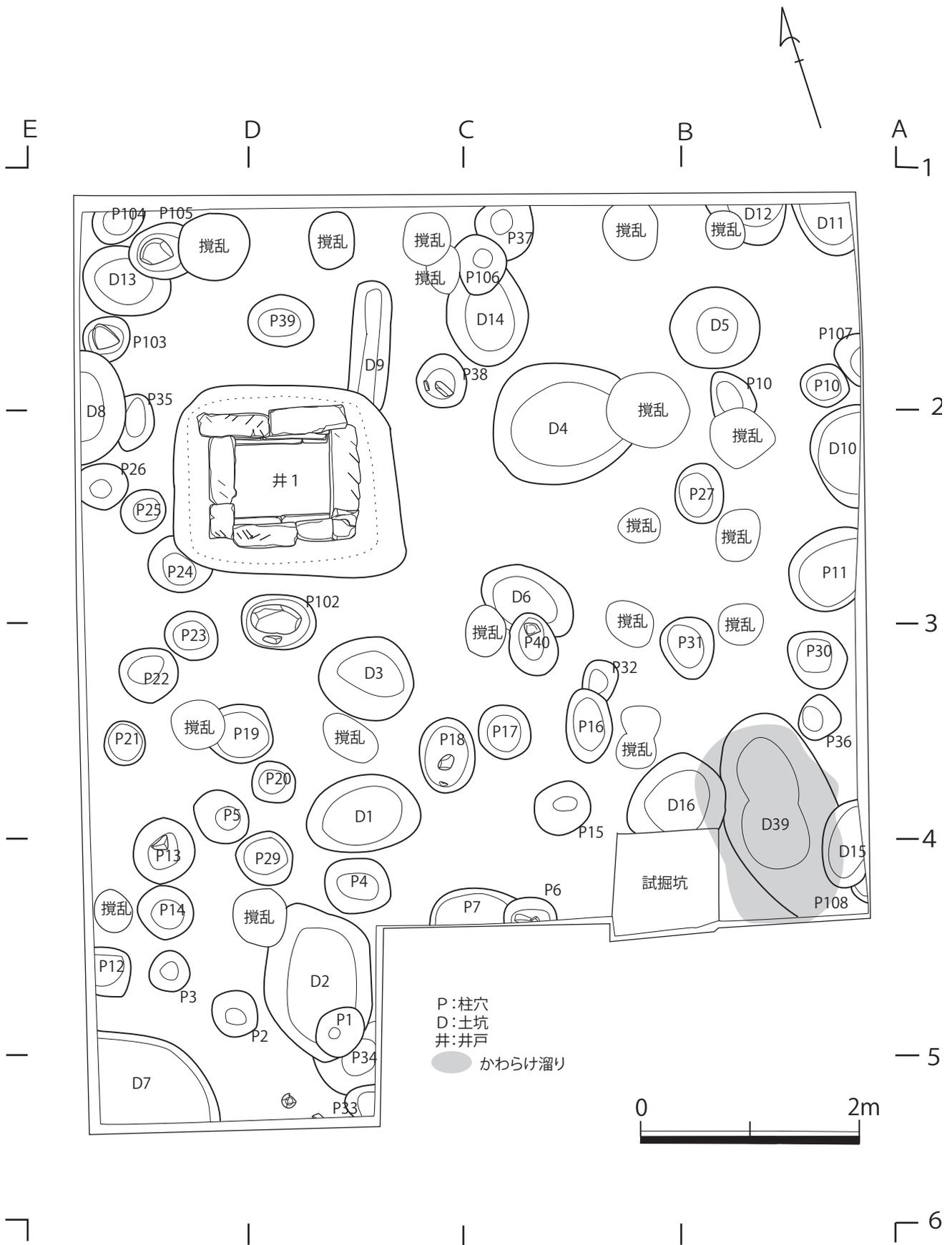


図6 第1面全体図

第三章 検出された遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構と遺物 (図6～15)

この面は締りの強い茶褐色粘質土で、1～2cmの泥岩と泥岩粒により地形している。海拔は16.25～16.40cmを測る。検出された遺構は井戸1基、土坑39基、柱穴108穴、かわらけ溜り1箇所である。出土した遺物は弥生式土器、ロクロ成形主体のかわらけ、白かわらけ、青磁、白磁、青白磁、褐釉の貿易陶磁器、国産陶器は備前・瀬戸・常滑窯製品、ほかに瓦質製品、瓦、鉄製品、土製品、石製品等である。

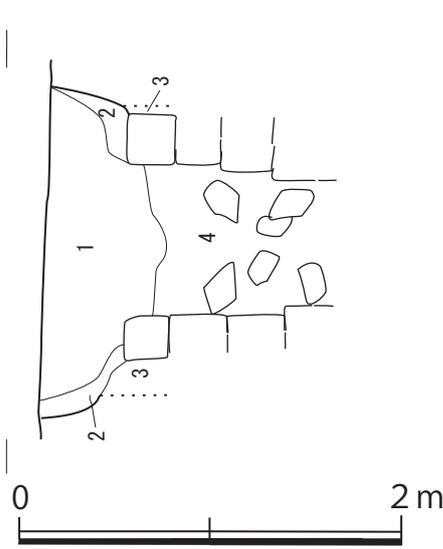
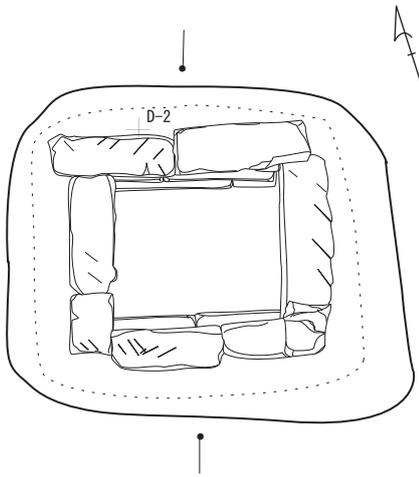
井戸1 (図7・8)

調査区の北西C-2グリッドで検出された。当初方形に泥岩が充填されて検出されたため、方形土坑と捉えていたがそれを取り除くと石組みの井戸が現れた。鎌倉市の許可の元、深さ1.5mまで調査することが出来た。

井戸は四方を凝灰質砂岩(鎌倉石)の切り石で囲い、4段に組んである。全体の規模は東西1.4m、南北1.3m。井戸の内側の規模は東西91cm(3尺)、南北84cm(2尺8寸)であり、やや東西に長い。主軸方位N-20°-W。重複関係は土坑9、柱穴24を切る。遺存状態は良好であり、切り石の表面は鑿により丁寧に加工されている。一つの切り石の高さは一律に30cmで、幅はおおむね60cmのもの20cm～40cmのものがあり、それを組み合わせる。東面の上から一段目は大きく欠損するが、北東隅では南面の切り石と巧妙にL字に切り合せている。4段目の南北側の切り石は5cm程内側に張り出して組まれる。覆土は拳から人頭大の泥岩をやや多く混入する暗黄褐色弱粘質土である。掘り方は井戸枠から15cmから40cmの幅で掘られ、かなり狭い印象がある。出土遺物の図8-1はかわらけ小皿であり、体部が直線的に立ち上がる。2もかわらけ小皿であり、体部が直線的に立ち上がる。3から6はかわらけ中皿と大皿である。3は中皿であり、器高が低く、内底面に強いナデが残る。4も中皿である。体部がやや膨らみ口縁部は外反する。内底面にナデが残る。5は深めの大皿であり内底面にナデが残る。6は大皿である。体部がやや丸みを持ち内底面にナデが入る。7は瀬戸の折縁皿の口縁である。6、7は裏込めからの出土である。

かわらけ溜り (図9)

調査区南東のA-3・4グリッドで検出したかわらけ溜りである。かわらけは破片を主体に大小の泥岩塊と混じり、面上に南北1.7m・東西1.2m程の範囲で平面的な拡がりを確認することができた。他に瓦質香炉や軒丸瓦等の破片、毛抜きが混在していた。かわらけの残存率が悪く細かい破片ばかりであることや、泥岩塊、香炉や平瓦の破片の混在遺物があること、加えて、確認できたかわらけは圧倒的に大皿が多く、小皿が少なかったこと。かわらけは土坑39に廃棄されたものではなく、上層に平面的に広がることなどから、かわらけを「割る」行為が目的にも見て取れ、祭祀的な要素が強いといえよう。土坑39はかわらけや泥岩を取り上げると浅い皿状に窪みが検出され、かわらけ溜りに伴う遺構とした。かわらけ溜りの規模は南北に細長く、東西1.2m、南北1.8mを測る。主軸方位はほぼ真北である。土坑39はやはり南北に細長く北側を調査区外に延びるが確認できただけでも南北2mを測り、東西は0.55mである。断面形は浅い皿状であり主軸方位はほぼ真北を示し、重複関係は土坑15・16に切られる。出土遺物は接合率はあまり良いとはいえなかった。図9-1は小型のかわらけである。体部はやや外反する。2～10は大型のかわらけである。



- 第1層 黄灰色土丹塊層 : 3 cm~拳大の土丹塊を多量に混入した
埋め立て土
- 第2層 暗褐色粘質土 : 1 cm~拳大の土丹塊多量、土丹粒、かわ
らけ粒を少量含む。
- 第3層 茶褐色粘質土 : 拳大の土丹少量、炭化物、かわらけ粒を
やや多く含む。締めやや強い。(真込め)
- 第4層 暗黄褐色弱粘質土 : 拳から頭大の土丹塊、凝灰岩(鍾乳石)
を多めに含む。粗砂、炭化物少量含む。
下層へ移る次第に炭化物多い。

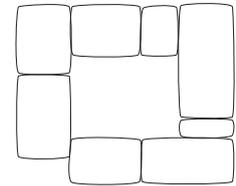
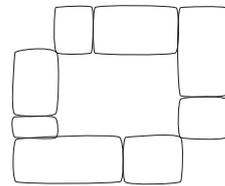
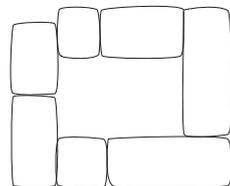
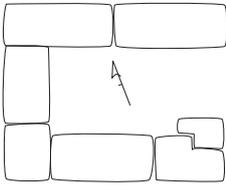
石組み模式図

1段目(上から)

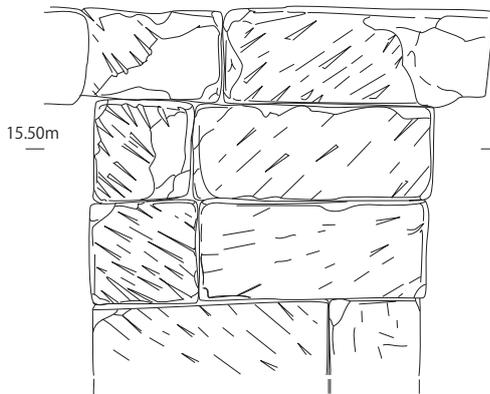
2段目

3段目

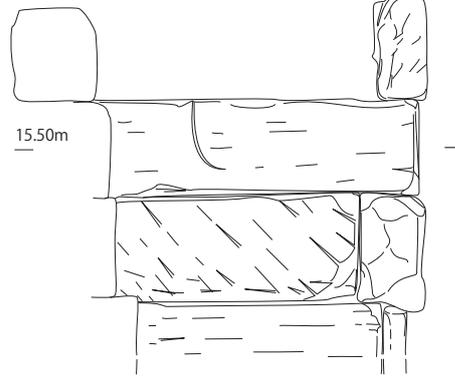
4段目



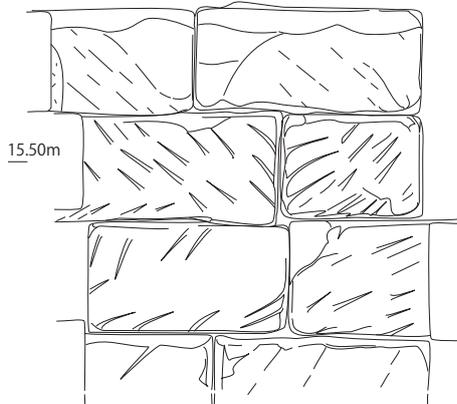
北面



東面



南面



西面

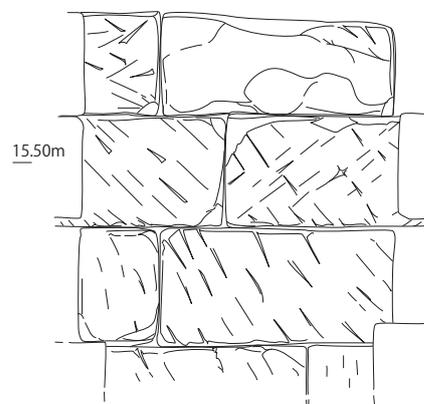


図7 第1面 井戸1

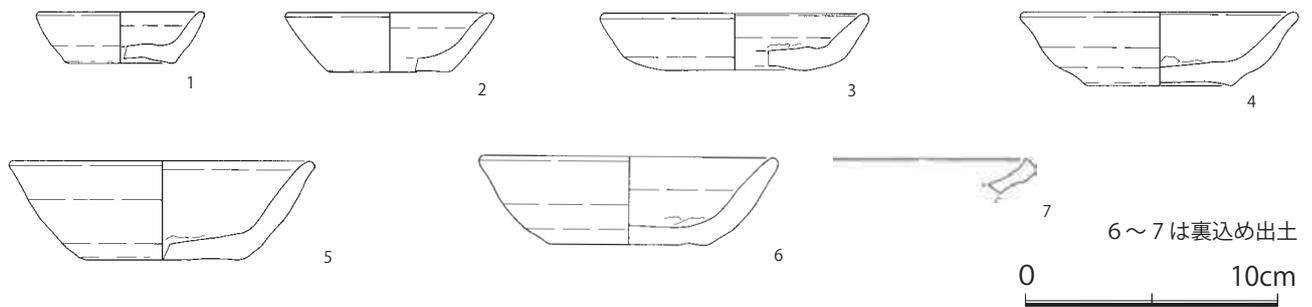


図8 第1面 井戸1出土遺物

2は直線的に立ち上がる。3は体部下方に丸みを持つ。4は口径が開き、体部は直線的に立ち上がる。5は体部下方に稜を持ちやや膨らむ。6は直線的に立ち上がる。7は体部真中あたりに強い稜を持つ。8は全体に外反気味である。9は直線的に立ち上がる。10はやや丸みを帯びる。11は瓦器質の火鉢の脚部である。河野分類のIV類で表面を炭素吸着させ、黒色処理している。12は瓦質の香炉である。黒色処理され、小型菊花スタンプと連珠貼り付け文で装飾される。13は右廻三巴文軒丸平瓦である。14は鉄製品の毛抜きである。15から20は釘である。

土坑(図10～11)

土坑1: C-3グリッドで検出した。平面形は楕円形であり規模は73×10.5cmを測る。断面形は逆台形であり、主軸方位はN-95°-Wである。出土遺物の図10-1は小型のかわらけである。体部真中あたりが少し張る。2は大型のかわらけである。薄手でやや内湾する。

土坑2: C-4グリッドで検出した。平面形は不正円形であり、規模は98×15cmを測り、断面形は緩い逆台形である。主軸方位はほぼ真北である。出土遺物の図10-3は大型のかわらけである。体部中ほどに稜を持つ。

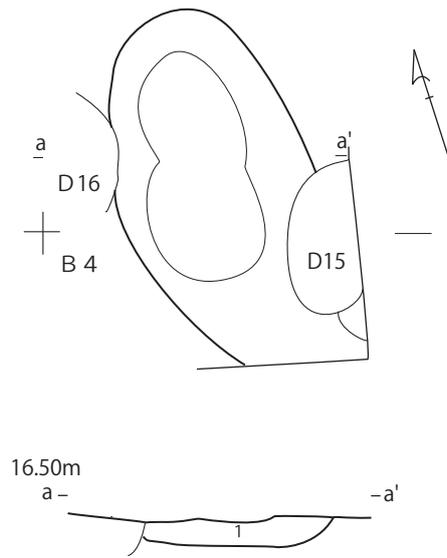
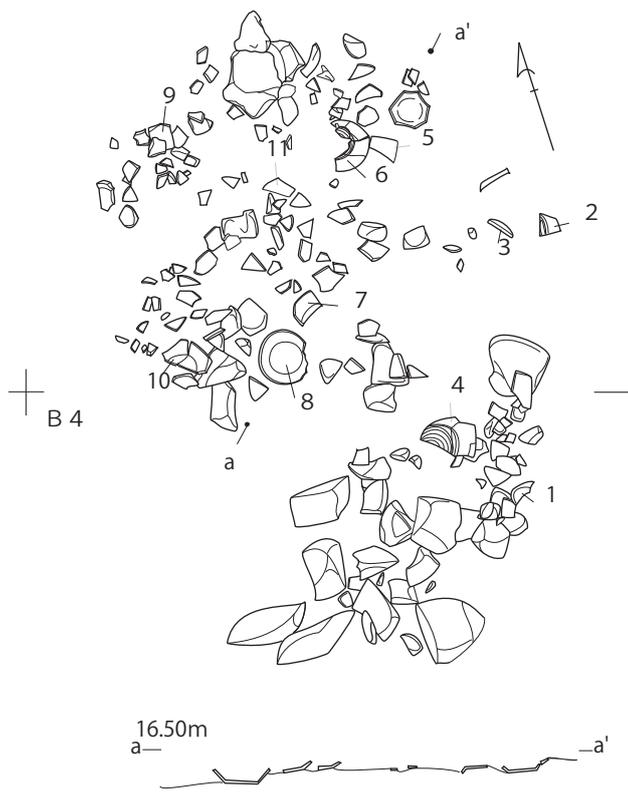
土坑3: C-3グリッドで検出した。平面形は円形であり、規模は87×77cmを測る。断面形はほぼ逆台形であり、主軸方位はN-33°-Wである。出土遺物の図10-4は瀬戸卸皿の底部である5は平瓦片で鶴岡八幡宮創草期B類と同類である。凹面は縄目が転写、離れ砂顕著。凸面は縄目叩きがある。

土坑4: B-1・2グリッドで検出した。平面形は不正円形であり、規模は115×(10.5)cmを測る。断面形は緩い逆台形であるのか、東側を攪乱に切られ形態不明。主軸方位はN-92°-Wである。出土遺物の図10-6は常滑の壺である。折り返し口縁の下端がヘラ削りされている。三耳壺によく見られる口縁である。7は瀬戸卸皿の口縁、卸目が口縁近くまで上がっている。中期様式のI期か。8は摩耗陶片、常滑の甕片の端部を使用している。

土坑5: A-1グリッドで検出された。平面形は円形であり、規模は82×75cmを測る。断面形は逆台形である。出土遺物の図10-9は凸部を持つ白かわらけ片、形態から蓋と判断した。色調は暗灰色である。

土坑6: B-2グリッドで検出した。平面形は楕円形で、規模は92×61cmである。断面形は箱型を呈する。攪乱、柱穴40に切られる。主軸方位はN-140°-Wである。出土遺物の図10-10はの小型のかわらけ皿である。

土坑7: 調査区南西隅のA-2グリッドで検出した。平面形、断面形は不明である。確認出来た規模は96×38cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で泥岩粒を多く含む、締りのある土である。出土遺物の図11-1は弥生式土器の壺片であり、外面に刷毛目が施してある。2はかわらけの大皿、器壁厚く直線的に立つ。3は常滑の甕の肩部の格子目の押印部分である。4は瀬戸天目茶碗であり、断面に漆が残る。漆継ぎしたものであろう。



第1層 暗褐色粘質土：1～5cm大の土丹、土丹粒を多量に、かわらけ粒、炭化物を少量含む。締り弱い。

土坑39

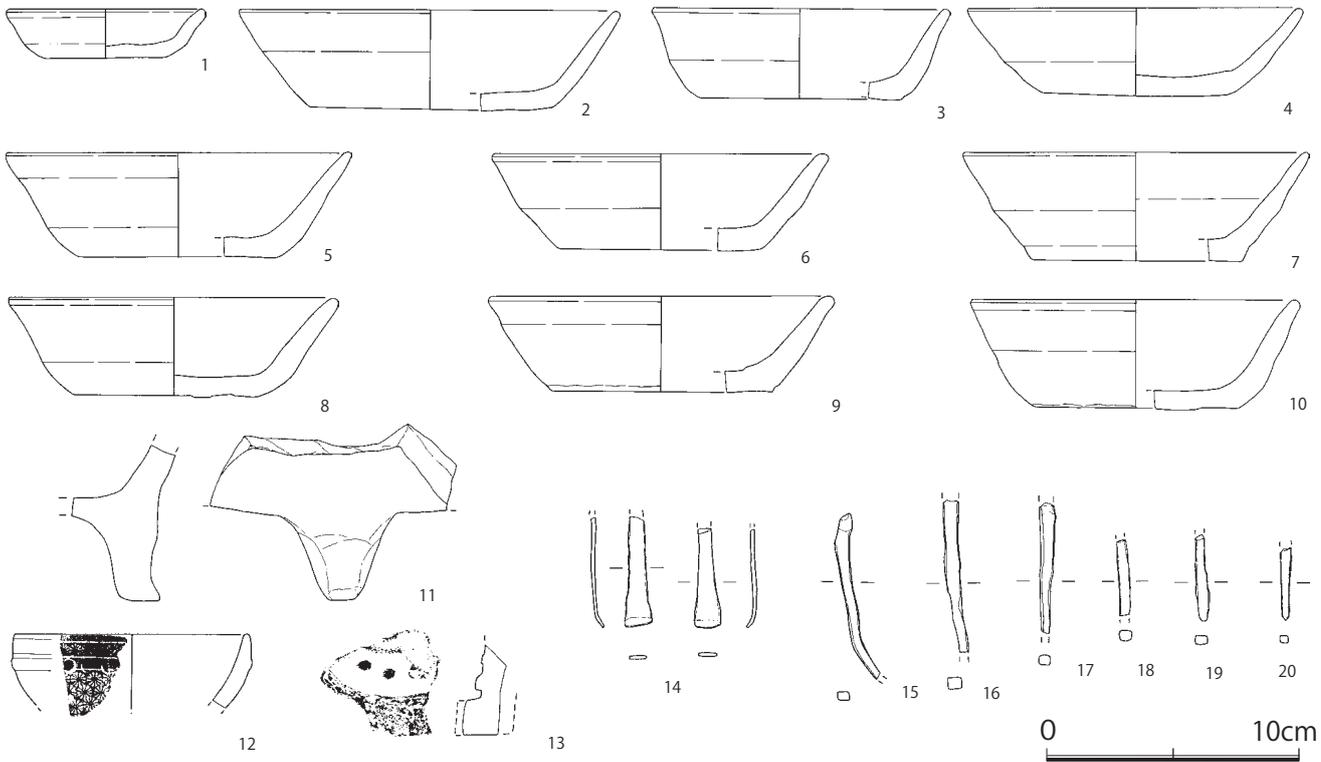


図9 第1面 かわらけ溜まり・出土遺物

土坑8：西側調査区壁沿いのB-1・2グリッドで検出された。調査区に切られるため全容は不明だが、平面形は楕円形であろう。規模は96×(38)を測り、断面形は皿状である。切り合い関係は柱穴35を切る。出土遺物の図11-5はかわらけの中皿である。ロクロ目がやや強く口縁部外反する。体部中位に稜を持ち、器壁は厚い。6はかわらけの大皿である。直線的に立ち、内底面にナデが残る。

土坑10：調査区東壁のA-2グリッドで検出した。調査区に切られるため全容は確認できないが、平面形は円形もしくは楕円形だろうか。確認出来た規模は96×(38)cmである。断面形はU字形か。主軸方位はN-22°-Wである。出土遺物の図11-7は復元径が10cm位のかかわらけ中皿だが、胎土がやや粗土である。8はロクロ成形の白かわらけ底部、火を受けている。9は褐釉の壺胴部である。10は龍泉窯青磁の折腰鉢口縁部である。11は北宋銭の皇宋通寶、篆書で、初鑄年は1038年である。「宋」の部分欠けているが篆書で頭に「皇」を持つのは皇宋通寶だけなのでそれによった。外径2.4cm、内径1.9cmを測る。

土坑13：D-1グリッドで検出した。東側で柱穴105に切られる。平面形は楕円形、確認出来た規模は82×48cmである。掘り方は断面皿状を呈する。主軸方位はN-106°-Wである。出土遺物の図11-12はかわらけ大皿である。体部は直線的に立ち上がる。

土坑15：調査区南東隅のA-3・4グリッドで検出した。土坑39、柱穴108を切る。東側を調査区に切られ全貌を明らかとしないが、平面形は楕円であろう。確認出来た規模は84×33cmである。断面は逆台形を呈する。主軸方位はN-30°-Wである。出土遺物の図11-13は鉄釘であり、残存している長さは5.1cmである。

土坑16：A・B-3グリッドで検出した。土坑39を切る。平面形は不正円形、確認できた規模は92×(70)cmを測る。断面形は皿状であり、主軸方位はほぼ真北を示す。出土遺物の図11-14は瓦質香炉である。炭素吸着させて黒色処理している。体部には菊花文スタンプが密に施され、口縁近くには連珠文が配される。

柱穴(図12～13)

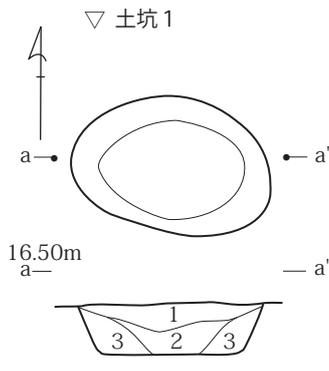
柱穴は47穴検出されたが、建物として配列をつかむことはできなかった。また特別特徴的な検出のされ方もしていない。しかし調査区を広げれば建物は建つ可能性はあろう。以下出土遺物の図示しえたものに限って説明を加える。

柱穴3：D-4グリッドで検出された。平面形は円形である。規模は49×38cmであり、断面形はU字型である。覆土は暗褐色粘質土で泥岩粒を多く含む締りのある土である。出土遺物の図13-1は瀬戸の口縁が輪花型の香炉か。表面は鉄釉により黒褐色である。2は平瓦片である。表面離れ砂、裏面は斜格子の叩き目が残る。永福寺Ⅲ期E類と同類である。3は渥美の摩耗陶片で、端部を全周使用している。

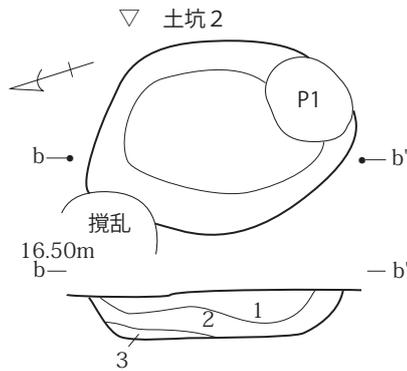
柱穴5：D-3グリッドで検出した。平面形は不正円形で、規模は55×50cmを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-4はかわらけの大皿である。器壁が厚くやや丸みを帯びるが、ほぼ直線的な立ち上がりとみていだろう。

柱穴7：調査区南壁に切られてB・C-4グリッドで検出した。柱穴6に切られる。平面形は概ね楕円形を呈する。確認できた規模は(70)×(33)cmを測る。断面形は浅い箱型か。覆土は暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-5、6は小型のかかわらけ皿である。5の胎土はやや粗土である。6は口縁に油煙煤が付着する、灯明皿であろう。

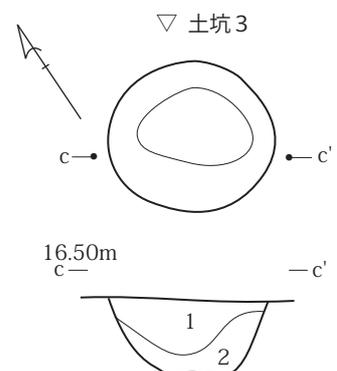
柱穴10：A-1グリッドで検出した。攪乱に切られる。平面形は不正円形で、確認出来た規模は41×(38)cmである。断面は逆台形を呈する。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-7は東濃型山茶碗である。高台に初殻痕残り、内面は青色の透明な自然降灰釉が残る。8は龍泉窯青磁蓮弁文椀



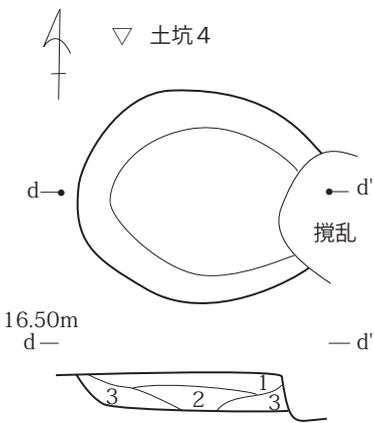
第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、炭化物を多量に含み粘性がある。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒を多く含む、縮りややあり。
 第3層 暗茶褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物、かわらけ片を多く含む。縮り弱い。



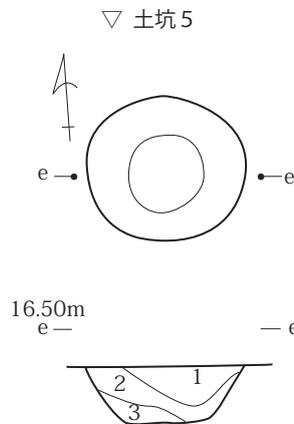
第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、土丹粒を多めに含む。縮りややあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物が多く、かわらけ粒を少量含む。縮りあり。
 第3層 暗茶褐色粘質土 : 土丹粒、かわらけ粒を多く含む。縮りやや弱い。



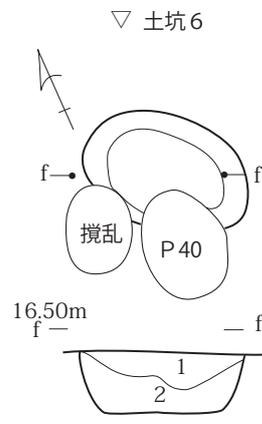
第1層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物、かわらけ片を多く含む。縮りややあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、炭化物を多量に含む。縮りあり。



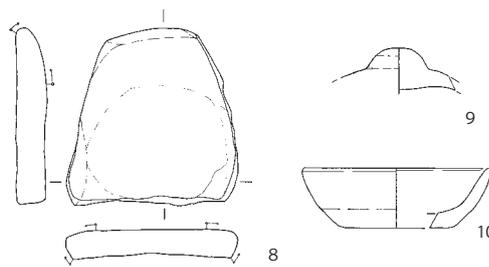
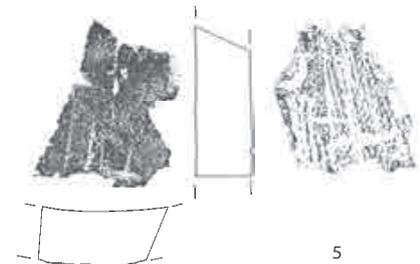
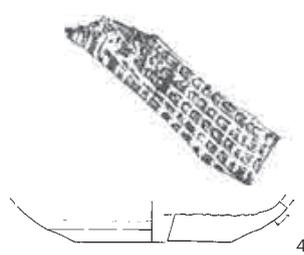
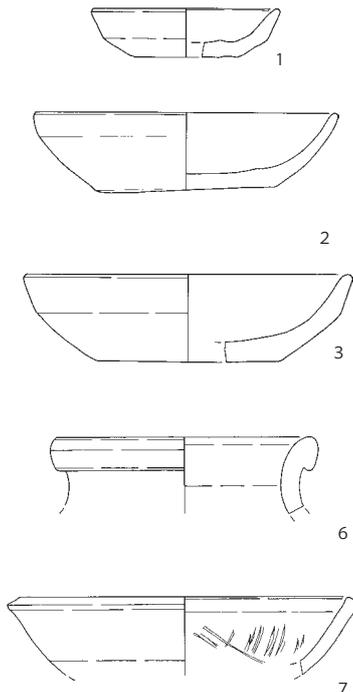
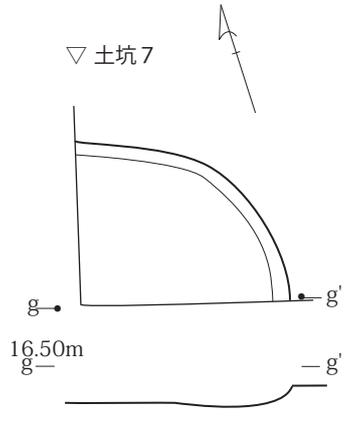
第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、炭化物を多量に含む。縮りあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、かわらけ粒を多く含む。縮りややあり。
 第3層 暗茶褐色粘質土 : 土丹粒、かわらけ粒をやや多く含む。縮りやや弱い。



第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、炭化物を多く含む。縮りややあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物を多く含み、かわらけ粒を少量含む。
 第3層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、かわらけ粒を多く含む。縮り弱い。



第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、土丹粒を多く含む。縮りややあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物を多く含む。縮り弱い。



1~2 : 土坑1
 3 : 土坑2
 4~5 : 土坑3
 6~8 : 土坑4
 9 : 土坑5
 10 : 土坑6



図10 第1面 土坑(1)・出土遺物

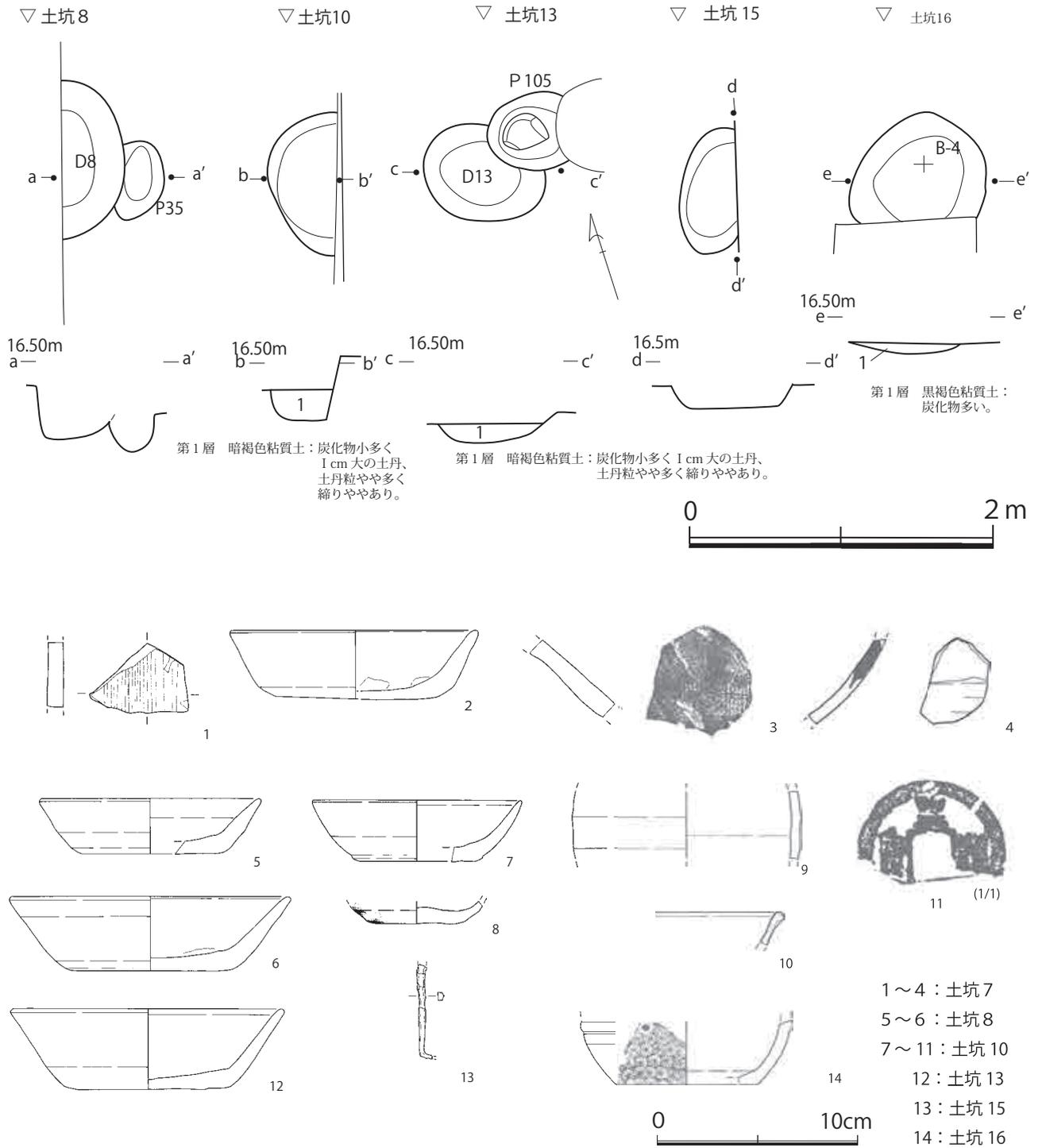


図11 第1面 土坑(2)・出土遺物

である。内外面稜花を施す。

柱穴12：調査区西壁沿いのD-4グリッドで検出した。西側を調査区に切られるため全容を明らかにしないが、平面形は楕円形か不正円形で、規模は45×(45)cmを測る。断面形はU字形か。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-12は常滑壺の口縁である。13は瀬戸の洗である。内底面に同心円の沈線巡る。

柱穴13：D-3・4グリッドで検出された。平面形は円形で、規模は64×58cmである。断面形は逆台形を呈する。覆土は泥岩粒を混入する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-9はやや内湾するかわらけの

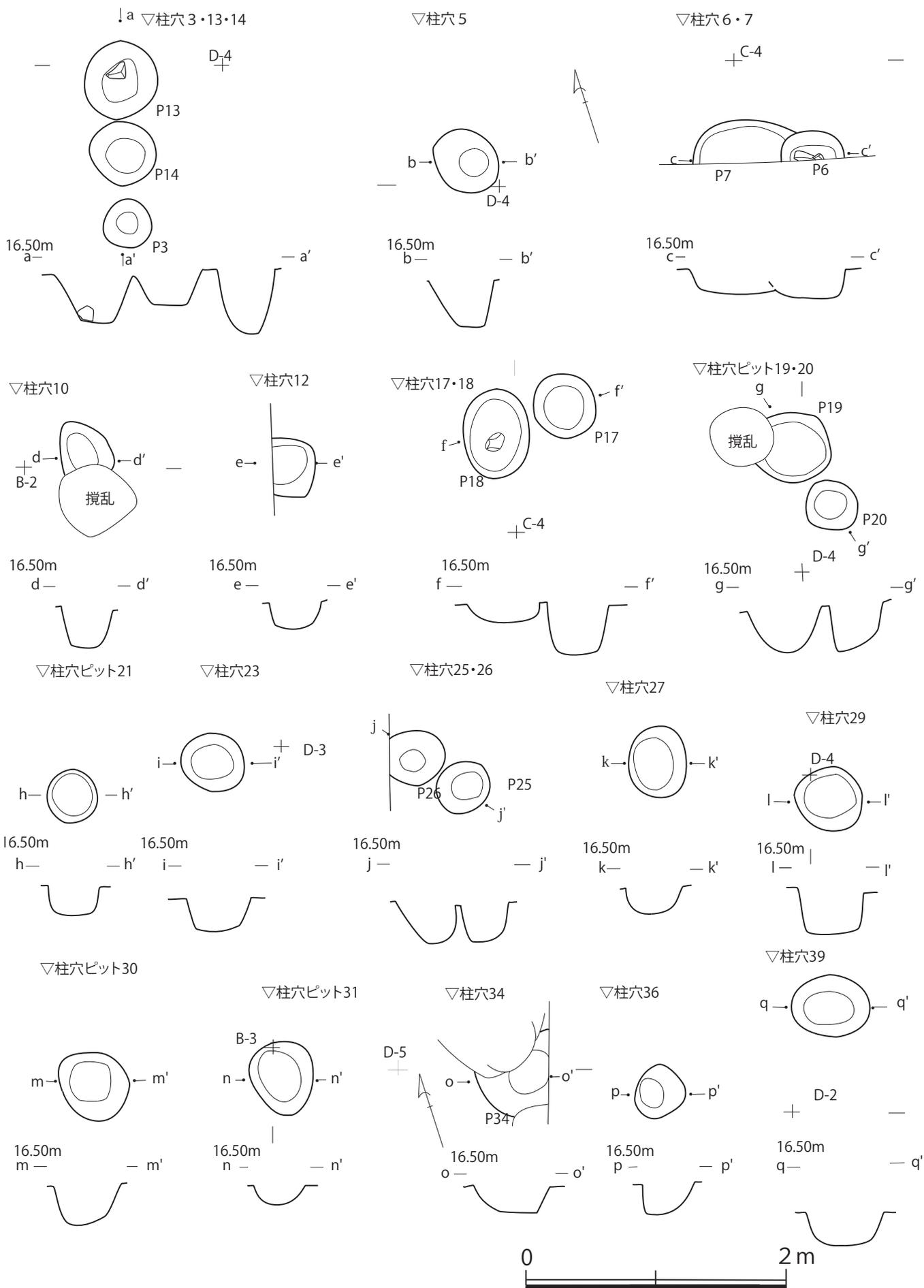


図12 第1面 柱穴

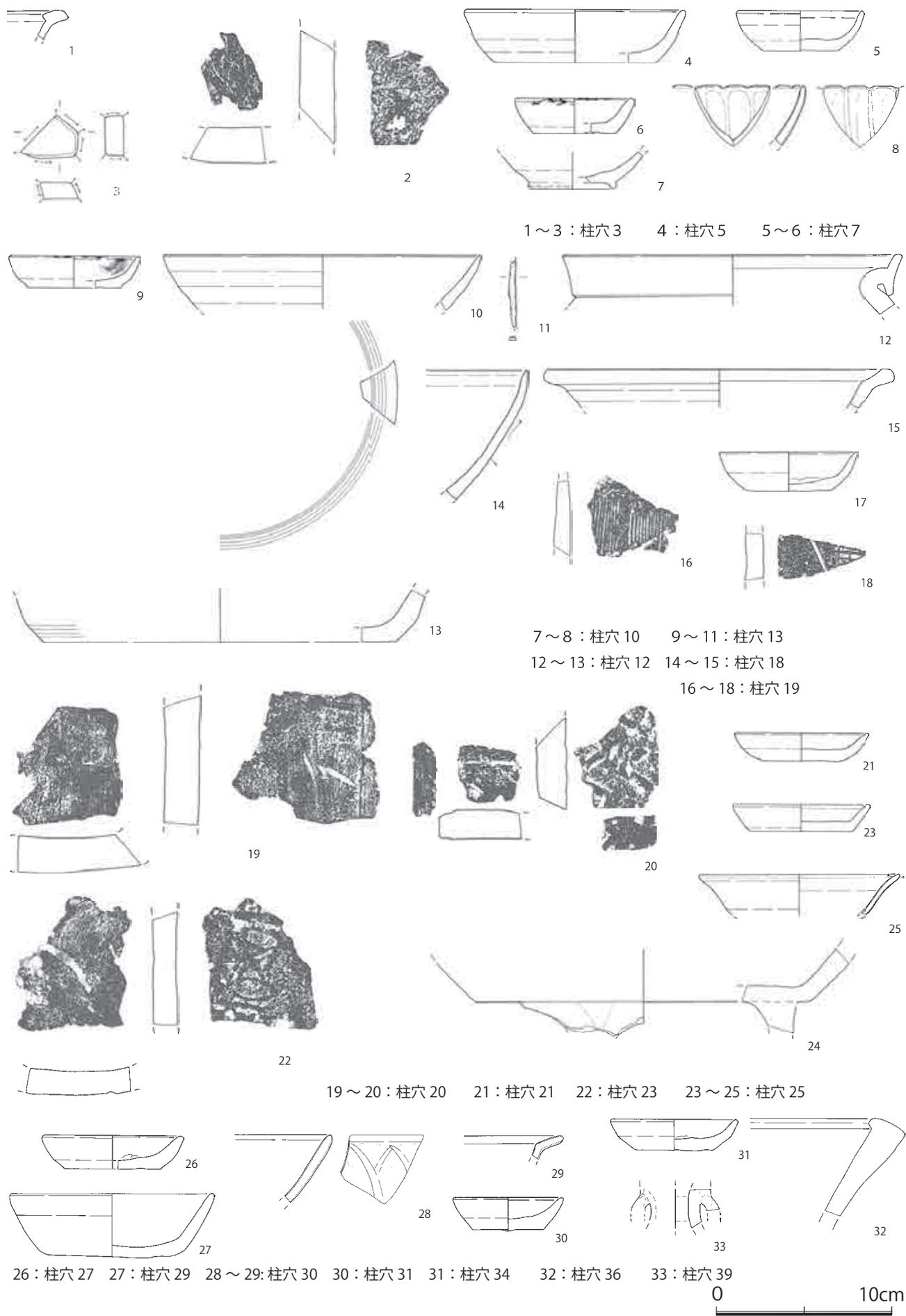


图13 第1面 柱穴出土遺物

表3 第1面遺構観察表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深度	底標高	覆土/備考
P1	C-4	51	42	21	16.185	暗褐色A/P34・D2を切る
P2	D-4	47	43	32.5	16.075	暗褐色B
P3	D-4	49	38	41.5	15.985	暗褐色A
P4	C-4	63	54	30	16.02	暗褐色A
P5	D-3	55	50	36	15.975	暗褐色B
P6	B-4	50	(24)	19.5	16.19	暗褐色A/P7を切る
P7	B・C-4	(70)	(33)	13	16.255	暗褐色A
P9	A-1	45	40	21	16.1	暗褐色B
P10	A-1	41	(38)	27.5	16.035	暗褐色B
P11	A-2	84	(61)	19	16.15	暗褐色B
P12	D-4	45	45	70.5	16.19	暗褐色B
P13	D-3・4	64	58	62	15.995	暗褐色A
P14	D-4	52	50	27	16.12	暗褐色A
P15	B-3	54	51	39	16.0	暗褐色A
P16	B-3	68	43	21	16.145	暗褐色A/P3を切る
P17	B-3	50	50	35.5	16.025	暗褐色A
P18	C-3	70	55	30.5	16.075	暗褐色A
P19	C・D-3	60	46	26	16.5	暗褐色A
P20	C-3	44	43	27.5	16.04	暗褐色A
P21	D-3	40	40	19.5	16.135	暗褐色B
P22	D-3	54	51	31.5	16.02	暗褐色B
P23	D-2・3	50	46	18.5	16.15	暗褐色A
P24	D-2	59	(35)	18.5	16.13	暗褐色B
P25	D-2	47	38	25	16.055	暗褐色A
P26	D-2	43	43	71	15.995	暗褐色A
P27	A-2	57	45	18.5	16.165	暗褐色B
P29	C-4	53	53	28.5	16.09	暗褐色B
P30	A-3	56	53	49.7	15.87	暗褐色A
P31	A-3	60	50	21.5	16.145	暗褐色A
P32	B-3	(32)	31	0.5	16.2	暗褐色B
P33	C-5	(29)	(28)	9.5	16.345	暗褐色A/P34を切る
P34	C-4・5	(53)	(51)	18.5	16.23	暗褐色A
P35	D-1・2	54	(25)	25	16	暗褐色B
P36	A-3	43	39	24.2	16.138	暗褐色A
P37	B-1	54	(38)	23.5	16.025	暗褐色B/D14を切る
P38	C-1	50	46	29	16	暗褐色B
P39	C-1	60	48	23.5	16.02	暗褐色B
P40	B-3	60	43	41	15.955	暗褐色B/D6を切る
P102	C-2・3	69	50	10	16.22	暗褐色A
P103	D-1	43	38	11	16.075	—
P104	D-1	47	(25)	20	15.97	暗褐色B
P105	D-1	(61)	55	26.5	15.94	暗褐色B/D13を切る
P106	B-1	55	(37)	42	15.89	暗褐色B/D14・P37を切る
P107	A-1	50	(25)	52	15.745	暗褐色B
P108	A-4	(30)	(13)	0.5	16.36	—
D1	C-3	73	10.5	25.5	16.08	暗褐色B
D2	C-4	(98)	15	29	16.13	暗褐色A/P34を切る
D3	C-3	87	77	28.5	16.04	暗褐色B
D4	B-1・2	115	(105)	20	16.14	暗褐色B
D5	A-1	82	75	28	16.03	暗褐色B
D6	B-2	92	61	30	16.07	暗褐色A
D7	D-5	110	(78)	15	16.28	暗褐色A
D8	D-1・2	108	(42)	12	16.1	P35を切る

遺構番号	グリッド	長径	短径	深度	底標高	覆土/備考
D9	C-1	36	(12)	16	16.13	暗褐色B
D10	A-2	96	(38)	17	16.135	暗褐色B
D11	A-1	84	(60)	19.5	16.5	暗褐色B
D12	A-1	74	(40)	17.4	16.08	—
D13	D-1	82	(48)	15.5	16.03	暗褐色B
D14	B-1	76	(69)	16.5	16.145	暗褐色A
D15	A-3・4	84	(33)	7.5	16.255	D39・P108を切る
D16	A・B-3	92	(70)	7.5	16.255	黒褐色C
D39	A-3・4	211	108	85	16.255	—

(単位：海拔m/以外cm)

P:ピット
D:土坑

遺構覆土詳細

暗褐色A：暗褐色粘質土 1cm大の泥岩、泥岩粒多く、縮りあり。

暗褐色B：暗褐色粘質土 炭化物多く、1cm大の泥岩、泥岩粒やや多く、縮りややあり。

黒褐色C：黒褐色粘質土 炭化物多く、縮りない。

小皿である。口縁に油煙煤が付着し、灯明皿として使用した痕跡が残る。10は瀬戸の碗である。やや黄色がかかった緑色の釉が全体に施釉される。11は鉄釘である。3.7cmを測る。

柱穴18：C-3グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は70×55cmである。断面形は皿状で、覆土は泥岩粒を混入する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-14は瀬戸の平碗である。体部途中から内面にかけて施釉される。15は瀬戸の折縁皿口縁である。内外面刷毛により施釉され、色調は黄白色である。

柱穴19：C・D-3グリッドで検出された。西側を攪乱に切られる。平面形は不正円形、規模は60×46cmを測る。断面形はU字形であり、覆土は泥岩粒をまじえる暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-16は弥生式土器の壺の胴部と思われ、刷毛目が残る。17はかわらけの小皿である。内底面にナデが残る。18は常滑の甕片であり、格子目の押印部分である。

柱穴20：C-3グリッドで検出した。東側で柱穴19を切る。平面形はほぼ円形、規模は44×43cmである。断面形はU字を呈する。覆土は泥岩を混入する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-19・20とも平瓦である。19は表面に離れ砂、縦位のナデを残す。裏面は格子の叩き目がある。胎土はやや粗土な土器質。永福寺Ⅱ期C類と同類である。20の表面は離れ砂、裏面は斜格子の叩き目がある。胎土は砂粒、白色粒、小石粒の混入したザクザクとした粗土な瓦質である。永福寺Ⅲ期E類と同類である。

柱穴21：D-3で検出した。平面形はほぼ円形で、規模は40×40cmである。断面形は箱型を呈する。覆土は炭化物を多く含有する暗褐色粘質土である。出土遺物は図13-21の器壁がやや厚いかかわらけ小皿である。

柱穴23：D-2・3で検出された。平面形は円形である。規模は50×46cmを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は泥岩を混入した暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-22は平瓦である。胎土はやや粗土で、表面は離れ砂が残り、裏面は丸に菱形文の叩き目が残る。永福寺Ⅲ期E類と同類である。

柱穴25：D-2グリッドで検出した。平面形は円形であり、規模は47×38cmを測る。断面形はU字型を呈する。覆土は泥岩粒を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-23はかわらけの小皿である。器壁厚く体部は直線的に立ち上がる。24は火鉢のⅢ類である。残存状態は悪いが黒色処理と磨きを施した痕跡を残す。25は白磁の口元皿である。

柱穴27：A-2グリッドで検出した。平面形は楕円形で、規模は57×45cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は炭化物を含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-26は小型皿のかわらけである。器壁厚く、内底面にナデが残る。

柱穴29：C-4グリッドで検出した。平面形はほぼ円形であり、規模は53×53cmを測る。断面形は箱型を呈する。覆土は炭化物を含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-27はかわらけの大皿である。全体に摩滅し整形は不明である。体部は直線的に立ち上がる。

柱穴30：A-3グリッドで検出した。平面形は不正円形で、規模は56×53cmを測る。断面形はU字型を呈する。覆土は泥岩粒を混入する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-28は龍泉窯の青磁鎬蓮弁文碗の口縁である。29は龍泉窯青磁折縁皿の口縁である。

柱穴31：A-3グリッドで検出された。平面形は不正円形で、規模は60×50cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は泥岩粒を含有する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-30はかわらけ皿の小皿である。器壁厚く、直線的に立ち上がる。

柱穴34：調査区東壁に切られるC-4・5グリッドで検出した。柱穴1・34・土坑2に切られるため平面形は不明である。確認出来た規模は(53)×(51)cmである。断面形はU字形か。覆土は暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-31はかわらけ小皿、内底面ナデが入る。

柱穴36：A-3グリッドで検出した。平面形は不正円形で、規模は43×39cmを測る。断面形はU字形か。

覆土は泥岩粒を含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13 - 32は火鉢のI類であり、黒色処理されている。

柱穴39：C - 1グリッドで検出した。平面形は楕円形で、規模は60 × 48cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は炭化物を含有する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13 - 33は瀬戸の仏華瓶の頸部である。鉄釉が施釉される。

第1面上出土遺物(図14・15)

層序の第1層の遺物包含層と遺構検出面の第1面上までの遺構外で出土した遺物を収めた。

1は手づくねかわらけの小皿である。2から5はかわらけの小皿である。一様に胎土は粗土であり、器壁が厚く、整形が粗雑である。6は中皿で体部の下部に稜を持つがやや外反して立つ。7も中皿で体部の下部に稜を持ちやや丸みを帯びるが外反して立つ。8は大皿でほぼ直線的に立つ。9は大皿で口唇部がやや外反する。10は大皿で体部は直線的に立ち口縁部が外反する。11は中皿で体部下半は丸みを帯び、そこから直線的に立ち口唇部が僅かに外反する。この器形が宅間ヶ谷の調査例では多く出土する。12から19は大皿である。12は口径が開き直線的に立つ。13も直線的に立つ。14は器高が高く体部下半に稜を持つが、そこから直線的に立ち上がる。15は体部下半に若干丸みを帯び、そこから口縁が開き直線的に立つ。16は体部に丸みを帯び口縁部外反する。17は体部反り返り口縁が開く。18は体部下半は丸みを帯びるがやや外反しながら立つ。19は口縁が開き直線的に立ち口唇部はやや外反する。20はとりべ状の大皿のかわらけで、内面黒灰色をなし、気泡が立つ。21は白かわらけ、皿としたが凸部を持つ蓋かもしれない。22は火鉢のIV類である。体部下部に菊花文か蓮華文の判断のしづらい花文が帯状に廻り、その上に沈線が巡り、蓮珠文が貼られていた様相を示す。23は瓦質香炉口縁部である。黒色処理され磨きが施される。体部には二段の菱形渦巻き文が配される。24も香炉である。黒色処理され磨きを施される。25は東濃型山茶碗の口縁部である。26は常滑の片口鉢I類の口縁である。27は備前のすり鉢の体部片であり、卸目が4本見て取れる。28は常滑の甕口縁である。縁帯上部は欠けるが、中野編年の6a形式のものであろう。29は瀬戸の香炉である。釉薬は緑灰色の刷毛塗りを施す。30も瀬戸の香炉であろう。内面緑灰釉で外面鉄釉である。また外面には菊花文かと思われるスタンプが施される。31は瀬戸の平碗の口縁部である。内外面に緑灰色の釉が施釉される。32も瀬戸の平碗の口縁部である。内外面緑灰釉が施釉されるが、外面口縁部にかけて剥離する。33は瀬戸の丸碗の口縁部である。大窯期のものであろう。釉薬は緑灰釉で貫入が入る。34から36は瀬戸の天目茶碗。34は口縁から体部にかけて残る。口縁部が僅かに屈曲し、内外面鉄釉が施釉される。35は口縁部である。わずかに屈曲がある。釉薬は外面褐色、内面口縁は褐色、内体部にかけて黒色の鉄釉がかかる。36も口縁部で、屈曲がきつい。内外面褐色の鉄釉がかかる。37は瀬戸の折縁小皿である。口縁は屈曲し、灰釉が刷毛塗りされている。38は瀬戸の折縁深皿である。口縁内側に段差を持ち屈曲し、外体部は強い稜を持つ。釉薬は刷毛塗りされている。39は瀬戸の折縁深皿の口縁部である。屈曲を持ち内側に沈線が走る。釉薬は緑灰釉で刷毛塗りされる。40は瀬戸の折縁深皿の口縁である。緑灰釉の漬け掛けか。口縁はほぼ直角に外反し口唇部の内面に沈線を持つ。口縁の外面も口唇部の下に稜が走る。41は瀬戸の折縁深皿の口縁部。釉薬は白色で刷毛塗りである。口唇部は強く屈曲し、内面に深い沈線が走る。42は瀬戸の折縁深皿の口縁部である。釉薬は草色であり、やや厚い。口唇部屈曲しその下に外面沈線が走り、内側に二本の沈線が走る。43は瀬戸の折縁深皿の底部である。底部は回転ヘラ削りされ脚を持つ。体部下半まで釉薬が施釉される。内底面には菊花スタンプが施される。

44から46は瀬戸の直縁大皿の口縁部である。いずれも口唇部の下に稜が入る。釉薬は緑灰白色釉である。47は口縁部が輪花型の香炉である。黒褐色の釉が施釉される。接合関係にはないが柱穴3(図13 - 1)出

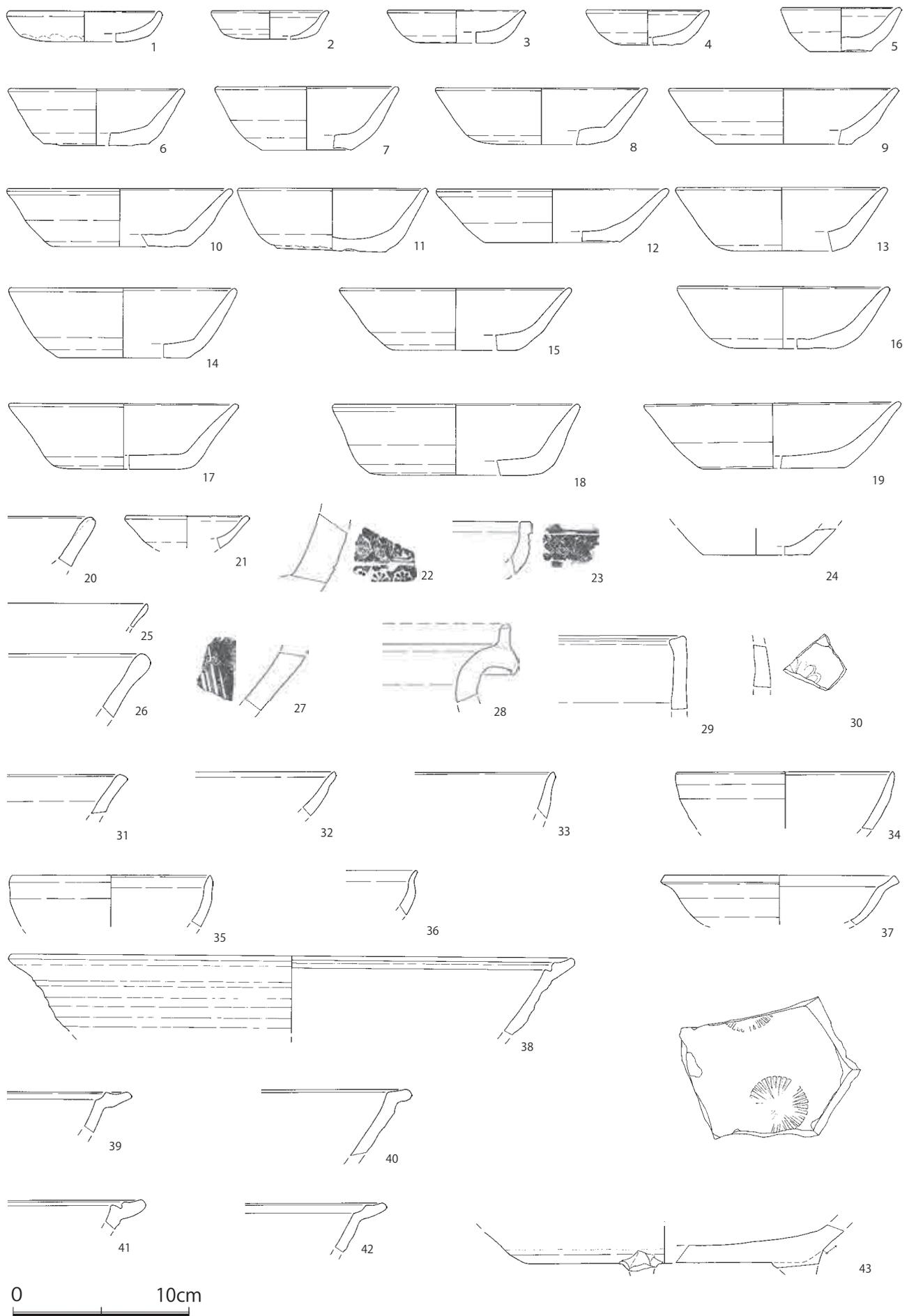


图14 第1面上出土遺物(1)

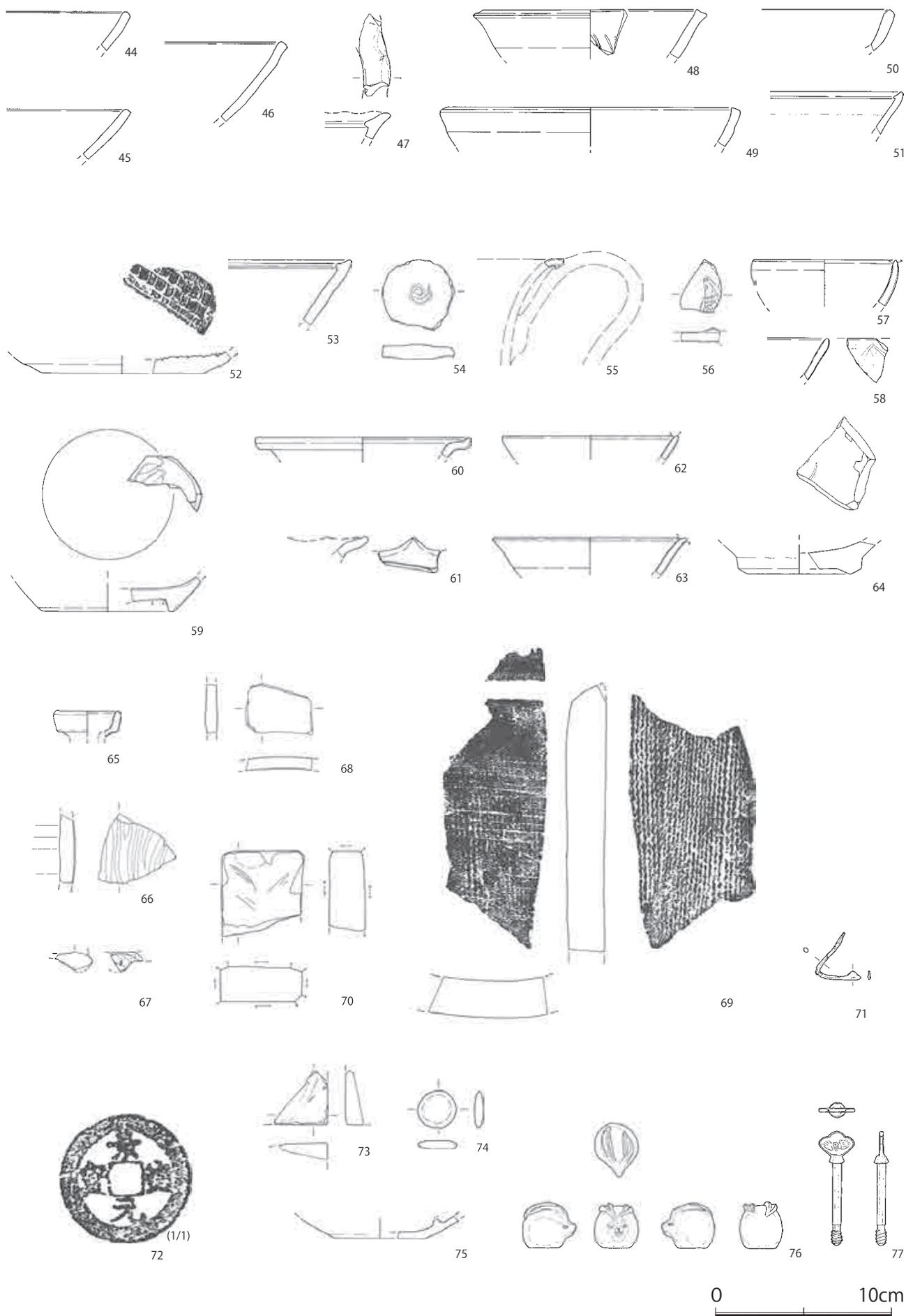


图15 第1面上出土遺物(2)

土のものと同一個体であろう。48から52は瀬戸の卸皿。いずれも釉薬は緑灰色で薄く施釉されている。48は口唇部に沈線走り口縁部近くまで内面に卸目が上がる。49は口唇部内側が緩くくびれる。50は極小片である。51は口唇部内側に返しが付き口縁周辺のみ施釉される。52は底部、内底面は卸目が施され、外底部は糸切りである。53は卸目付大皿、口唇部内側から外面は口縁部まで施釉される。口唇部は内側に返しが付き沈線走る。54は瀬戸製品の加工品で円盤である。底部回転ヘラ削り、周囲を丸く打ち欠いている。折縁皿の底部か。55は龍泉窯青磁の広口瓶の取っ手部分である。瓶の口唇部と取っ手の接合部分がかろうじて残存していた。56は龍泉窯青磁の盤の底部で、貼り付け双魚文の魚の頭部である。57は龍泉窯青磁の無文碗であり、釉が厚い。58は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗である。釉薬は草色で厚い。59は龍泉窯青磁印花文碗である。高台部外側の削りが浅く、高台内は蛇目釉剥ぎをしている。内底面に印花文があり、釉薬は全体に厚い。60は龍泉窯折縁皿の口縁であり、口縁部は屈曲する。61は龍泉窯青磁である。稜花状であるが、器種は不明である。釉は二次焼成を受けているのか白濁している。62は白磁の口元皿の極小片である。63は白磁の口元小皿、口唇部が内外面露胎する。64は白磁の碗か、底部の外面が露胎する。65は青白磁水注の口縁である。水青色の半透明の釉がやや厚めに施釉される。66は青白磁梅瓶の胴部。二次焼成を受ける。67は青白磁の香炉の脚部、辛うじて残る。水色の透明釉。68は黒褐釉だが器種は不明。内面露胎している。69は平瓦である。表面は糸切り後ナデ、裏面は縄目の叩きがあり、離れ砂が付着する。永福寺A類I期と同類である。70は平瓦の加工品である。側面が特に摩滅している。71は金銅製品である。頭は平たく、先端は窄まる。部分的に金が残る。72は北宋銭、景德元寶の真書である。初鑄年は1004年で、外径2.5cm、内径1.8cmを測る。73は砥石である。鳴滝産の仕上砥で片面のみ使用している。74は黒い基石である。径は2.2×2.1cmを測る。75は近世の灯明皿である。内面のみ施釉されている。76は近世の土人形の兎である。幅3cm、高さ2.3cmを測る。77は現代の鍵である。長さ6.6cmを測る。

2. 第2面の遺構と出土遺物 (図16～31)

第2面は泥岩を版築した黄褐色粘質土で、1～5cmの泥岩を多量に混入し地形している。海拔は16.00～16.15cmを測る。検出された遺構は建物址2軒、土坑21基、柱穴73穴、かわらけ溜り1箇所である。出土した遺物は弥生式土器、ロクロ成形のかわらけ、白かわらけ、土器。貿易陶磁器は、青磁、白磁、青白磁、褐釉。国産陶器は備前・瀬戸・常滑窯製品、ほかに瓦、鉄製品、銭、石製品等である。

建物址 (図17・19)

深さを持った柱穴が立ち並ぶ掘立柱建物である。建物1・2は重複関係にあり、建物1が建物2を切る。おそらく建物2は建物1を建て替えたものと考えられる。規模は東西2間、南北3間を確認したが全容は調査区の外に展開するので掴めない。しかし、南側には延びない様相を示している。

建物1：調査区の北側2/3を占めるA～D-1～3グリッドで範囲をつかんだ。しかし、遺構は東、西、北側にはまだ広がる様子である。確認出来た規模は東西3間(柱間距離西から2.00m-1.80m-2.00m)×南北2間(柱間距離北から2.20m-1.80m)である。主軸方位はN-14°-Wである。建物2を切る。覆土は暗褐色粘質土のやや粘性のある土で3cm前後の泥岩粒とかかわらけ片、炭化物を混入する。

個別に柱穴の説明を加える。柱穴76はD-1グリッドで検出した。重複関係は柱穴84を切る。平面形は不正円形で規模は51×(45)cmを測り、断面形は逆台形と言えようか。底面標高は15.67mを測る。出土遺物の図18-13はかわらけの大皿で内底面にナデが残る。胎土はやや粗土である。14は摩耗陶片である。常滑の片口鉢Ⅱ類の口縁部を使用している。15は丸瓦であり、表面はヘラ削りされ裏面は布目が残る。極楽寺創建時に類

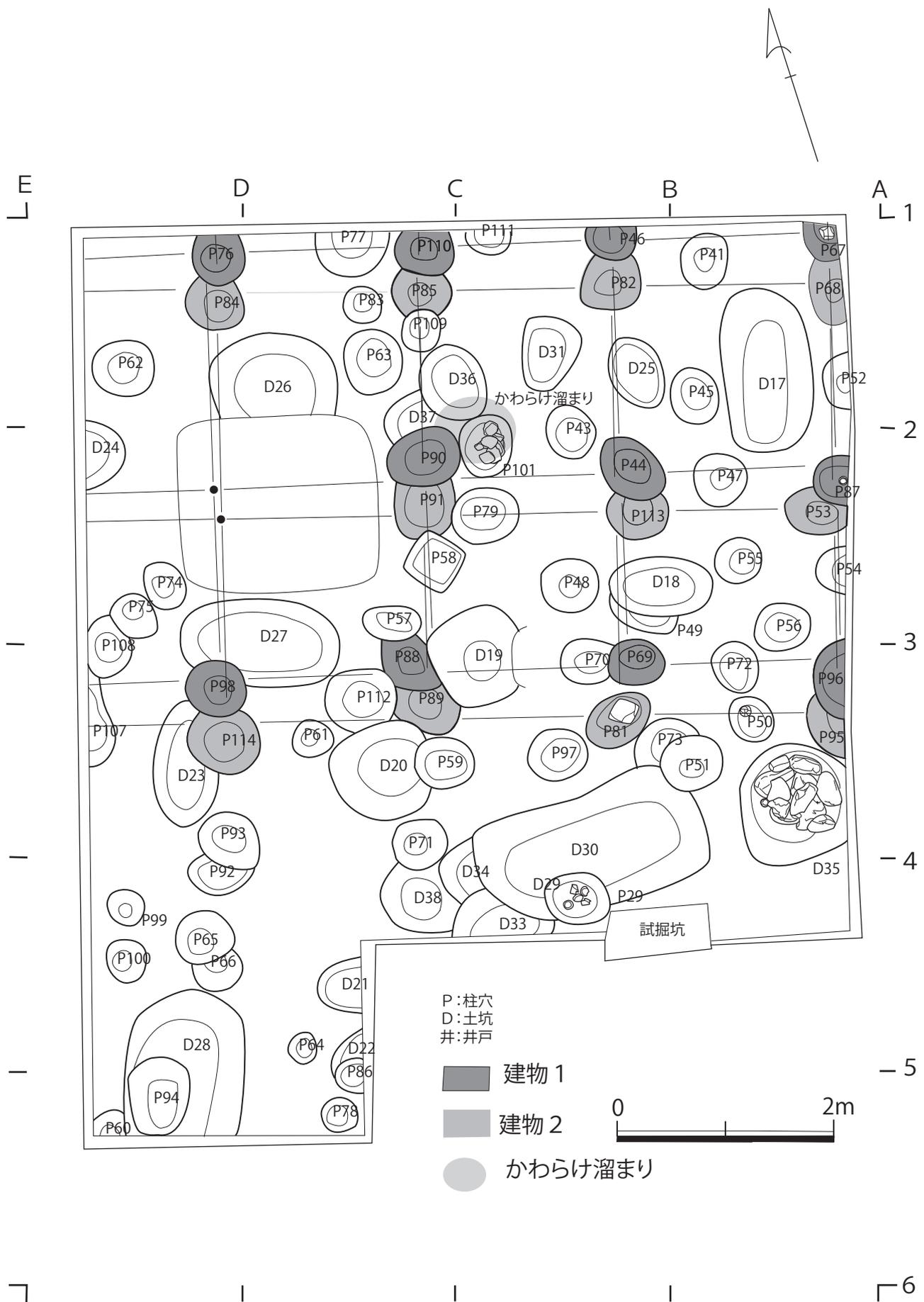
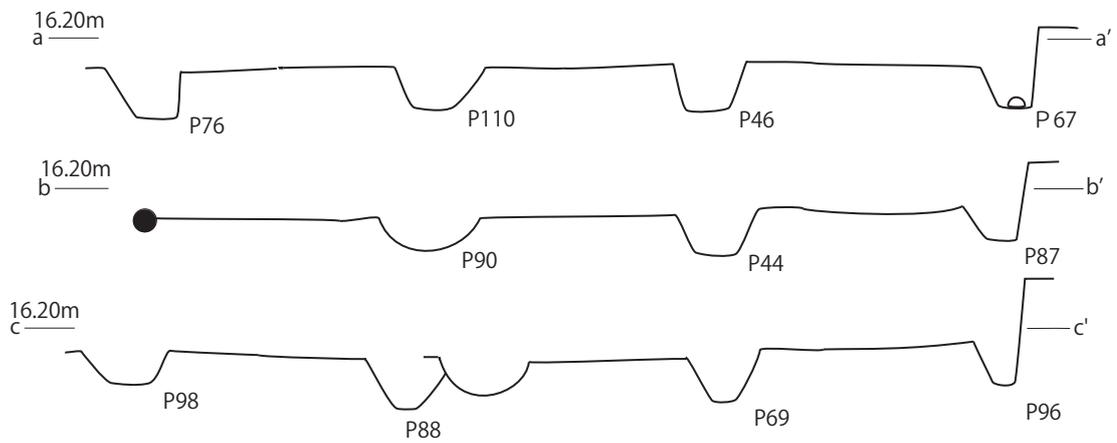
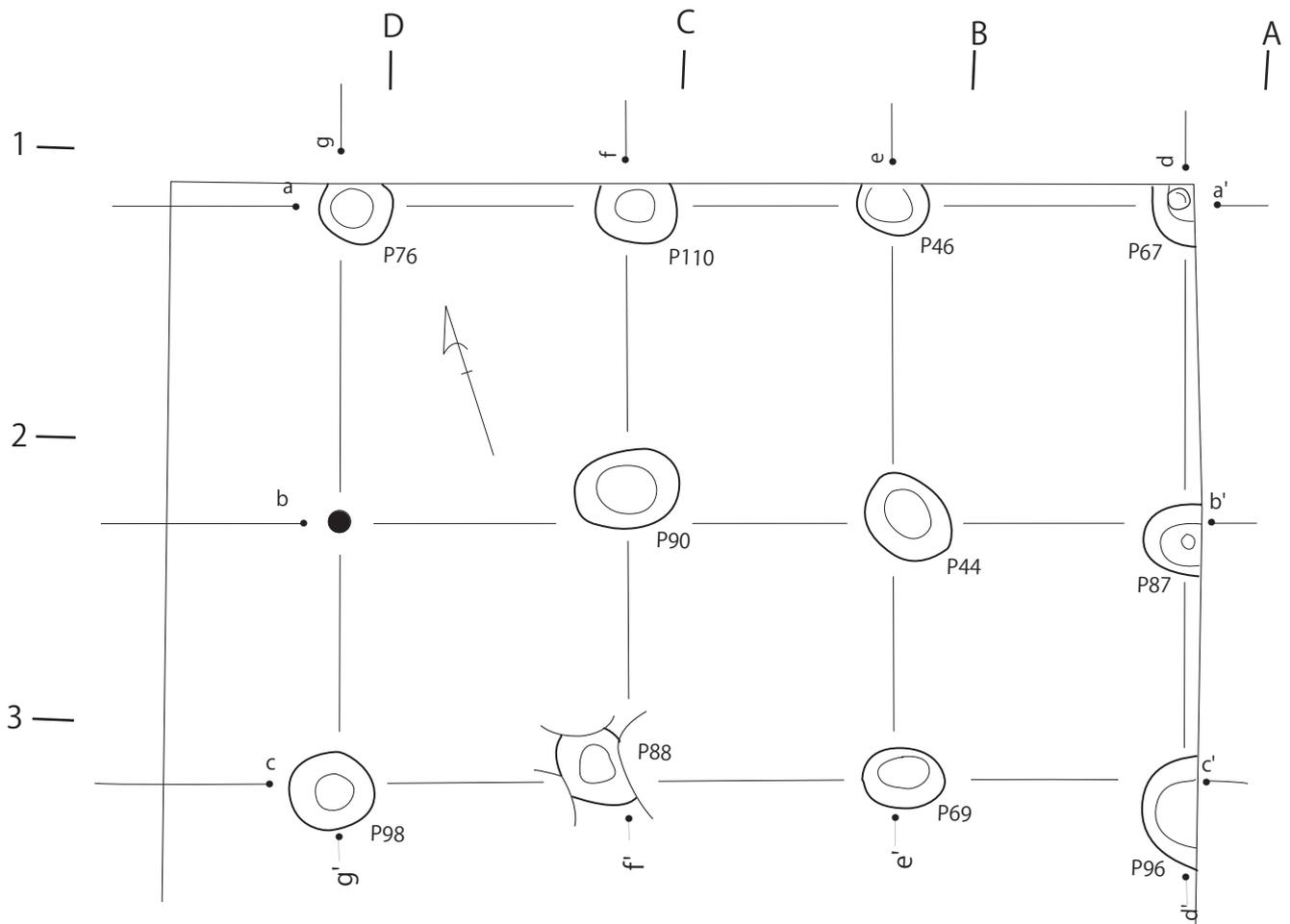


図16 第2面 全体図

似する。柱穴110はC-1グリッドで検出した。重複関係は柱穴85を切る。平面形は不正円形であり、規模は55×(39)cmを測る。断面形は逆台形を呈する。底面標高は15.756mを測る。柱穴46はB-1グリッドで検出した。重複関係は柱穴82を切る。平面形は楕円形となろう。規模は48×30cmを測り、断面形は箱型を呈する。底面標高は15.747mを測る。出土遺物の図18-9はかわらけの中皿である。10は常滑片口鉢のI類。11は平瓦で、胎土は良土であり、白い流文が入る。裏面に弱く格子の叩き目痕が残る。八幡宮B類・永福寺I期と同類である。12は平瓦である。表面、裏面とも離れ砂の黒色微砂が残る。胎土はやや粗土で砂を多く含み、流文が見られる。永福寺III期と同類である。柱穴67は調査区北東隅のA-1グリッドで検出した。重複関係は柱穴68を切る。平面形は円形か楕円形であろう。確認出来た規模は(54)×(41)cmを測る。断面形はU字形か。底面海拔15.765mを測る。底部には泥岩の礎石を残す。柱穴90はC-2グリッドで検出した。土坑37、柱穴91を切る。平面形は楕円形で、規模は68×54cmを測り、断面形は箱型である。底面海拔15.628mを測る。出土遺物の図18-22は東濃型山茶碗。内面口縁部まで卸目が刻まれる。23は火鉢の底部、I b類である。柱穴44はB-2グリッドで検出した。柱穴113を切る。平面形は楕円形で、70×53cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面の海拔は15.78mである。出土遺物の図18-1はかわらけ小皿で胎土は粗土である。2はかわらけ大皿で胎土は粗土である。3は東濃型山茶碗である。底部糸切りで糸目が体部に上がる。内底面は摩滅し紅が残る。4は常滑壺の口縁である。縁部内側が欠損する。5は褐釉壺の耳の部分、上部に幅1cmの沈線が巡るようである。6は褐釉の壺の胴部か。7は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗である。釉薬が厚い。8は青白磁合子の蓋。型作りの文様が見られる。柱穴87は調査区東壁にかかるA-2グリッドで検出した。柱穴53を切る。平面形は概ね楕円形と見られ、規模は50×(36)cmである。断面形は箱型と言えようか。底面の海拔は15.865mであり、特記すべきは柱穴底部にかかわらけが二枚重ねて埋納されていたことである。出土遺物の図18-16・17は重ねて出土したかわらけで、16が17の上に重なり出土した。いずれもかわらけの中皿であり、胎土は黒色微砂、赤色粒が入るやや粗土である。18はとりべ状のかわらけである。口唇部に気泡が立つ。19は白磁の口兀碗である。口径はもう少し大きいか、小片なので判断がつかない。20・21は鉄釘である。柱穴98はD-3グリッドで検出した。柱穴114、土坑23・27を切る。平面形は円形で、規模は57×53cmを測る。断面は逆台形である。底面海拔は15.803mを測る。出土遺物の図18-24はかわらけ小皿であり、やや粗土である。25はかわらけ大皿である。板状圧痕が強く残る。胎土はやや粗土である。柱穴88はD-3グリッドで検出した。柱穴89を切り、土坑19・柱穴57・112に切られる。平面形は不正円形で、確認出来た規模は(54)×(48)cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面海拔は15.686mを測る。柱穴69はB-3グリッドで検出された。柱穴70を切る。平面形は楕円形で、規模は54×45cmを測る。断面形は逆台形であり、底面の海拔は15.73mである。柱穴96は調査区東壁際A-3グリッドで検出した。平面形は円形もしくは楕円形が考えられる。規模は75×(30)cmを測り、断面形は箱型を呈する。底面の海拔15.83mである。

建物2：建物1同様、調査区の北側2/3を占めるA~D-1~3グリッドで範囲をつかんだ。しかし、遺構は東西、北側にはまだ広がる様子である。確認した規模は東西3間(柱間距離西から1.90m-1.80m-2.00m)×南北2間(柱間距離北から2.10m-1.90m)である。主軸方位はN-16°-W。建物1に切られる。覆土は茶褐色粘質土のやや明るめの土で5~8cmの泥岩粒とかわらけ片、炭化物を混入する。

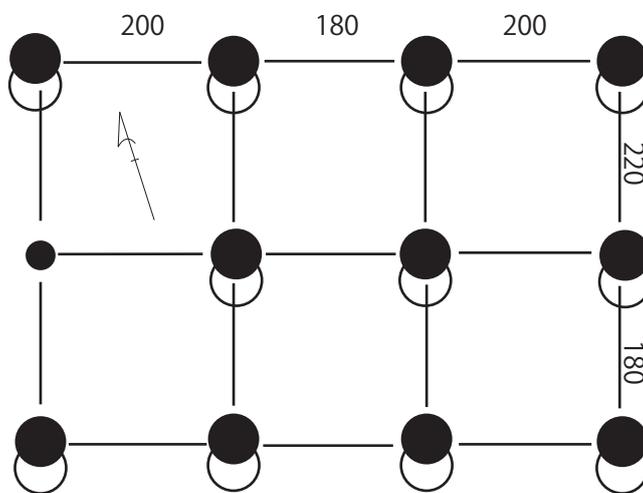
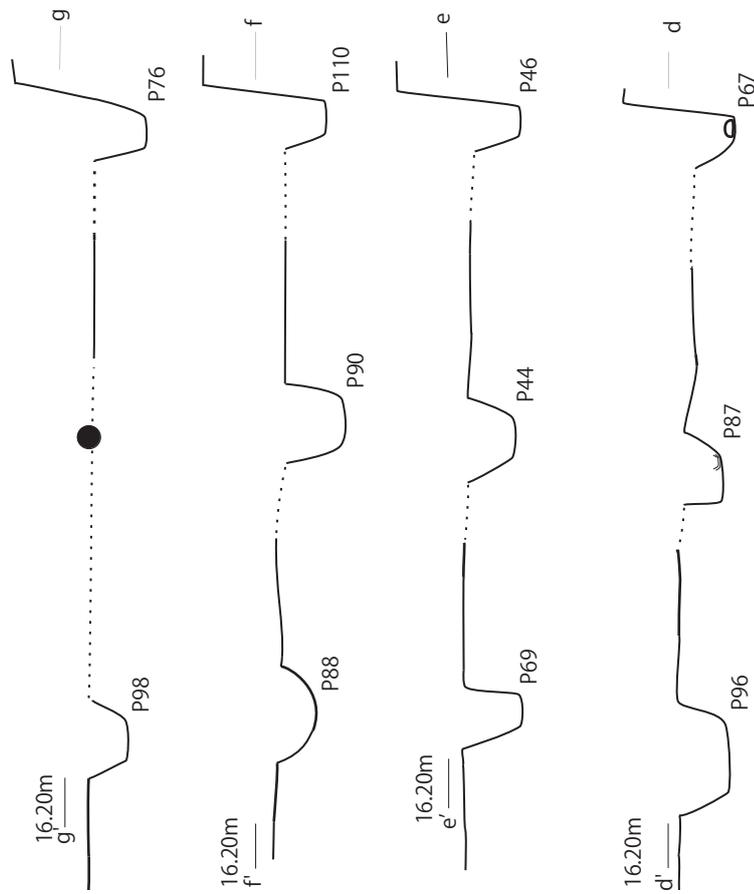
個別に柱穴の説明を加える。柱穴84はD-1グリッドで検出され、柱穴76に切られる。ほぼ円形の平面形であり、規模は54×(45)cmで、断面形は箱型と言えよう。底面海拔は15.791mである。柱穴85はC-1で検出され、柱穴110・109に切られる。平面形はほぼ円形であろう。規模は55×(34)cmで、断面形は逆台形を呈する。底面海拔は15.77mである。柱穴82はB-1で検出され、柱穴46に切られる。平面形は不正円形で、規模は60×(47)cmを測る。断面形はU字形を呈する。底面の海拔は15.752mである。柱穴68は調査区北東隅、A-1グ



	P76	P110	P46	P67	P90	P44	P87	P98	P88	P69	P96
長径	(45.0)	55.0	48.0	(54.0)	(68.0)	70.0	50.0	57.0	(54.0)	54.0	75.0
短径	51.0	(39.0)	30.0	(41.0)	54.0	53.0	(36.0)	53.0	(48.0)	45.0	(30.0)
深さ	36.4	25.9	30.0	26.4	39.0	28.8	24.2	24.2	33.3	33.0	30.9

(単位:cm)

図17 第2面 建物1

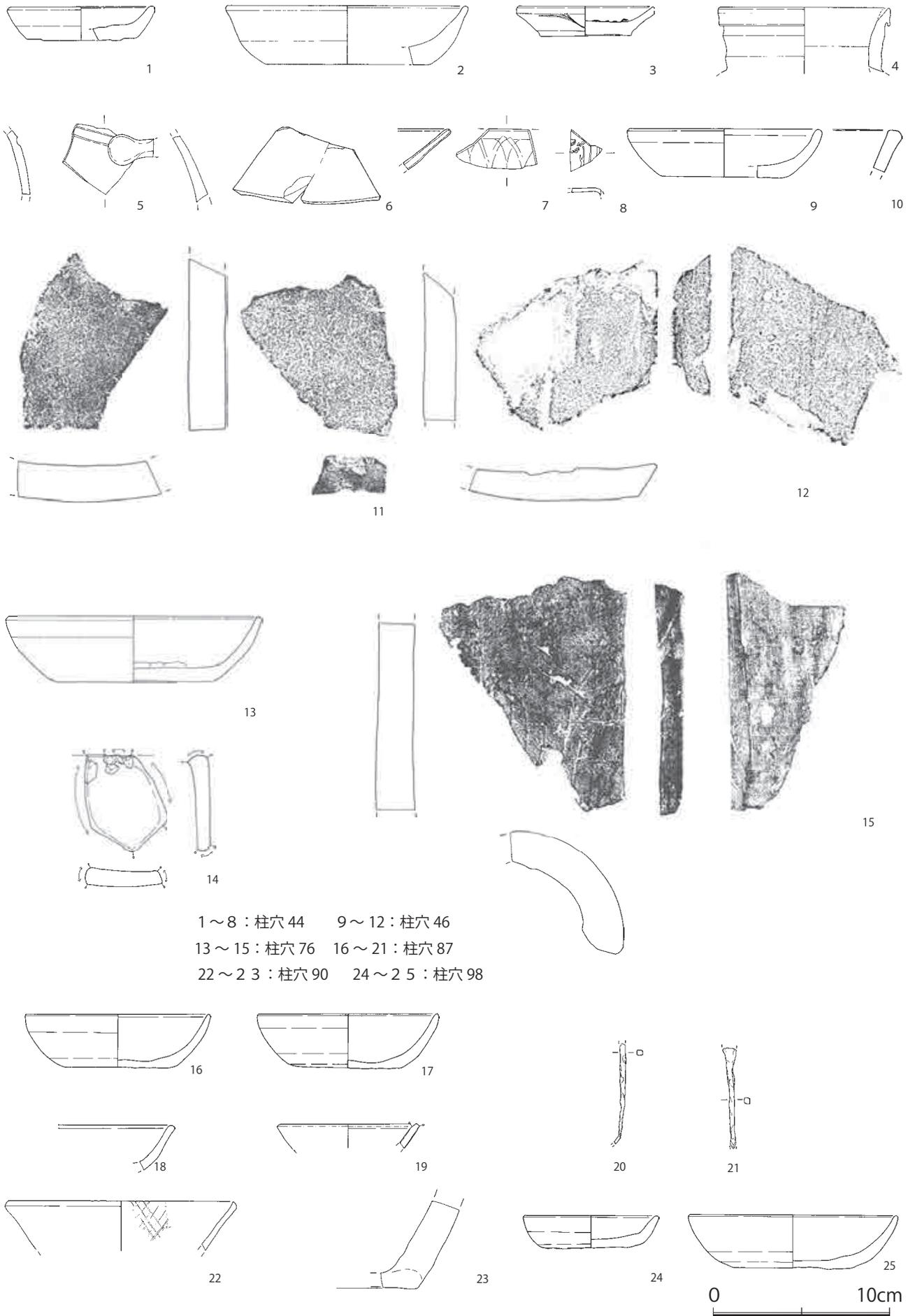


リッドで検出された。柱穴67に切られる。平面形は不明。確認できた規模は(60)×(37)cmを測る。断面形はU字形を呈する。底面の海拔高は15.65mである。出土遺物の図20-2は片口鉢の底部で、高台の上はヘラ削りが一周する。柱穴91はC-2グリッドで検出した。柱穴90・79・58に切られる。平面形は楕円形と見られ、規模は56×(47)cmを測る。断面形は箱型を呈する。底面海拔高は15.652mを測る。出土遺物の図20-9はかわらの底部で、砂を多く含む胎土である。10は龍泉窯青磁無文碗である。貫入が入り釉薬が厚く、口縁部が外反する。11は白磁の合子蓋である。櫛掻き状の文様が入り、釉は乳白色である。柱穴113はB-2グリッドで検出した。柱穴44に切られる。平面形は円形で規模は48×(40)cmを測る。断面形は逆台形である。底面の海拔高は15.763mを測る。柱穴53は調査区東端のA-2グリッドで検出した。柱穴87に切られる。平面形は楕円形で、規模は(57)×(47)cmである。断面は逆台形を呈する。底面の海拔高は15.785mを測る。出土遺物の図20-1はかわらけの中皿である。やや粗土であり、内底面に鉄滓が付着する。柱穴114はD-3グリッドで検出した。柱穴98に切れ、土坑23を切る。平面形は不正円形で規模は69×(54)cmである。断面形は逆台形を呈する。底面の海拔高は15.695mである。柱穴89はC-3グリッドで検出された。柱穴88・112・土坑19・20に切られる。平面形は概ね楕円形で、確認出来た規模は(61)×(42)cmである。断面は箱型を呈する。底面の海拔高は15.68mである。柱穴81はB-3グリッドで検出した。底部に一辺30cmの四角く加工した泥岩の礎石を持つ。平面形は楕円形で、規模は67×48cmである。断面は箱型を呈する。底面海拔高は15.78mを測る。出土遺物の図20-3は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の底部。高台の内側は露胎である。釉薬は草色で厚く施釉される。4は白磁の口元印花文皿。柱穴95は調査区東端のA-3グリッドで検出した。柱穴96に切られる。平面形は楕円形か。規模は(40)×(37)cmである。断面形は箱型のようなものである。底面海拔高は15.73mである。出土遺物の図20-12は小型かわらけ皿である。口縁に油煙煤が付着するので灯明皿であろう。13は常滑I類の片口鉢、5形式か。14も常滑片口鉢I類、口縁丸みを帯びる。6a形式か。

第2面かわらけ溜り(図21)

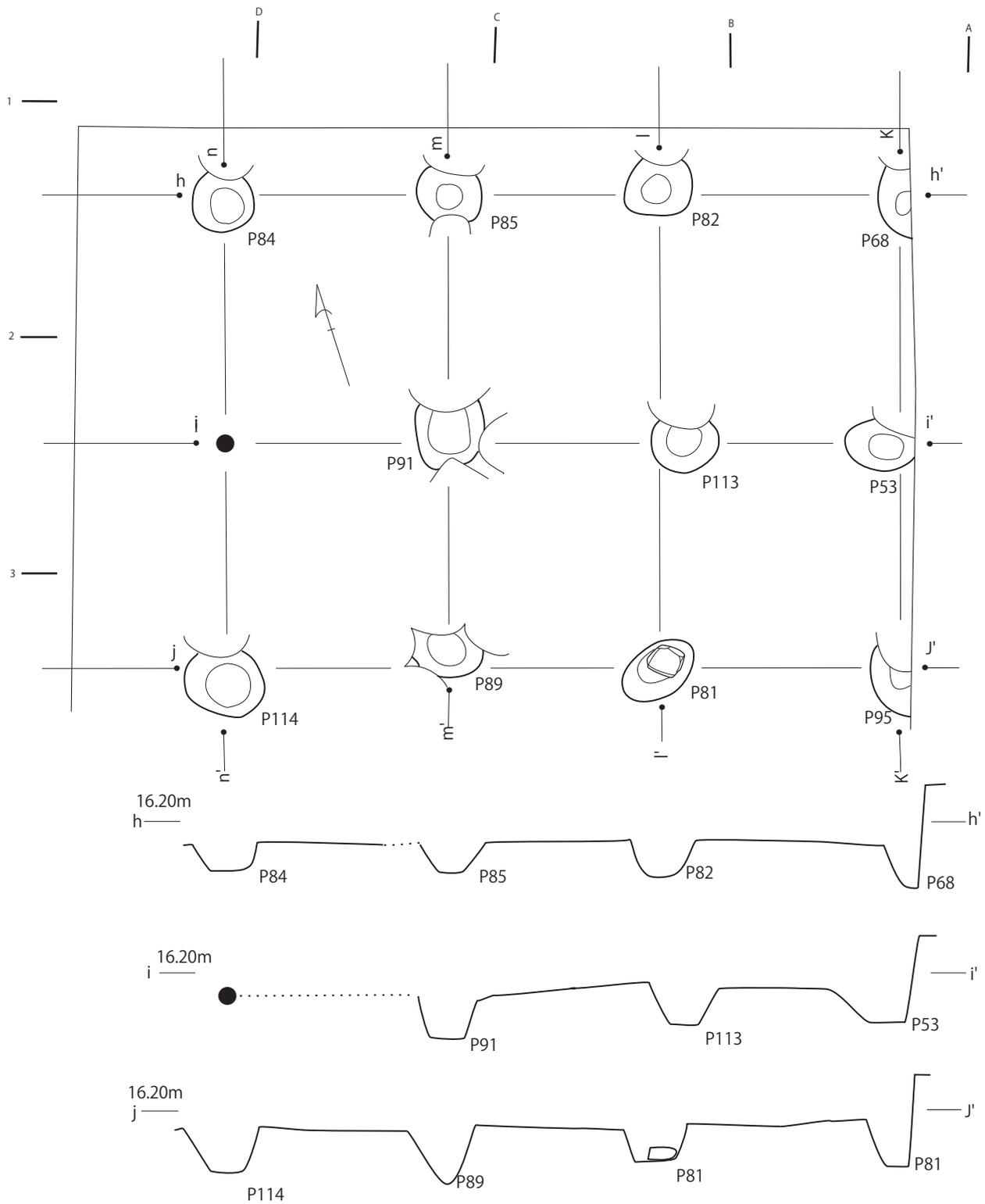
C-2グリッド周辺で検出した。第2面の上に弱い面があったのか掴みきれなかったが、柱穴等の遺構の上面でかわらけは散らばった。土坑36・柱穴90・101はかわらけ溜りを取り上げ、精査した後に検出されている。かわらけはいずれも破片であったが燈色のかわらけと、凸部を持つ白色のかわらけであった。凸部を持つ白いかわらけの名称を「白かわらけ」の「蓋」としていいものか考えあぐねたが、過去の調査事例に基づき「白かわらけ」の「蓋」とした。また他に図19の15~17に見られるように生活雑器の破片の混在があるが、これらは第1面構成土の混入物と捉え、かわらけ溜り自体はかわらけと白かわらけで構成されていたと考えたい。というのは、いわゆる儀式、祭祀的な要素を強く感じ取られるからである。

かわらけ溜りの出土状況は、海拔16.00mで平坦に2m四方に散らばるが北西で白かわらけがまとまって出土している。全て蓋である。出土の様に規則性はなく凸部が上に向いたり逆さになっている。2面上まで掘り下げる間にB-1グリッドあたりで白かわらけ質の高坏の脚部とそれに伴う坏部の出土もある(図29-29)。遺跡全体で見ても白かわらけの出土は多い、ただ多くは破片であり、それが坏になるのか蓋になるのかは不明であった。図21-1はかわらけ小皿である。器壁厚く、胎土は砂、赤色粒を混入するやや粗土である。内底面に強いナデが入る。2もかわらけ小皿である。口縁部に油煙煤が付着している。灯明皿であろう。全体に摩滅し、整形不明である。体部中心やや下に稜を持つ。胎土は砂の多い粗土である。3はかわらけ中皿である。口縁部に油煙煤を付着した灯明皿である。体部に丸みを持つが口縁部は外反する。胎土はやや砂が多く赤色粒も見られる。4はかわらけ大皿である。内底面に強いナデが入る。器壁はやや厚目だが胎土は比較的精良と言っていいだろう。5はかわらけ大皿である。体部に丸みを持つ。胎土は砂が多く入り、赤色粒も見られる



1~8：柱穴 44 9~12：柱穴 46
 13~15：柱穴 76 16~21：柱穴 87
 22~23：柱穴 90 24~25：柱穴 98

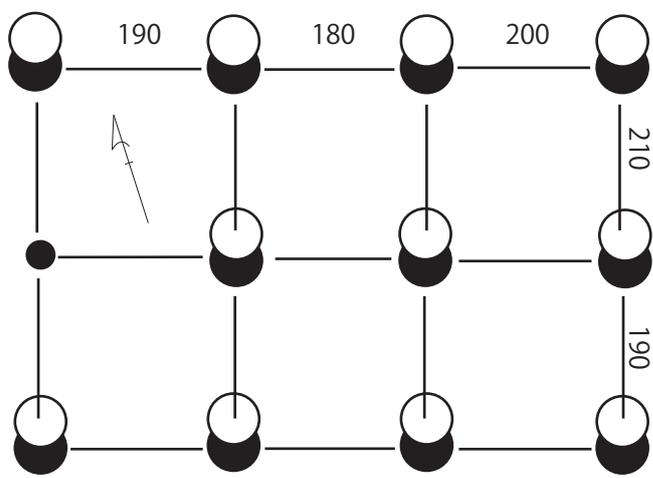
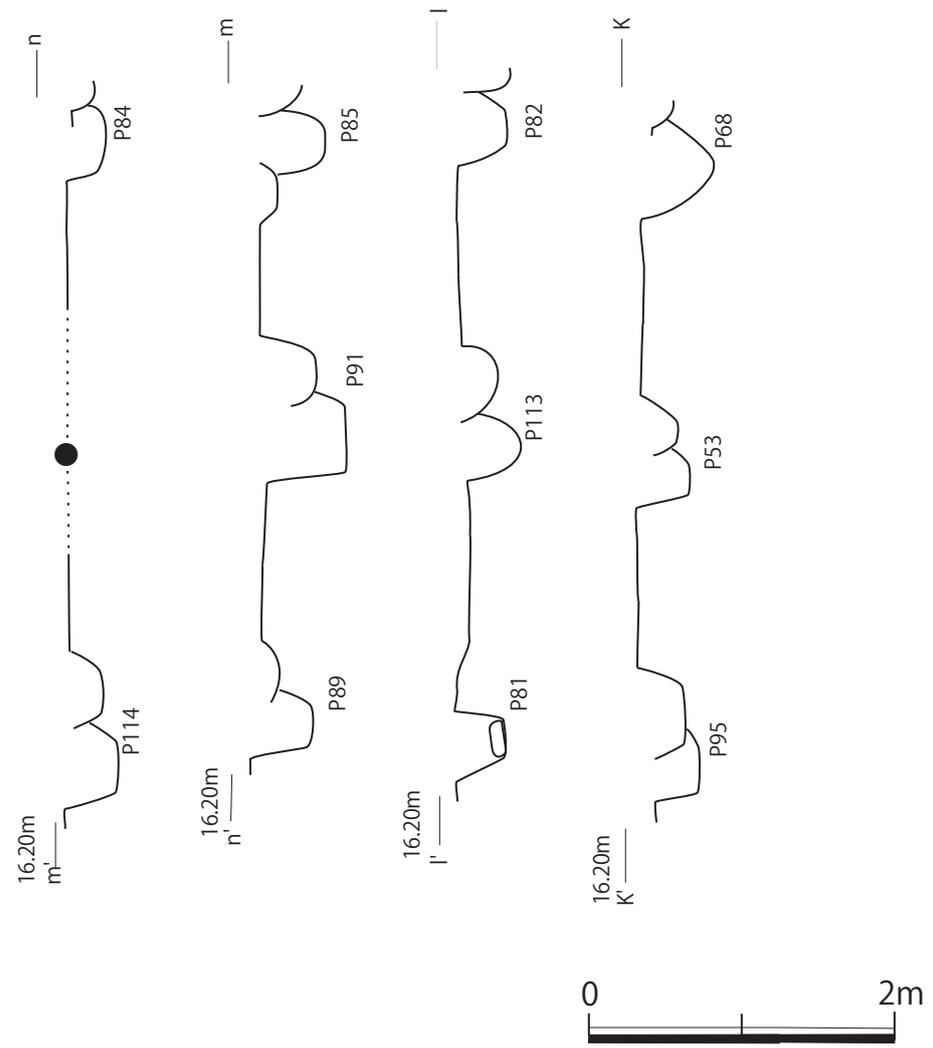
图18 第2面 建物1出土遺物



	P84	P85	P82	P68	P91	P113	P53	P114	P89	P81	P95
長径	54.0	55.0	60.0	(60.0)	56.0	48.0	(57.0)	69.0	(61.0)	67.0	(40.0)
短径	(45.0)	(34.0)	(47.0)	(37.0)	(47.0)	(40.0)	(47.0)	(54.0)	(42.0)	48.0	(37.0)
深さ	15.78	26.3	29.9	40.4	15.65	15.76	34.5	34.2	39.4	33.7	39.9

(単位:cm)

図19 第2面 建物2



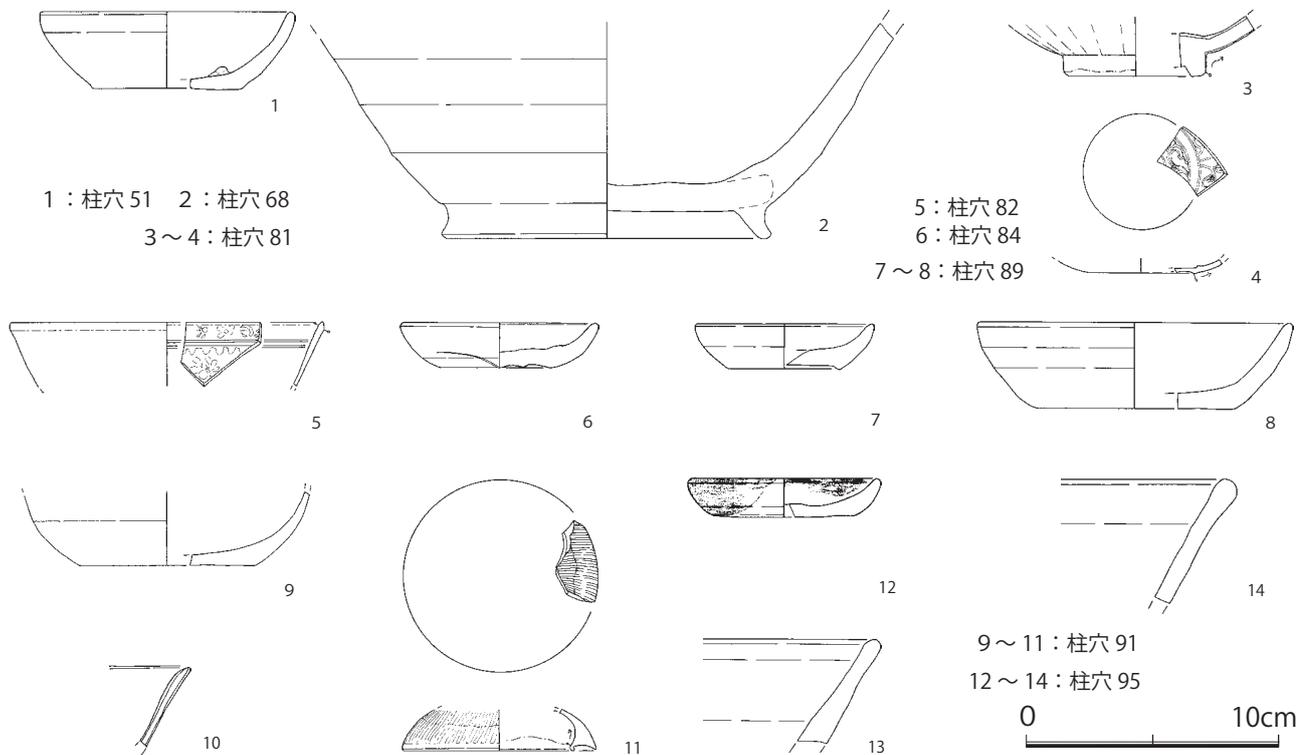


図20 第2面 建物2出土遺物

粗土である。6は白かわらけ蓋の口唇部、小片であるため坏との見分けがつきにくいだが、角度により蓋と判断した。胎土に砂が極少量混じる。色調はやや赤味を帯びた乳白色で、整形は摩滅により不明である。7は白かわらけ蓋の口唇部。これも小片であったが、口唇部から体部にかけて内側に膨らみを持つので坏ではなく蓋とした。胎土に少量砂が混じる。色調は乳白色である。摩滅著しく整形不明である。8は直径3cm、高さ1cmの凸部を持つ白かわらけの蓋。凸部分は貼り付けてあるようである。凸部と体部の間は強くなでられている。胎土は極少量の砂を含有する。色調は僅かに赤味を帯びる乳白色である。9は直径3cm、高さ1.3cmの凸部を持つ白かわらけの蓋である。口唇部の先端が摩滅しているのか口唇部なのか判断に苦しんだが全体の残存状況から口唇部とはしなかった。凸部を残し、体部は2/3欠損している。8もそうであったが凸部の欠損部分がひどく摩滅している。体部はヨコナデされている。胎土は極少量の砂を含有する。色調は乳白色である。10は凸部を持つであろう白かわらけの蓋。頂部が平たく強く撫でられているため蓋が付くものとみなした。体部はヨコナデされている。胎土は少量の砂を含む。色調は乳白色である。11は直径3cm、高さ1.5cmの凸部を持つ白かわらけ蓋である。破片端部の摩滅が顕著である。凸部と体部の間に強いナデが入り、体部はヨコナデされる。胎土は砂が少量入り、色調は乳白色である。12は幅3.5cm、高さ1cmの凸部をもつ白かわらけの蓋である。全体に摩滅しているが端部の摩滅は著しく全体形も円盤状で、人為的なものを感じ得る。胎土は砂を含有する。色調は乳白色である。13は直径3cm、高さ1cmの凸部を持つ白かわらけの蓋である。これも全体に摩滅しているが、端部の摩滅は著しくやはり人為的なものを感じ得る。全体形も円盤状である。14は白かわらけ質の台付きの皿になるであろうか。上下に貫通しない穴が穿たれる。台の部分は削りだしているようである。内底面はほんのり赤く、外底面は明らかに火を受けたようで、台部赤く、体部は部分的に煤けている。胎土は砂を少量混入する。15は常滑の片口鉢のⅡ類である。口縁は内側に少し突起するが外側のほうが強く突起が付く。9形式か。16は瀬戸の輪花型入れ子である。残存状態は悪いが内面に紅が残る。17は鳴滝産の砥石の仕上砥である。片面のみ使用痕残る。

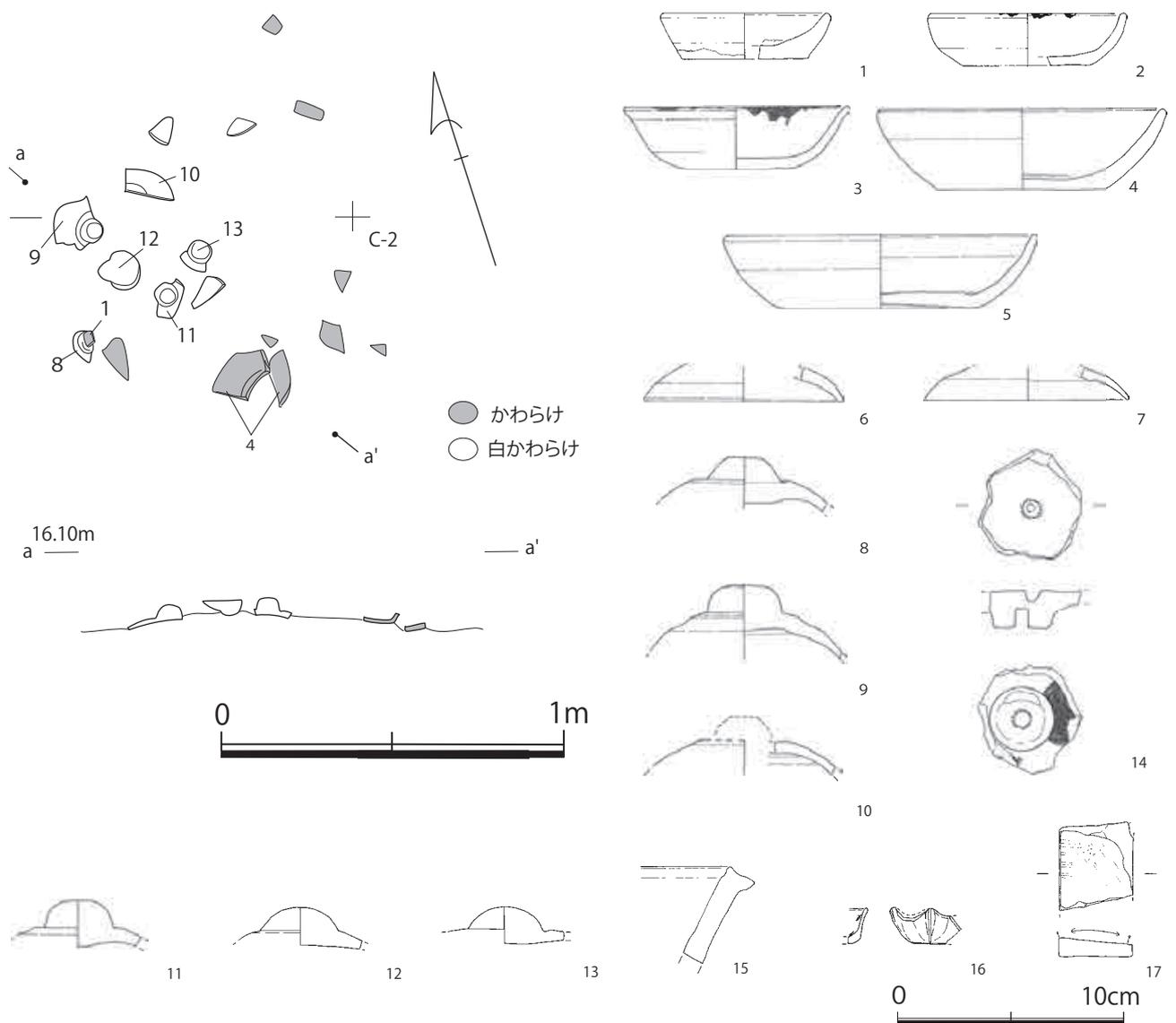


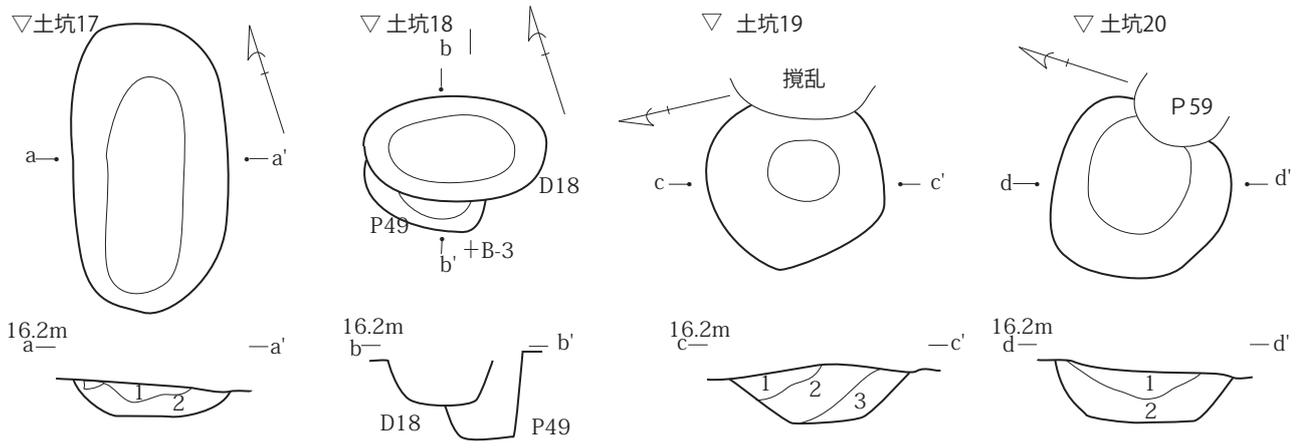
図21 第2面 かわらけ溜り・出土遺物

土坑 (図22 ~ 26)

土坑は規則性を持たず調査区内に広がり規模の統一性もない。土坑30・35と隣り合わせた土坑は礎石に使用したと思われる安山岩(伊豆石)を充填しているかのように包含した遺構であった。礎石建物の礎石を集め廃棄したものと思われ、周辺にある程度の規模の建物址があったことが窺える。土坑30の西側は土坑が密集するが、便所遺構等の可能性は低い。

土坑17:A-1グリッドで検出した。平面形は楕円形で、規模は150×80cmである。断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-18°-Eである。出土遺物の図22-1・2はかわらけ小皿である。1は底部が小さく口縁が広がる。灯明皿として使用している。2は口縁を打ち欠いてある。3は白かわらけ、底部糸きりのろくろ成形である。4は瀬戸の入れ子で片口を持つものである。外体部にロクロ回転糸切り痕の糸が巻きついた痕が残る。底部はヘラ削りされている。5は北宋銭の皇口通寶である。おそらく皇宗通寶の篆書であろう。

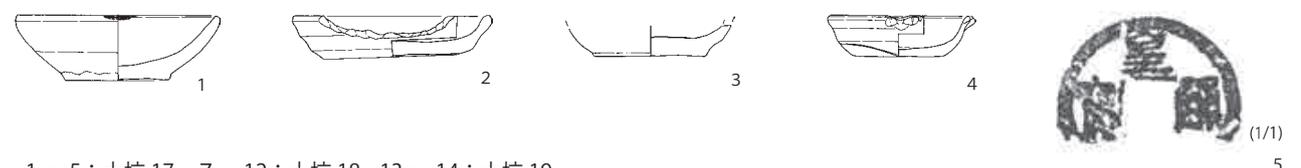
土坑18:A-2グリッドで検出された。柱穴49を切る。平面形は楕円形であり、規模は96×57cmを測る。断面形は箱型を呈する。主軸方位はN-107°-Wである。出土遺物の図22-6はかわらけ小皿である。器高は低く胎土は粗土である。7はかわらけ小皿である。口唇部のヨコナデが強く体部中ほどにも稜が入る。胎土はやや粗土である。8はかわらけ小皿で口縁部に油煙煤が付着しているので灯明皿であろう。9はかわらけの中皿。体部丸みを持ちながら立ち上がり、口径が開く。胎土は砂を多く含むやや粗土である。10はかわらけ大皿。



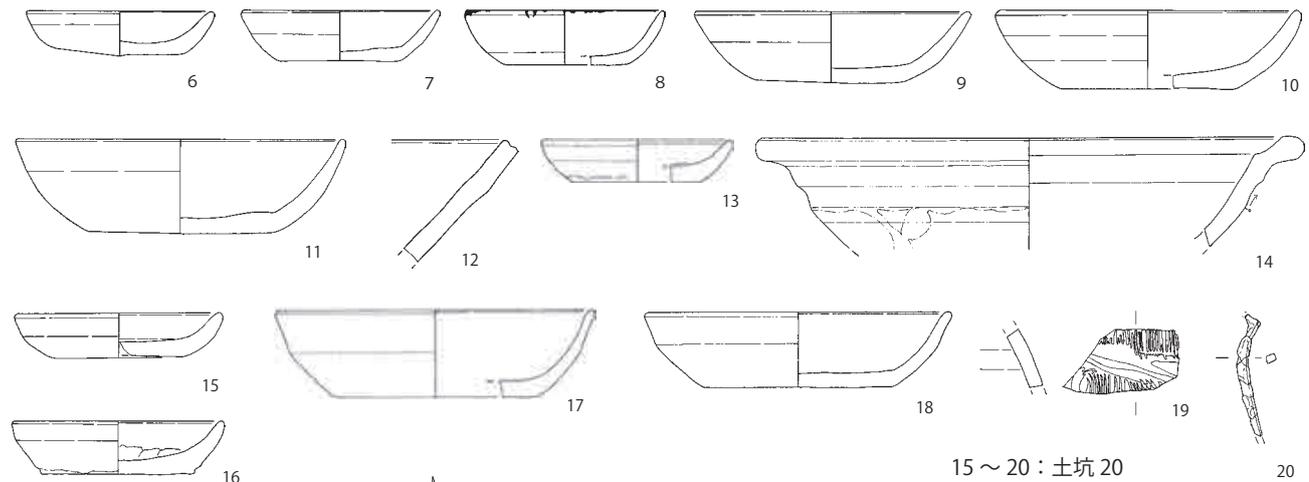
第1層 暗褐色粘質土：土丹粒、炭化物を多く含む。縮りなし。
 第2層 茶褐色粘質土：1～3cm大の土丹、かわらけ粒を多く含む。縮りややあり。

第1層 暗褐色粘質土：1～5cm大の土丹、土丹粒を多量に含む。縮りあり。
 第2層 茶褐色粘質土：土丹粒、かわらけ片、炭化物を多量に含む。縮り弱い。
 第3層 明茶褐色粘質土：土丹粒が多量、炭化物、かわらけ粒を少量含む。明茶褐色粘土ブロックを多めに含む。縮りややあり。

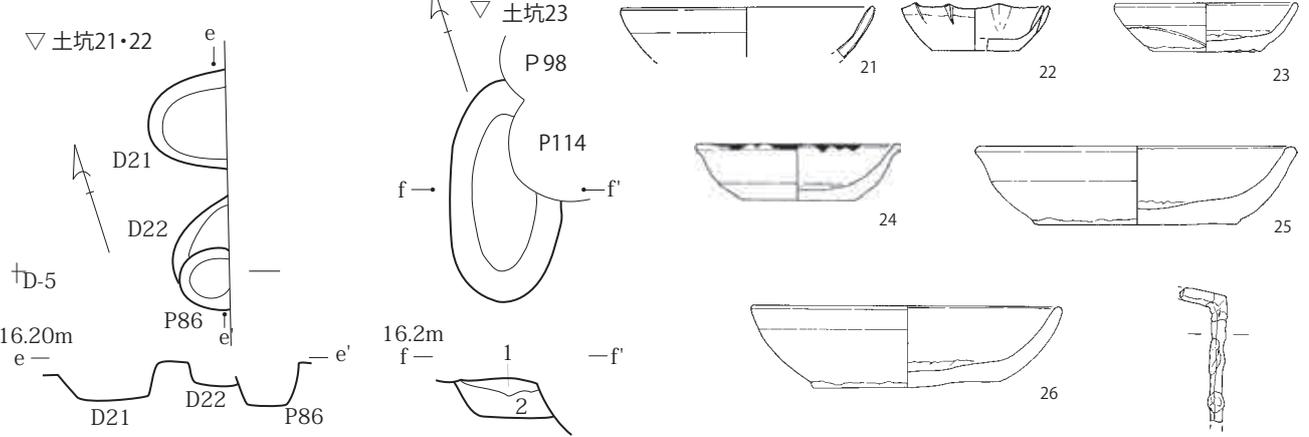
第1層 暗褐色粘質土：炭化物、土丹粒を多く含む。縮りあり。
 第2層 茶褐色粘質土：1cm大の土丹、かわらけ粒、炭化物を多く含む。縮り弱い。



1～5：土坑 17 7～12：土坑 18 13～14：土坑 19



15～20：土坑 20



第1層 茶褐色粘質土：かわらけ片、1cm大の土丹を多量に含む。縮りあり。
 第2層 茶褐色粘質土：2cm～拳大の土丹塊、炭化物を多めに含む。縮りややあり。

21：土坑 21
 22：土坑 22
 23～27：土坑 23



図22 第2面 土坑(1)・出土遺物

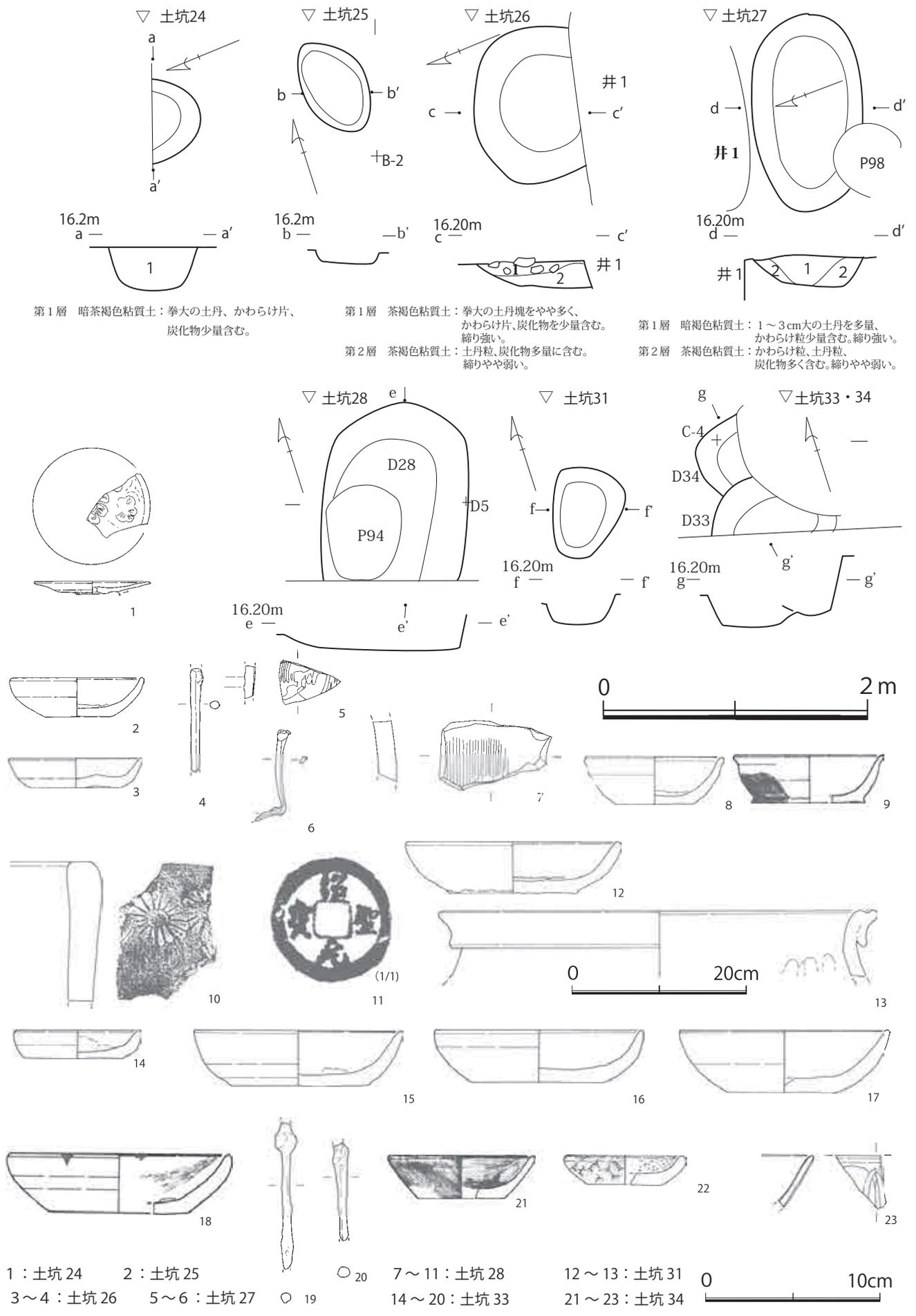


図23 第2面 土坑(2)・出土遺物

器壁が厚く、内湾する。胎土は粗土である。11はかわらけ大皿である。全体に摩滅する。内湾し口唇部に強いヨコナデが入る。胎土は砂を多く含むやや粗土である。12は常滑片口鉢Ⅱ類の口縁部で、6b～7形式。

土坑19：B-2・3グリッドで検出された。攪乱に切られ、柱穴88・89（建物1・2）を切る。平面形は大概円形で規模は98×(80)cmである。断面形は浅い逆台形を呈する。主軸方位はほぼ真北である。出土遺物の図22-13はかわらけ小皿。内底面にナデが入る。器壁厚くやや直線的に立ち上がる。14は瀬戸の折縁深皿で、釉薬は漬け掛けされている。中期様式Ⅳ期であろう。

土坑20：C-3グリッドで検出された。柱穴59に切られ、柱穴89（建物2）・112を切る。平面形は不正円形で規模は96×90cmを測り、断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-90°-Wである。出土遺物の図22-15・16はかわらけ小皿である。双方とも器壁厚く、内底面のナデが強い。また、粗土である。17・18はかわらけ大皿である。17は体部の真中辺りに稜を持つ。胎土は砂を多く含むやや粗土である。18は全体に摩滅しているが、胎土は良土で、器壁は薄目で、体部丸みを帯びるが口縁部やや反る。19は青白磁の梅瓶胴部である。水色の透明釉を施す。20は鉄釘である。

土坑21：C-4グリッドで検出した。全貌を調査区外に展開するため、明らかではない。平面形は楕円形か。規模は53×(40)cmを測り、断面形は箱型である。主軸方位はN-104°-W。出土遺物の図22-21は龍泉窯青磁無文碗で、釉薬は深い草色で厚く施釉される。

土坑22：C-4グリッドで検出した。柱穴86に切られる。全貌を調査区外に展開するため明らかではないが楕円形であろうか。確認出来た規模は(60)×(30)cmである。断面形は箱型か。主軸方位はN-70°-Wである。出土遺物の図22-22は瀬戸の輪花型入れ子である。

土坑23：D-3グリッドで検出した。柱穴114・98（建物1・2）に切られる。平面形は楕円形、規模は(118)×60cmである。断面形は箱型か。主軸方向はN-20°-Wである。出土遺物の図22-23はかわらけ小皿である。体部にロクロ回転糸切りの糸が巻きついた痕が残る。内底面に弱くだがナデが残る。胎土は砂を多く含む粗土である。24はかわらけ小皿であり、口縁部に油煙煤を付着させた灯明皿である。内側は摩滅しているがナデが残る。体部は丸みを帯び、口縁部は外反する。胎土は砂を含む粗土である。25・26はかわらけ大皿である。器壁厚く、胎土に砂を含む粗土である。内底面にナデがあり、26は内底面のナデが特に強い。25は口縁部が若干反る。27は鉄釘である。

土坑24：D-2グリッドで検出した。遺構西側は調査区外に展開する。平面形は円形もしくは楕円形で、規模は67×(39)cmであり、断面はU字型を呈する。主軸方向はN-17°-Eである。出土遺物の図23-1は白磁印花文皿である。内面に印花され、外面は体部下方から高台内側にかけて露胎している。釉はほのかに青い白色で薄い施釉である。

土坑25：B-1グリッドで検出した。平面形は楕円形で規模は71×50cmであり、断面形は浅い箱型を呈する。主軸方位はN-14°-Eである。出土遺物の図23-2はかわらけ小皿である。全体に摩滅しているが、内底面に強いナデが残る。やや内湾的に立ち上がる。

土坑26：C-1グリッドで検出した。南側を井戸1に切られる。平面形は概ね不正円形と見られ、規模は119×(80)cmを測る。断面形は皿状であろうか。主軸方位はN-14°-Eである。出土遺物の図23-3は小型かわらけである。内底面に強いナデが入り、胎土は砂が入るがやや良土である。4は鉄釘である。

土坑27：C・D-2・3グリッドで検出した。柱穴98（建物1）に切られる。平面形は楕円形で規模は149×83cmで、断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-107°-Wである。出土遺物の図23-5は青白磁の梅瓶胴部である。やや深い水色の半透明の釉が厚く施釉している。6は鉄釘である。

土坑28：調査区南端のD-4・5で検出した。柱穴94に切られ、柱穴60を切る。調査区に切られ全貌は明

らかではないが、平面形は楕円形であろうか。確認出来た規模は(146)×110cmである。断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-16°-Wである。出土遺物の図23-7は弥生式土器の壺、胴部片である。刷毛目が見られる。8・9はかわらけ小皿である。8は内底面のナデ強く、口縁部外反する。胎土は砂が多い粗土である。9は体部が黒く煤けていて、やはり口縁が外反する。胎土は粗土である。10は輪花型の火鉢の皿類である。外面黒色処理、縦位の磨きが施され菊花のスタンプを押印する。内面は横位の磨きが施される。11は北宋銭である。紹聖元寶の行書で初鑄年は1094年である。外径2.4cm、内径1.8cmを測る。

土坑29: B-4グリッドで検出された。かわらけの一括廃棄土坑である。供伴遺物がないので祭祀的な目的を伴う、かわらけ埋納遺構の可能性も拭えない。かわらけは破片数も合わせて27点出土している。残存率が良くその内図示しえたのはかわらけ大小皿の5点である。遺構は土坑30を切る。平面形は不正円形で規模は61×48cmを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は茶褐色粘質土で5～8cmの泥岩、かわらけ、炭化物を含む。主軸方位はN-58°-Eである。出土遺物の図24-9～11はかわらけ小型皿である。9は全体にやや摩滅しているが内底面にナデ調整が残る。やや内湾しながら立ち上がる。胎土は混入物の多い粗土である。10は底部が歪むほどの強いナデが内底面に残り、かわらけ全体にも歪みがあるが直線的に立ち上がり、胎土は砂の多い粗土である。11は直線的に立ち上がる。内底面は弧を描くようなナデ調整で、砂の多いやや粗土である。12～13はかわらけ大皿である。12は器壁薄く、内湾的に立ち上がるが、胎土に砂を多く含む粗土である。内底面にナデ調整が残る。13は口縁が開く。立ち上がりは直線的であり、内底面中央はナデ調整である。胎土は砂、赤色粒を含む粗土である。

土坑30: B-3グリッドで検出した。東側で柱穴73を切り、柱穴51に切られる。西側で土坑33・34を切り、土坑29に切られる。遺構検出作業当初は幾つかの遺構に見えたが精査を繰り返し、結果的に一つの遺構として捉えた。西側上層では土坑35同様に30～40cmの安山岩(伊豆石)が集中して多く出土している。土坑30の中で、度重ねて掘り返しがあったようである。平面形は不正楕円形で規模は214×108cmを測り、断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-90°-Wである。出土遺物の図25-1～6はかわらけである。1は小皿で器壁が厚く体部の上位に強い稜が入り内底面にナデ調整が残る。胎土は砂を多く含むやや粗土である。2は小皿で、器壁が厚く全体に歪む。体部の中央に稜を持ち内底面の中央にナデが見られる。胎土は含有物の多い粗土である。3も小皿である。器壁薄く内湾して立ちあがるが胎土は砂の多いやや粗土である。4は小皿の灯明皿で、内底面外周をナデている。外体部にはロクロ回転糸切りの糸が巻きついた痕が残る。胎土は砂の入るやや粗土である。5・6は大皿である。5は小片でありながら、成形の雑さがうかがえる。内底面ナデ調整あり、外体部上位に稜が入る。胎土は含有物の多い粗土である。6は器壁厚く全体に摩滅している。胎土は含有物の多い粗土である。7は白かわらけの皿である。胎土は砂が入り、色調は乳白色である。8はIc類の瓦質火鉢で、黒色処理されている。9はII類の火鉢でかわらけ質。体部下位ヘラ削りされている。10は火鉢の皿類である。黒色処理され輪花のヘラ刻みが見られ、底部は砂底で体部外面は指頭後に工具による雑なナデが見られる。11は常滑の壺である。12は龍泉窯青磁鎬蓮弁文皿。何度も傾きを確認したが皿になる。薄い草色の透明釉が厚く施釉される。13は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗。やや青味がかかった灰色の釉薬をやや薄めに施釉する。14は景德鎮窯の白磁口元印花文皿。底部は釉をぬぐい、内面印花文が施され、白色の透明釉を薄く施釉している。15は褐釉の壺である。口縁から胴部にかけて降灰釉がかかる。胴部に熔着痕がある。口縁部と胴部は接合できなかったが同一個体と考えられる。成形はヨコナデである。16は平瓦。表面は粗めの離れ砂、叩き目が転写する。裏面は格子と三条線の叩き目。八幡宮出土のF類と叩き目が類似する。17も平瓦である。表面は黒色微砂による離れ砂。裏面は格子の叩き目である。永福寺III期と類似する。18、19は鉄釘である。遺構からは他に鉄釘が16本出土している。20は銭である。□祐元寶と読みとれ北宋銭の篆書で、景祐元寶か嘉祐元寶であろう。

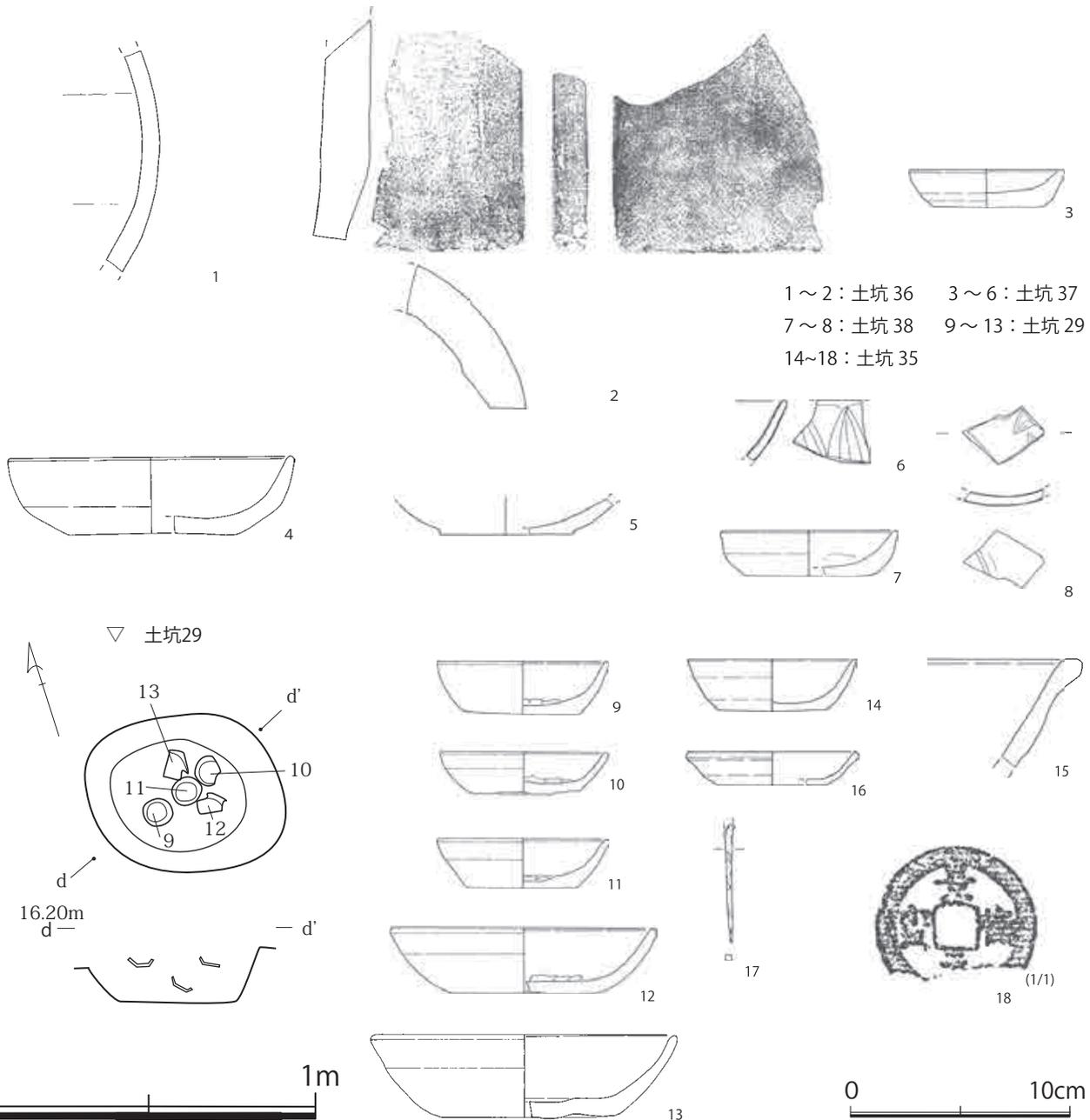
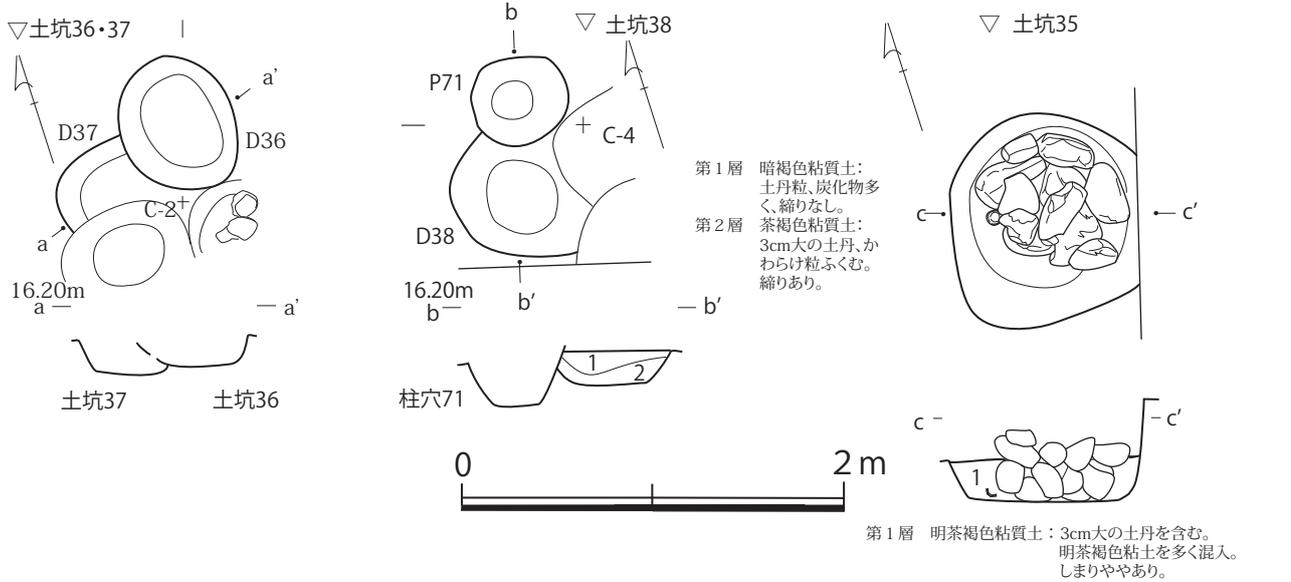


図24 第2面 土坑(3)・柱穴71・出土遺物

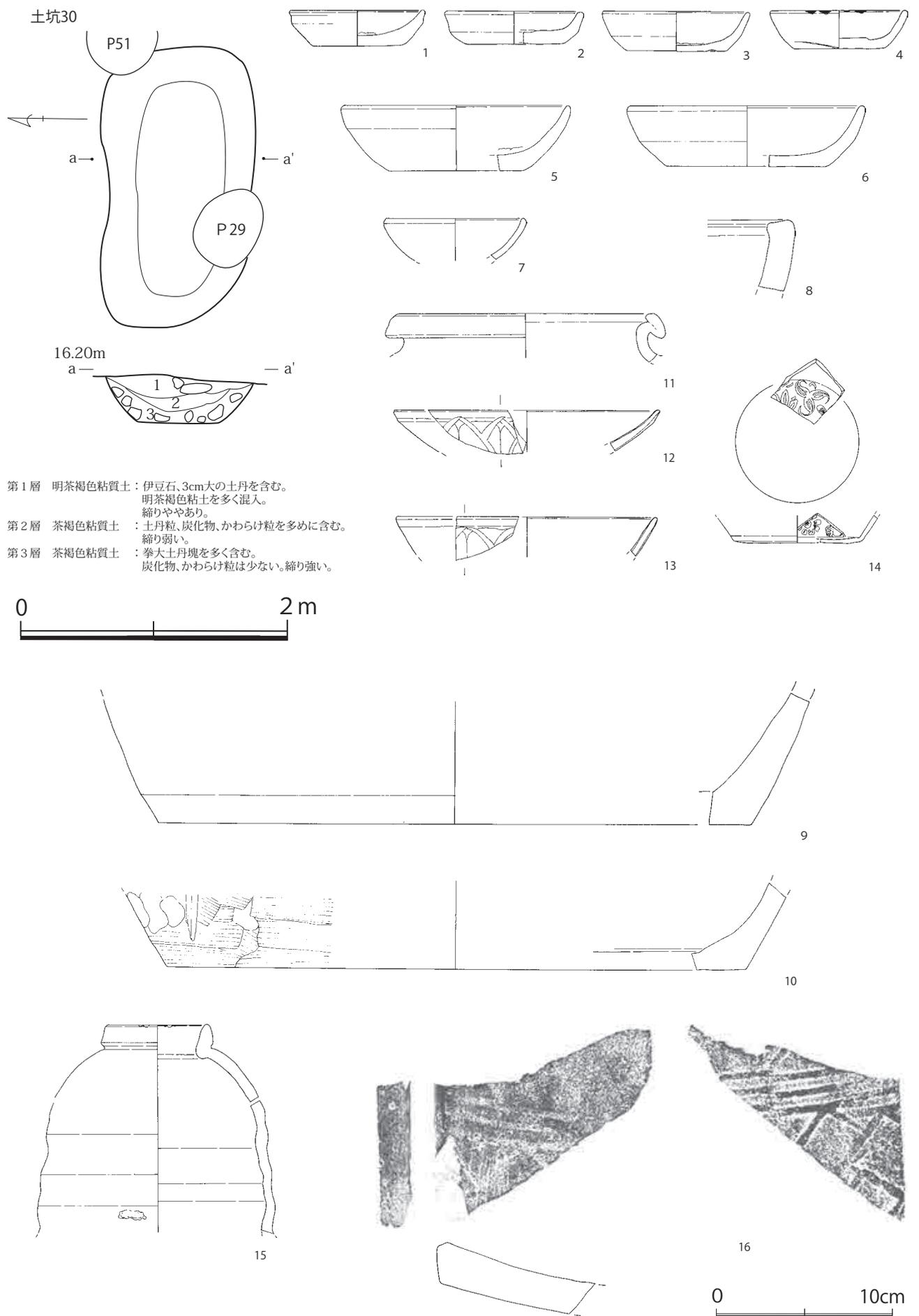


図25 第2面 土坑30(1)・出土遺物

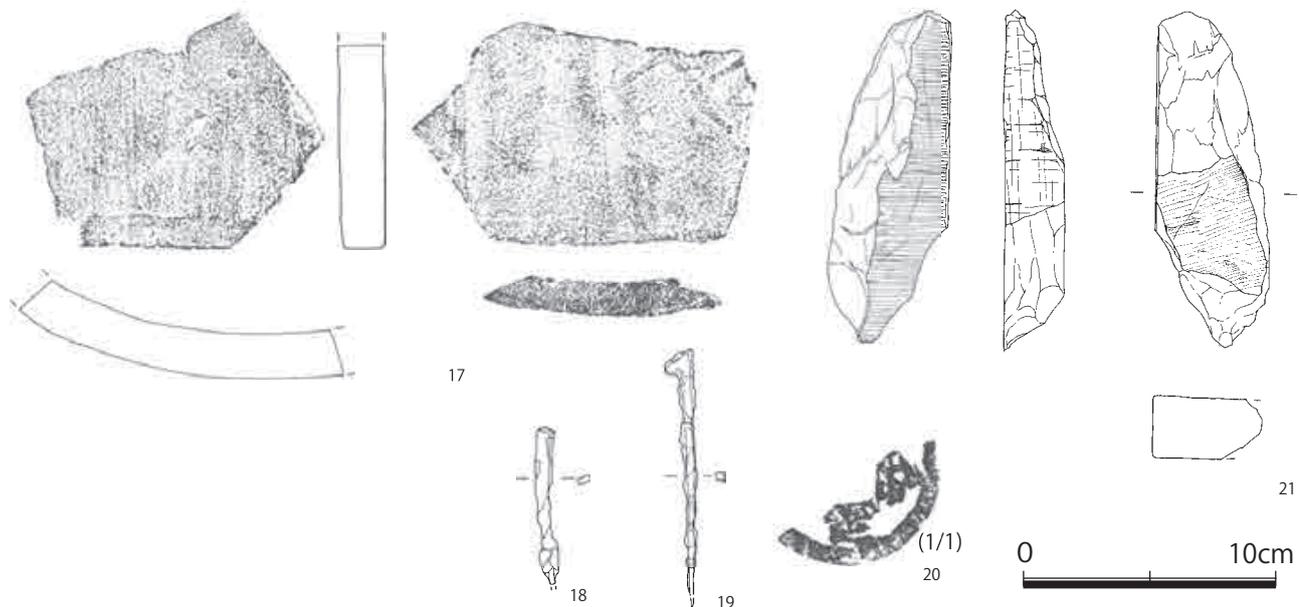


図26 第2面 土坑30(2)・出土遺物

21は滑石である。石鍋の底部を転用した温石か。三面が平坦に削られ残る。厚みは2.4cmを測る。

土坑31：B-1グリッドで検出した。平面形は不正円形で規模は70×56cmを測る。断面形はU字形である。主軸方位はN-29°-Wである。出土遺物の図23-12はかわらけ大皿である。内底面のナデ調整が強い。器壁厚く、内湾して立ちあがる。胎土は混入物の多い粗土である。13は常滑甕の口縁片で縁帯の幅は4cmである。9形式であろう。

土坑33：B-4グリッドで検出した。土坑30に切られ、土坑34を切る。平面形は楕円形か。確認出来た規模は94×(50)cmである。断面形不明。主軸方位はN-60°-Wである。出土遺物の図23-14はかわらけ小皿である。内面は口縁までナデ上げ、器壁厚く体部丸みを帯びる。胎土は砂を多く含む粗土である。15から18はかわらけ大皿である。15は内底面に強いナデ調整が残る。器壁が厚く、胎土は混入物の多い粗土である。16は内底面にナデ調整残り、体部は丸みを持つ。胎土は砂を多く含む粗土である。17は底径が小さく、内湾して立ちあがり、内底面に強いナデが入る。胎土は砂を含むやや粗土である。18は口縁内湾する。胎土は砂多く混入物の多い粗土である。口縁部に油煙煤が付着しているので灯明皿であろう。19・20は鉄釘である。

土坑34：B-4グリッドで検出した。土坑30・33に切られ、土坑38を切る。平面形は不正円形か。確認出来た規模は(46)×(39)cmである。断面形は逆台形か。主軸方位不明である。出土遺物の図23-21はかわらけ小皿の灯明皿である。内外面煤けている。22はかわらけのとりべ状小皿である。内面気泡が立ち白色の付着物がある。23は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の口縁部である。薄い草色の半透明の釉をやや薄く施釉している。

土坑35：A-1グリッドで検出した。東側を調査区に切られる。平面形は不正円形で、規模は117×(100)cmを測り、断面形は箱型である。主軸方位はN-18°-Wである。覆土内には30～40cmの安山岩(伊豆石)を充填している。西隣の土坑30の上層でも同じように安山岩が集中して出土していた。土坑30とは遺物の接合関係もあることから同時期の遺構と思われる。周囲の礎石建物の礎石を集め土坑30・35に一括廃棄したものと思われる。安山岩の数は20数個に及び周辺に大きな礎石建物の存在が窺える。出土遺物の図24-14はかわらけ小皿である。内底面ナデがあり、胎土は砂などの混入物の多い粗土である。15は常滑産片口鉢である。口縁を引き上げ断面三角形を呈する。16は瀬戸入子。底部は糸切りである。17は鉄釘。18は北宋銭の景德元寶の真書で、初鑄年は1004年である。外形2.4cm、内径1.8cmを測る。

土坑36：B・C-1グリッドで検出された。土坑37を切る。平面形は不正円形で、規模は76×61cmである。断面形はU字形を呈する。主軸方位はほぼ真北を示している。出土遺物の図24-1は褐釉の壺の胴部である。

2は丸瓦。表面は、横位のナデと縦位の叩き目、側面はヘラ削りが見られる。裏面は横位の糸切り痕、布目痕、離れ砂が見られる。永福寺I期A類と同類である。

土坑37：C-1グリッドで検出した。土坑36・柱穴90（建物1）・101に切られる。平面形は楕円、もしくは不正円形か。確認出来た規模は(50)×(35)cmを測る。断面形は箱型もしくは逆台形を呈する。主軸方向は不明である。出土遺物の図24-3はかわらけ小皿である。器壁が厚く、内底面ナデ調整で、胎土は含有物の多い粗土である。4は大型かわらけである。体部中央やや下に稜を持ち、胎土は混入物の多い粗土である。5は東濃型の碗である。内面無釉である。外面は施釉され、底部糸きり。内底面は指でぐっと押さえられている。体部の整形はヨコナデで、胎土は灰色の緻密な土であり、不明な点の多い遺物である。6は龍泉窯青磁碗鎚蓮弁文碗。半透明の薄い草色の釉がやや厚く施釉される。

土坑38：C-4グリッドで検出した。土坑33・34・柱穴71に切られる。平面形は不明だが、不正円形であろう。確認出来た規模は(78)×(49)cmを測り、断面形はU字形を呈する。主軸方位は不明。出土遺物の図24-7はかわらけ小皿である。全体に摩滅が著しいが、内底面にナデが入り、胎土は砂の入るやや粗土である。8は器種不明だが、青磁皿か。内面の文様は凸状に草花文を施文する。外面は線描き蓮弁か。

柱穴(図27～28)

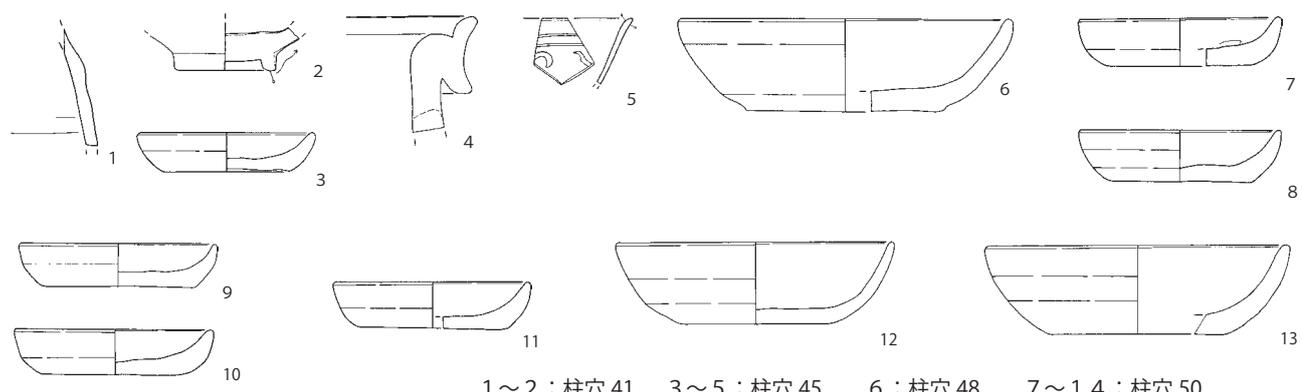
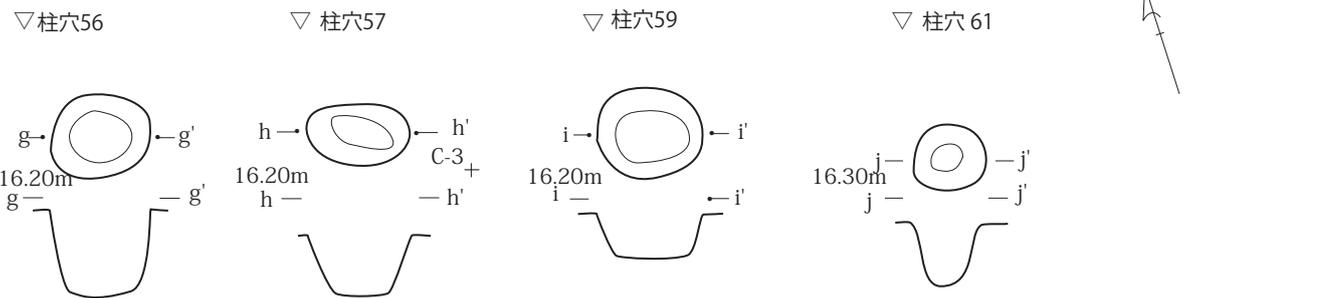
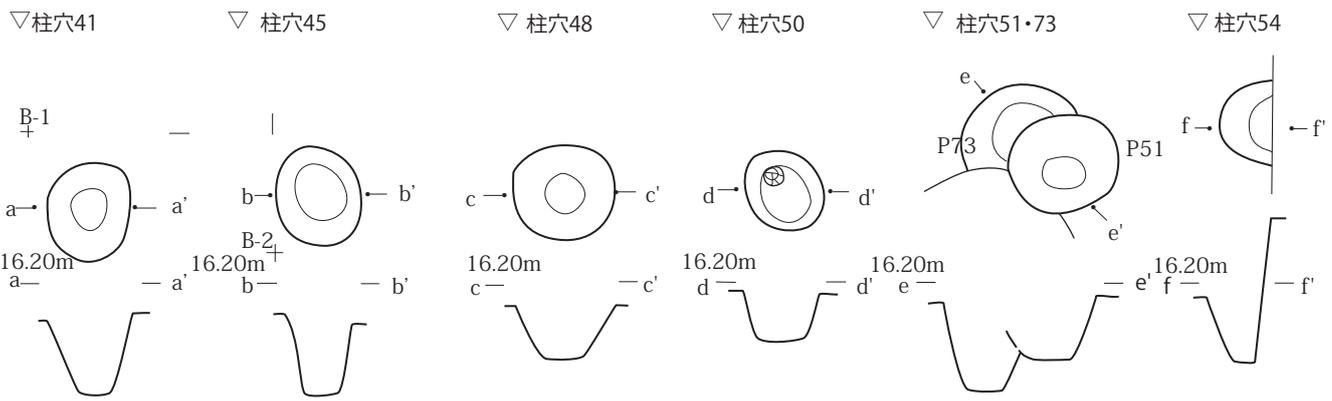
柱穴は69穴検出した。その内22穴は建物1・2である。それ以外の柱穴は建物としての配列の規則性はなかったが、調査区を広げてみれば、その可能性がないとは言えないだろう。以下出土遺物が図示しえたものだけに限り説明を加える。

柱穴41：A-1グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、規模は54×45cmを測る。断面形は逆台形であり、覆土は黒褐色粘質土で炭化物の多い締りのない土である。出土遺物の図27-1は褐釉の壺の胴部である。表面は二次焼成を受けているのか、荒れている。2は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の底部で、高台から内側は露胎する。釉薬は深い草色で厚く施釉される。

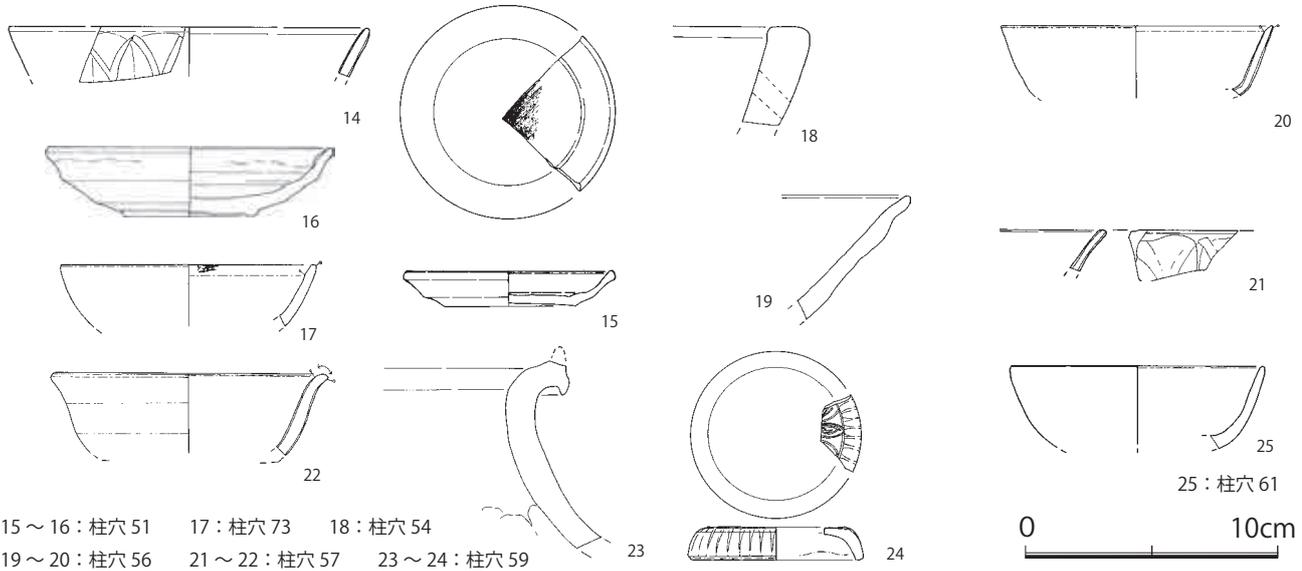
柱穴45：A-1グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、規模は54×48cmを測る。断面形は箱型である。覆土は暗褐色粘質土で、4cm大の泥岩粒、かわらけ片、炭化物を含む粘性のある土である。出土遺物の図27-3はかわらけ小皿で、器壁厚く、胎土は砂を含む粗土である。4は常滑甕の口縁片である。6b形式か。6は白磁口元印花文皿である。内体部うっすらだが文様が見える。

柱穴48：B-2グリッドで検出した。平面形は円形で規模は56×55cmを測る。断面形は逆台形で、覆土は暗褐色粘質土で炭化物が多く、泥岩粒、かわらけ片を含む。出土遺物の図27-6はかわらけ大皿。成形は粗雑であり、器壁厚くやや内湾して立ちあがる。胎土は砂の多い粗土である。

柱穴50：A-3グリッドで検出した。かわらけ一括廃棄遺構である。供伴遺物が少ないので祭祀的な目的を伴うかわらけ埋納遺構の可能性も拭えないであろう。かわらけは破片数も合せて17点であり、青磁片1片が出土している。残存率が良く、その内で図示しえたのはかわらけ大中小の7点である。内5点が小型のかわらけであることも注視すべきである。遺構の平面形はほぼ円形であり、規模は47×40cmを測る。断面形は箱型を呈する。覆土は暗褐色粘質土である。炭化物は多いが、含有物の少ない土層である。底部でかわらけが伏せた形で潰れて出土した。出土遺物の図27-7～11はかわらけ小皿である。7は器壁厚く体部は直線的に立ち上がる。内底面にナデ調整が残り、胎土は含有物の多い粗土である。8はやや内湾して立ちあがり口唇部すぼまる。内底面はナデ調整され、胎土は混合物の多い粗土である。9は体部中段に稜を持ち、内底面に強いナデが入る。胎土は砂、赤色粒を多く含む粗土である。10は器壁厚く体部中段に稜を持つ。胎土は混入物の多い粗土である。11は器壁厚くやや直線的に立ち上がり、胎土は混入物をやや多く含む粗土である。12はかわら



1~2 : 柱穴 41 3~5 : 柱穴 45 6 : 柱穴 48 7~14 : 柱穴 50

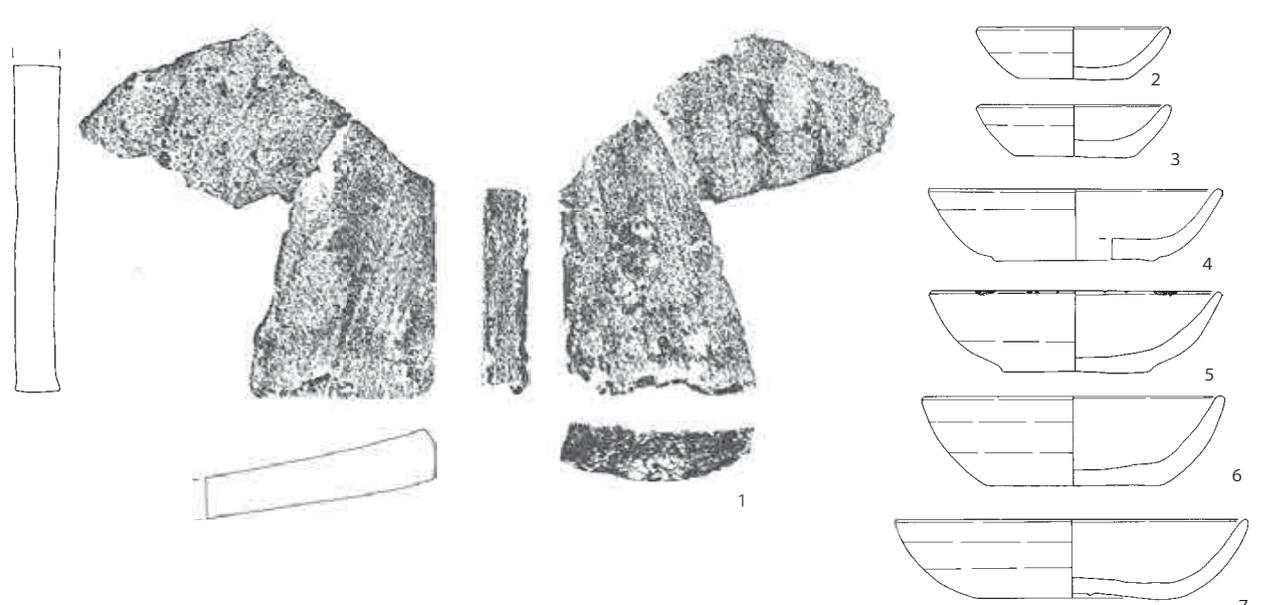
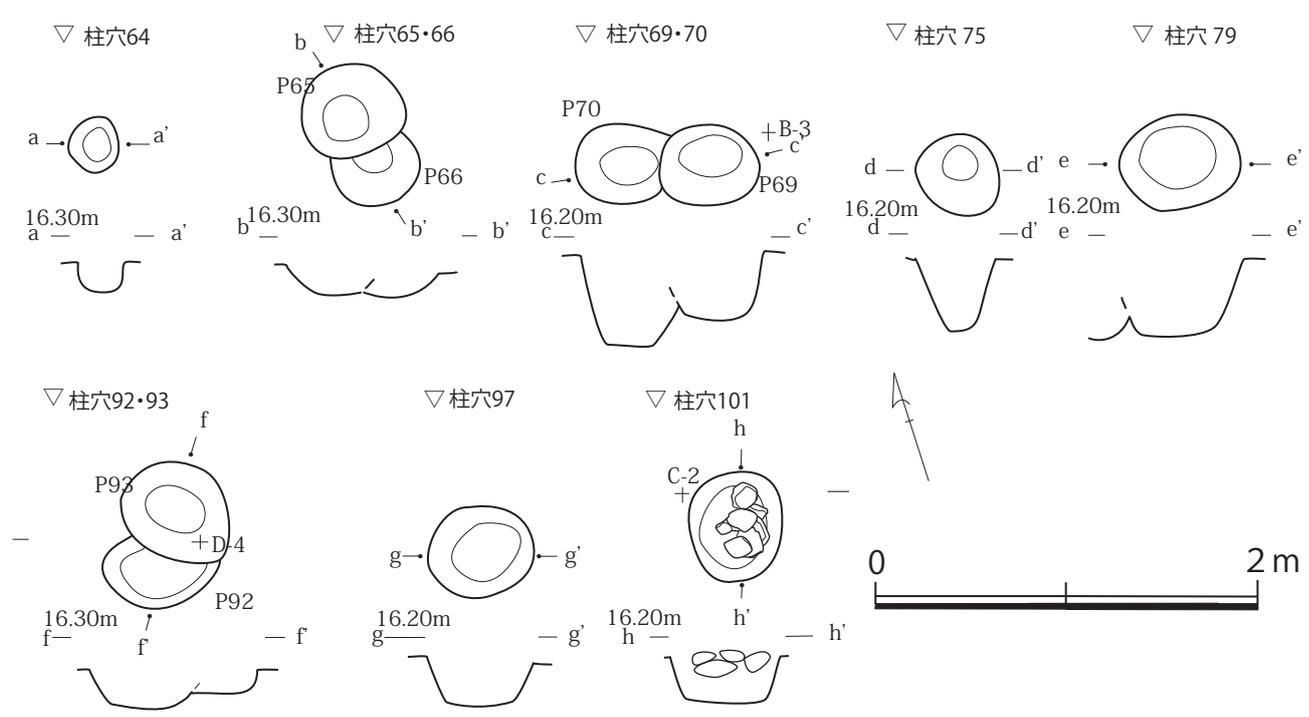


15~16 : 柱穴 51 17 : 柱穴 73 18 : 柱穴 54
19~20 : 柱穴 56 21~22 : 柱穴 57 23~24 : 柱穴 59

25 : 柱穴 61



图27 第2面 柱穴(1)·出土遺物



1：柱穴 64 2～7：柱穴 66 8～10：柱穴 70 11～13：柱穴 71
 14：柱穴 75 15～17：柱穴 79 18：柱穴 93 19：柱穴 97

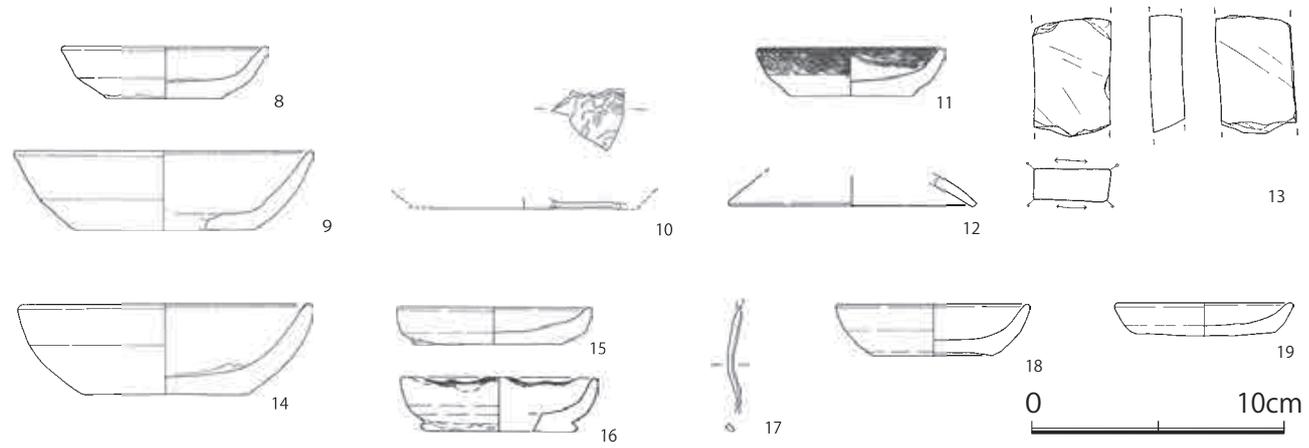


图28 第2面 柱穴(2)·出土遺物

け中皿で、遺構の底で潰れていたものである。成形は器壁薄く口縁部に強いヨコナデが一周するが全体に摩滅していてよくわからない。胎土は砂をやや多く含むやや粗土である。13はかわらけの大皿である。やや内湾して立ち上がり、胎土は含有物が多い粗土である。14は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の口縁部の小片である。青みがかかった草色の釉が厚く施釉される。

柱穴51：A-3グリッドで検出した。土坑30・柱穴73を切る。平面形は円形で規模は58×52cmを測る。断面形は逆台形か。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。切り合いや出土遺物等から第1面の遺構の掘り残しの可能性も否めない。出土遺物の図27-15は東濃型山皿である。底部は糸切りされ体部は中段に強い稜を持つ。内底面はナデ調整され紅が残る。16は緑釉小皿か。口縁部はヨコナデされ透明な緑色釉が厚くかかる。底部は糸切りで高台はやや雑に削り出しされ体部は二段の回転ヘラ削りである。

柱穴54：A-1グリッドで検出された。東側を調査区壁に切られる。平面形はおそらく円形で確認出来た規模は56×(26)cmである。断面形もおそらく逆台形である。覆土は暗褐色粘質土で3cm大の泥岩、かわらけ片、炭化物を含む粘性のある土である。出土遺物の図27-18は火鉢の口縁部、I B類である。体部はヘラ削りされ、穿孔がある。

柱穴56：A-2グリッドで検出した。平面形は不正円形で規模は54×44cmを測る。断面形は箱型を呈する。覆土は暗褐色粘質土で炭化物多く、かわらけ片、泥岩粒も見られる。出土遺物の図27-19は尾張型の山茶碗の7形式。体部から口縁部にかけてロクロ目がややきつく、すぼまっていき口縁部は強いヨコナデが入る。20は白磁の口元皿である。釉が厚く施釉され、体部下方に釉溜りしている。

柱穴57：C-2グリッドで検出した。柱穴88(建物1)を切る。平面形は楕円形で規模は55×35cmを測る。断面形は逆台形である。覆土は暗褐色粘質土で泥岩粒、かわらけ片、炭化物を含む粘性のある土である。出土遺物の図27-21は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の口縁片である。深い草色の釉が厚く施釉される。22は白磁の口元皿である。白色の釉がやや厚めに施釉される。

柱穴59：B・C-3グリッドで検出した。土坑20を切る。平面形はほぼ円形で規模は58×50cmを測る。断面形は箱型を呈する。覆土は暗茶褐色粘質土で3～4cmの泥岩やかわらけ片、炭化物の入る粘性のある土である。出土遺物の図27-23は常滑甕の口縁部片で、縁帯の上部が欠損している。土坑34と接合関係にある。6a形式か。24は瀬戸の合子の蓋である。口縁部は露胎し、天井部、側面は施文される。やや青味がかかった緑色の透明釉である。

柱穴61：C-3グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で規模は37×35cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は茶褐色粘質土で明るい土である。5～8cmの泥岩、かわらけ片、炭化物を含む。出土遺物の図27-25は瀬戸の入れ子である。胎土はきめ細かく、色調は黄色から淡い燈色で、調整はヨコナデである。

柱穴64：C-4グリッドで検出した。平面形は不正円形で規模は30×26cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は炭化物の多い暗褐色粘質土である。出土遺物の図28-1は平瓦である。表裏面とも黒色微砂による離れ砂が顕著であり、永福寺Ⅲ期に類似する。

柱穴66：D-4グリッドで検出した。かわらけ一括廃棄遺構である。供伴遺物がないので祭祀的な目的を伴う、かわらけ埋納遺構の可能性も拭えない。かわらけは破片数も合せて27点出土している。残存率が良くその内図示しえたのはかわらけ大小の6点である。遺構は柱穴65に切られる。平面形は不正円形で規模は57×(30)cmを測る。断面形は皿状を呈する。覆土は炭化物の多い暗褐色粘質土である。出土遺物の図28-2～7はかわらけである。2はかわらけ小皿で、内底面に強いナデが入り体部中段に稜が入る。胎土は砂の多い粗土である。3もかわらけ小皿で、内底面にナデが入り、直線的に立ち器壁は厚い。胎土は砂、赤色粒の入る粗土である。4はかわらけ大皿で、直線的に立ち上がり胎土は砂を多く含む粗土である。5はかわらけ大皿で、

表4 第2面遺構観察表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深度	底標高	覆土/備考
P41	A-1	54	45	41.9	15.627	黒褐色
P43	B-1・2	52	45	24	15.841	暗褐色D
P44	B-2	70	53	28.8	15.78	暗褐色C
P45	A-1	54	48	41	15.62	暗褐色C
P46	B-1	48	30	30	15.747	暗褐色C
P47	A-2	53	50	44.7	15.745	暗褐色C
P48	B-2	56	55	28	15.835	暗褐色D
P49	B-2	70	45	39.5	15.722	
P50	A-3	47	40	23	15.91	暗褐色D
P51	A-3	58	52	35	15.79	暗褐色D/P73・P30を切る。P73と接合
P52	A-1	56	(26)	33.7	15.717	暗褐色C
P53	A-2	(57)	(47)	34.5	15.785	茶褐色
P54	A-2	46	(27)	34.5	15.78	暗褐色D
P55	A-2	45	43	18.1	15.954	暗褐色C
P56	A-2	54	44	43	15.71	暗褐色D
P57	C-2	55	35	32.7	15.717	暗褐色C
P58	C-2	48	48	22	15.875	茶褐色
P59	B・C-3	58	50	23	15.905	暗褐色C/D20を切る/D34と接合
P60	D-5	(32)	(27)	17.5	15.945	茶褐色
P61	C-3	37	35	40.5	15.665	茶褐色
P62	D-1	58	55	38.6	15.633	暗褐色C
P63	C-1	62	56	38.4	15.659	暗褐色C
P64	C-4	30	26	13.5	16.027	暗褐色D/D28と接合
P65	D-4	55	52	34	15.785	暗褐色C/P66を切る
P66	D-4	57	(30)	31	15.785	暗褐色D
P67	A-1	(54)	(41)	26.4	15.765	暗褐色C/P68を切る
P68	A-1	(60)	(37)	40.4	15.65	茶褐色
P69	B-3	54	45	33	15.73	暗褐色C
P70	B-3	45	(45)	34.5	15.74	暗褐色D
P71	C-3	55	50	32.5	15.795	暗褐色D/D38を切る
P72	A-3	50	43	39.5	15.726	暗褐色C
P73	A・B-3	68	(38)	32.7	15.79	暗褐色D/P51と接合
P74	D-2	49	37	37.7	16.656	暗褐色C
P75	D-2	48	40	36.4	15.694	暗褐色D/P108を切る
P76	D-1	51	(45)	33.2	15.67	暗褐色C/P84を切る
P77	C-1	69	(35)	36.3	15.66	D36と接合
P78	C-5	36	36	23.5	15.88	暗褐色C
P79	B-2	65	54	36.9	15.698	暗褐色D/P91を切る
P81	B-3	67	48	33.7	15.78	茶褐色/D30と接合
P82	B-1	60	(47)	29.9	15.752	茶褐色
P83	C-1	39	36	37.9	15.632	暗褐色D
P84	D-1	54	(45)	22.2	15.791	茶褐色
P85	C-1	55	(34)	26.3	15.77	茶褐色
P86	C-4・5	33	(28)	20.5	15.945	
P87	A-2	50	(36)	24.2	15.865	暗褐色C/P53を切る
P88	C-3	(54)	(48)	33.3	15.686	暗褐色C/P89を切る
P89	C-3	(61)	(42)	39.4	15.68	茶褐色
P90	C-2	(68)	54	39	15.628	暗褐色C/P91・D37を切る
P91	C-2	56	(47)	36.6	15.652	暗褐色C
P92	D-4	46	(35)	12.8	16.026	暗褐色C
P93	C・D-3	62	49	13.6	15.948	P92を切る

遺構番号	グリッド	長径	短径	深度	底標高	覆土/備考
P94	D-5	74	56	34.8	15.717	暗褐色D/D28を切る
P95	A-3	(40)	(37)	39.9	15.73	茶褐色
P96	A-3	75	(30)	30.9	15.83	暗褐色C/P95を切る
P97	B-3	56	49	24.1	15.86	
P98	D-3	57	53	24.2	15.803	暗褐色C/D23・D27・P114を切る
P99	D-4	37	34	21.8	15.936	暗茶
P100	D-4	40	37	23.3	15.91	
P101	B-2	61	48	17.1	15.876	P90を切る
P107	D-3	(90)	(19)	8.5	15.989	
P108	D-2・3	54.1	(42)	16.5	15.91	茶褐色/P107を切る
P109	C-1	40	35	23.3	15.783	暗褐色C/P85を切る
P110	C-1	55	(39)	25.9	15.756	暗褐色C/P85を切る
P111	B-1	42	(22)	19.7	15.816	暗褐色C
P112	C-3	65	(57)	14.3	15.907	暗褐色C/P88・P89を切る
P113	B-2	48	(40)	32.9	15.762	茶褐色
P114	D-3	69	(54)	34.2	15.695	茶褐色
D17	A-1	150	80	24.7	15.793	暗褐色D/D31と接合
D18	A-2	96	57	19.5	15.925	暗褐色C/P49を切る
D19	B-2・3	98	(80)	22.4	15.824	暗褐色C/P88・P89を切る
D20	C-3	96	90	28.5	15.765	暗褐色D/P89を切る
D21	C-4	53	(40)	11	16.060	暗褐色D
D22	C-4	(60)	(30)	10	16.070	暗褐色D/P86を切る
D23	D-3	(118)	60	17.2	15.865	茶褐色
D24	D-2	67	(39)	23.5	15.8	暗茶
D25	B-1	71	50	11	15.95	茶褐色
D26	C-1	119	(80)	22.9	15.778	茶褐色
D27	C・D-2・3	149	83	22	15.835	暗褐色D
D28	D-4・5	(146)	110	14.7	15.988	茶褐色/P64と接合
D29	B-4	61	48	11.5	15.97	茶褐色/D30を切る
D30	B-3	214	108	32.5	15.785	明茶/D33・D34・P73を切る/D35・P81と接合
D31	B-1	70	56	19.6	15.884	暗褐色D/D17と接合
D33	B-4	94	(50)	11.5	15.95	暗褐色D/D34・D38を切る
D34	B-4	(46)	(39)	28.5	15.825	暗褐色D/D38を切る/P59と接合
D35	A-3	117	(100)	32	15.89	明茶/D30と接合
D36	B・C-1	76	61	15.2	15.894	茶褐色/P77と接合
D37	C-1	(50)	(35)	11	15.866	暗褐色D
D38	C-4	(78)	(49)	29	15.838	暗褐色D

(単位：海拔m/以外cm)

P:ピット D:土坑

遺構覆土詳細

- 暗褐色C：暗褐色粘質土、3～4cm大の泥岩かわらけ、炭化物含む。粘性あり。
- 暗褐色D：暗褐色粘質土、炭化物多く、4cm前後の泥岩、かわらけ片含む。(含有物少ない)
- 茶褐色：茶褐色粘質土、(明るい土)5～8cm大の泥岩、かわらけ片、炭化物含む。
- 暗茶：暗茶褐色粘質土、拳大の泥岩、かわらけ片炭化物少量含む。
- 明茶：明茶褐色粘質土、伊豆石を主体とし、3cm大の泥岩、明茶褐色粘質土を混入。縮りややあり。
- 黒褐色：黒褐色粘質土、炭化物多い、縮りなし。

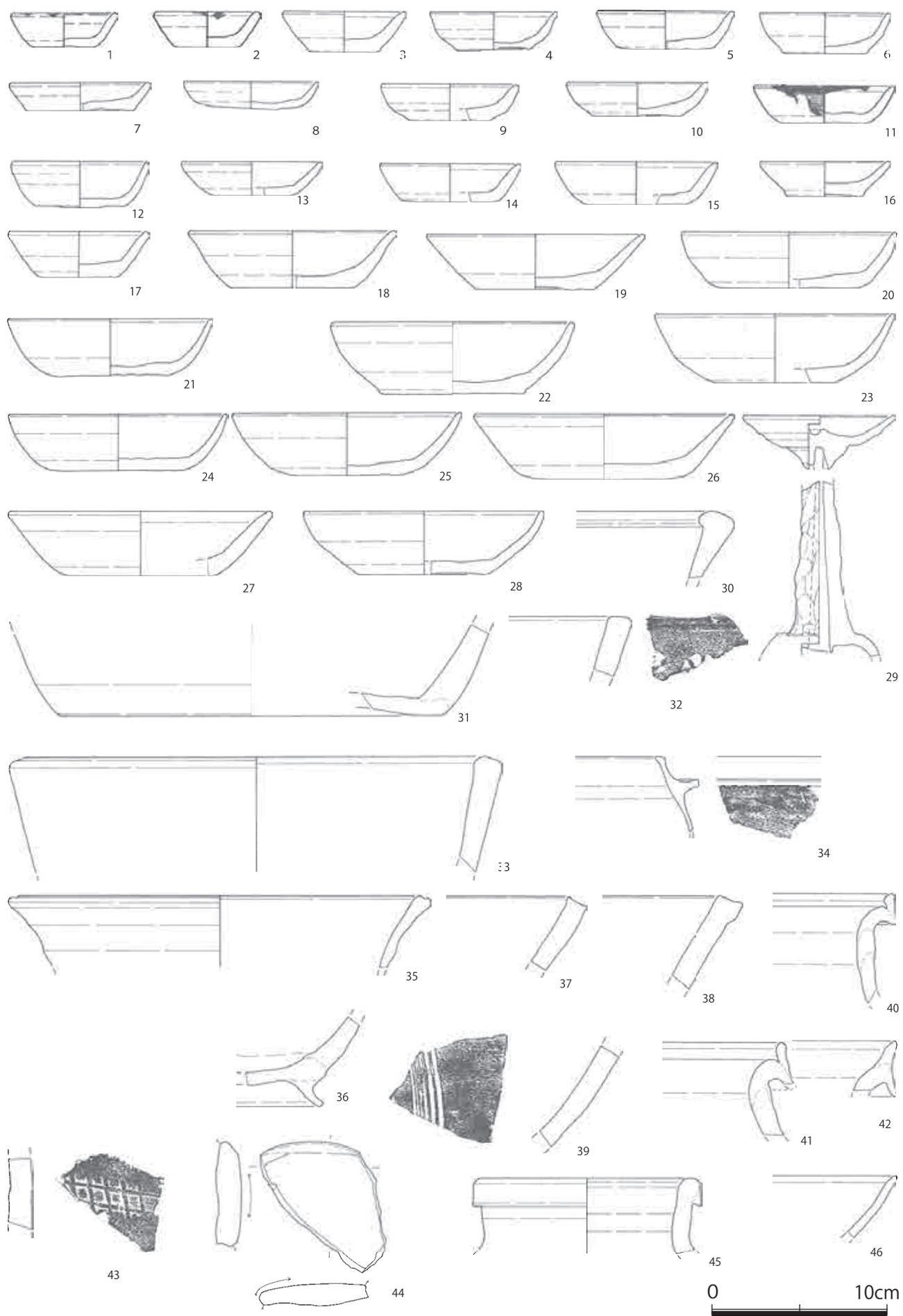


图29 第2面 1面下2面上出土遺物(1)

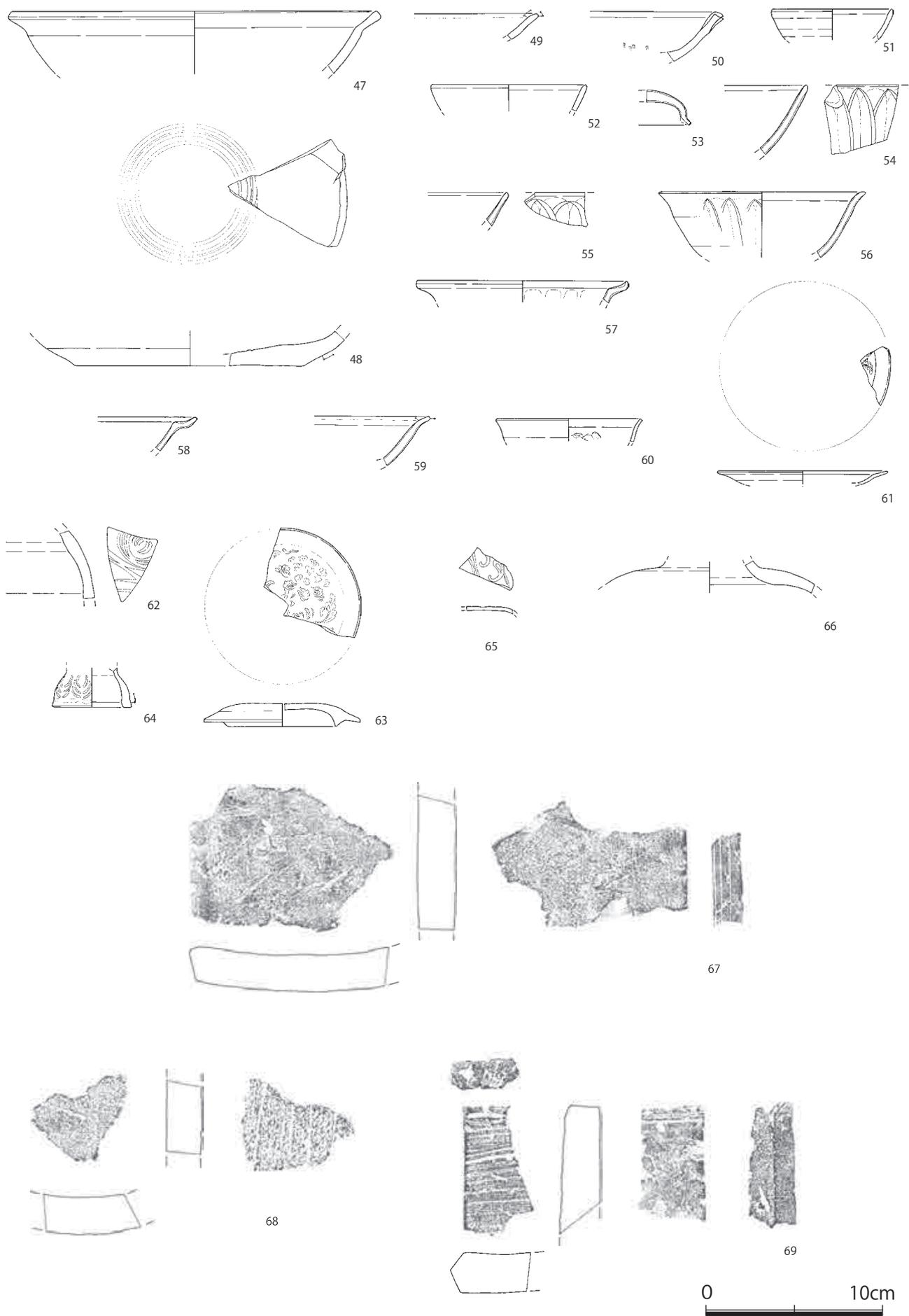


图30 第2面 1面下2面上出土遺物(2)

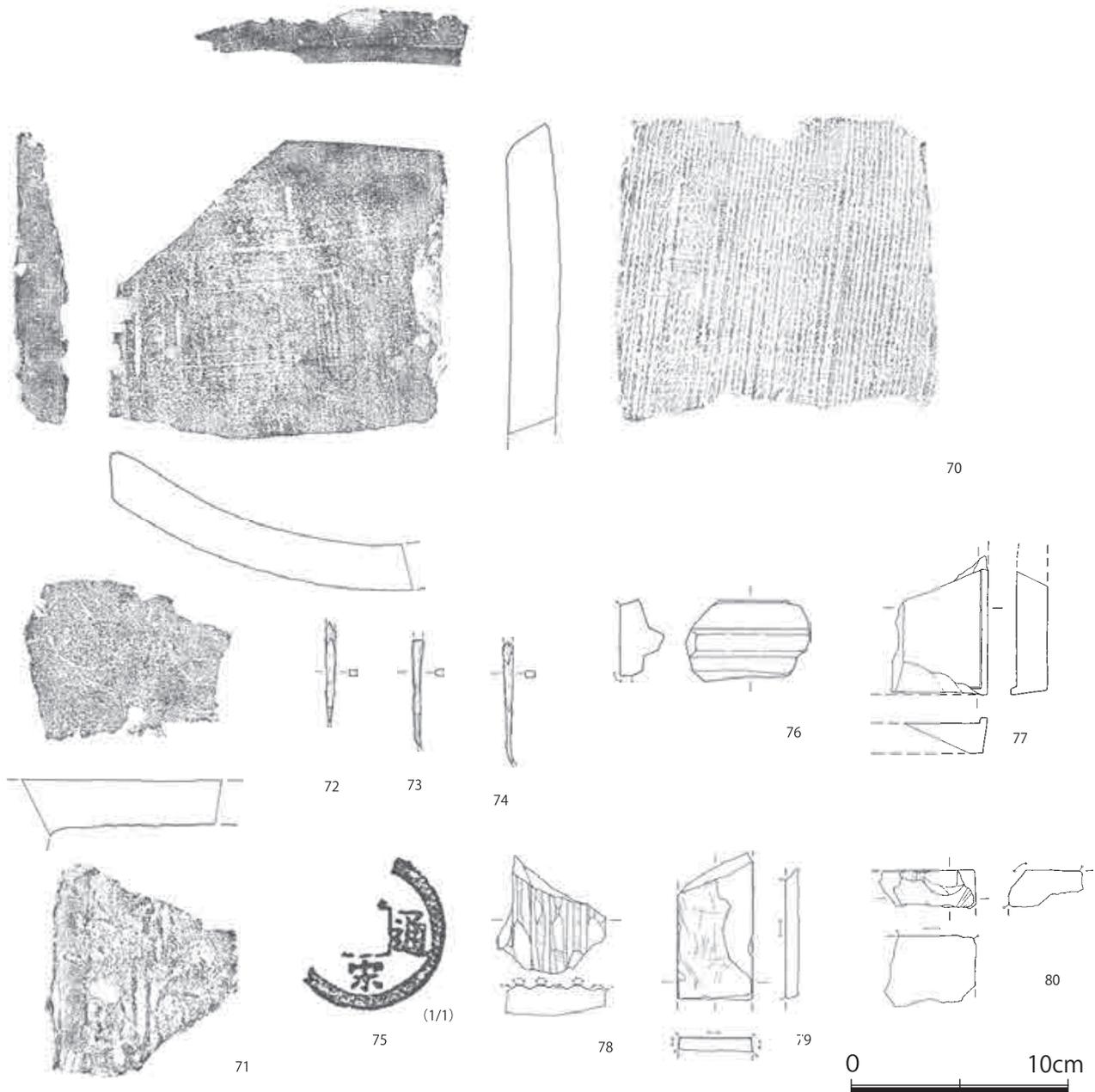


図31 第2面 1面下2面上出土遺物(3)

口縁に油煙煤が付着するため灯明皿として使用したものであろう。内底面は強いナデ調整で、胎土は砂を多く含む粗土である。6はかわらけ大皿で、内底面強いナデが入る。胎土は混入物の多い粗土である。7はかわらけ大皿で、内底面強いナデが入り歪む。薄手だが砂、赤色粒の多く入るやや粗土である。

柱穴70：B-3グリッドで検出した。柱穴69(建物1)に切られる。平面形は不正円形で規模は45×(45)cmを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図28-8はかわらけ小皿である。内底面に強いナデが入る。胎土は砂を多く含むやや粗土である。9はかわらけ大皿である。全体に摩滅が著しいが、内底面にナデが入る。胎土はやや砂の入ったやや粗土である。10は白磁の口元印花文皿の底部である。内底面に印花が施文され、器形は中央が盛り上がる。釉薬は薄い。

柱穴71：C-3グリッドで検出された。土坑38を切る。平面形は不正円形で規模は55×50cmを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は暗褐色粘質土で炭化物多く、泥岩粒、かわらけ片を少量含む。出土遺物の図28-11はかわらけ小皿である。口縁に油煙煤を付着させているので、灯明皿であろう。内底面は摩滅し調整が不明である。胎土は砂を多く含む粗土である。12は白かわらけ、蓋か。やや赤味を帯びた乳白色で砂を少量

含有し、内外面ヨコナデ調整である。13は砥石である。伊予産の中砥で両面使用痕がある。

柱穴73: A・B - 3グリッドで検出。土坑30・柱穴51に切られる。平面形はほぼ円形で規模は68×(38)cmを測る。断面形は逆台形か。覆土は暗褐色粘質土で含有物は少ないが炭化物の多い土である。出土遺物の図27 - 17は白磁の口元碗である。灰白色の釉が薄く施釉される。柱穴51と接合関係にある。

柱穴75: D - 2グリッドで検出した。柱穴108を切る。平面形は不正円形、規模は48×40cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は含有物は少ないが炭化物は多い暗褐色粘質土である。出土遺物の図28 - 14はかわらけ大皿。内底面にナデ調整入り、胎土は砂を多く含む粗土である。

柱穴79: B - 2グリッドで検出した。柱穴91(建物2)を切る。平面形は楕円形、規模は65×54cmを測る。断面形はU字形か。覆土は炭化物の多い暗褐色粘質土である。出土遺物の図28 - 15はかわらけ小皿である。成形が粗雑で内底面にナデ調整が残り、胎土は砂を多く含む粗土である。16はかわらけ小皿である。口縁の一部が摩耗し油煙煤が付着しているので灯明皿であろう。成形は粗雑であり、胎土は砂を多く含む粗土である。17は鉄釘。

柱穴93: C・D - 3グリッドで検出した。柱穴92を切る。平面形は不正円形で規模は62×49cmを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物の図28 - 18はかわらけ小皿である。器壁は厚く、内底面ナデている。胎土は混入物の多い粗土である。

柱穴97: B - 3グリッドで検出した。平面形は不正円形で規模は56×49cmを測る。断面形は箱型を呈する。出土遺物の図28 - 19はかわらけ小皿である。器高低く内底面に強いナデが残る。胎土は砂、赤色粒、砂が多く入る粗土である。

柱穴101: B - 2グリッドで検出した。平面形は不正円形、規模は61×48cmである。断面形は箱型を呈する。覆土上層に30cm前後の泥岩を10個弱包含する。

第2面 1面下2面上出土遺物(図29・30・31)

層序の第2層、第1面構築土と遺構検出面の第3層の上面である第2面上の精査時に出土した遺物を収めた。

1～17はかわらけ小皿である。1は器高が高く、口唇部に油煙煤が付着する、灯明皿であろう。成形はやや粗雑である。胎土は砂を若干含むやや粗土である。2は口唇部に油煙煤が付着する、灯明皿だろう。器高が高く内底面にナデ調整が見られる。胎土は含有物の少ないやや良土である。3は器高が高く口縁が開き全体に摩滅している。胎土は含有物の多い粗土である。4は口縁部が外反し内底面に雑なナデを残す。胎土は砂の多いやや粗土である。5は口縁部に強いヨコナデが入り、体部はやや外反し内底面の中央にナデが残るが全体に摩滅しわかりづらい。胎土は砂を多く含む粗土である。6は体部中段に稜を持ち内底面中央にナデが見られる。胎土は砂を多く含む粗土である。7は口径大きく開き、器高が低く、直線的に立ち上がり内底面中央に強めのナデが見られる。胎土は砂を含むやや粗土である。8は成形が粗雑でやや歪みがあり、焼成にもむらがある。内底面に雑にナデが入る。胎土は砂、赤色粒を含む粗土である。9は器壁が厚く体部中段やや下位に稜を持ち内底面にナデが見られる。胎土は砂を多く含むやや粗土である。10は成形が粗雑で内底面中央に雑な強いナデが見られる。胎土は砂、赤色粒が見られるやや粗土である。11は口縁部に油煙煤が見られる。灯明皿であろう。全体に摩滅するが内底面にナデは見られる。12は器高が高く口径底径比があまりない。内底面の中央にナデが見られる。胎土は砂をやや含むやや粗土である。13は口径が開くが全体に摩滅が著しく調整不明である。14は器壁厚く直線的に立ちあがり、内底面の中央にナデが見られる。胎土は砂と赤色粒の見られる粗土である。15は器高が高く器壁の厚い、やや粗雑なつくりである。胎土は砂を含むやや粗土である。16は口縁が開き内底面の中央にナデが見られる。胎土は砂を多く含む粗土である。17は器壁が厚く器高が高い。内底面にナデ

が見られ、胎土は含有物の多い粗土である。18から28はかわらけ大皿である。18は口縁部が外反し内底面ナデが見られる。胎土は混入物の多い粗土である。19は体部が直線的に立ち上がり内底面にナデが見られる。胎土は砂、赤色粒の入ったやや粗土である。20は器壁厚く体部の中段に稜が入り、内底面にナデが見られる。胎土は砂を含む粗土である。21は大皿である。内底面に強いナデが入るためでこぼこしている。器壁は薄いが砂を多く含む粗土である。22は全体に鉄分が付着し調整、胎土は不明である。23は体部の中段に稜が入る。胎土は粉っぽく砂が少量入るやや良土である。24は全体に摩滅しているが内底面にナデが見られる。胎土は砂、赤色粒の入るやや粗土である。25は内底面のナデにより底部がでこぼしている。胎土は砂を多く含むやや粗土である。26は口縁が開き、内底面にナデが見られる。胎土はやや粉っぽく砂を含むやや良土である。27は口縁が開き、やや粗雑な作りで、胎土は砂を含むやや粗土である。28は口縁部内湾し、内底面はナデが見られる。胎土は砂の入るやや良土である。29は白かわらけ質の高坏である。脚部と坏は接合は出来なかったが出土地点も近く胎土が同じなので同一のものともみなした。出土地点は白かわらけの蓋が複数出土したかわらけ溜りのC-2グリッド付近であり、かわらけ溜りとの関係も注視したい。また、29の坏を凸部がありながら蓋としなかったのは、凸部の形態のちがいと内底面中央の貫通しない直径5mm程の穴による。坏部から説明を加える。体部はヨコナデされている。凸部は貫通しない直径5mmの穴があく。凸部は貼り付けられ、接合面は強いナデが巡る。胎土は砂を含有する乳白色である。脚部は指頭と縦位のナデにより成形される。脚部と台部の接合部分の成形に際してへら状工具を使用し痕跡を残す。台部分はやや内湾するが底部は欠損して不明である。脚部の中央は穿孔されるが、下方は直径1.4cmであり、上部は0.4mmとすぼまる。胎土は坏と同様、砂を含む乳白色である。30は火鉢のI C類である。口縁内側は突起状に膨らみ巡る。外体部に強い指頭痕がある。31は火鉢の底部、I B類で、底部は砂底である。32は火鉢のIII類である。黒色処理され花文のスタンプが押印される。33は火鉢のIII類。残存状態が悪いが黒色処理されている。34は伊勢系の鏝鍋。体部はササラ状工具で搔き削られている。35は尾張型I類の片口鉢。口唇部に沈線が巡る。36は常滑I類の片口鉢の底部である。内底面摩耗し、外体部の貼り付け高台の上はへら削りされる。胎土は白色粒、小石粒含む燈色の胎土で、それだけ見るとII類に見える。37、38は常滑片口鉢のII類である。8もしくは9形式である。37は褐色をなし、38は燈色である。39は備前のすり鉢であり、1条の卸目は6本で構成されている。40は常滑の甕の口縁部である。5形式と古い。41は常滑の甕の口縁部である。縁帯の下部を欠損している。42は常滑の甕口縁である。7形式であろう。43は常滑甕の肩部であり、格子の押印がある。44は摩耗陶片である。常滑甕の胴部片の表面がくまなく摩耗している。45は瀬戸の壺である。釉薬は剥離してしまっているが僅かに残るものから鉄釉であろうか。胎土は硬質である。46は瀬戸の平碗である。緑灰色の半透明釉を施釉している。47は瀬戸の折縁皿の口縁部である。二次焼成を受け表面が荒れている。48は折縁皿底部である。内底面に4条の同心円が刻まれる。底部はへら削りされ露胎する。49は瀬戸の緑釉皿の口縁片である。口縁部は緑色の透明釉で施釉される。50は瀬戸の片口卸皿である。卸目が刻まれ緑釉の薄い透明釉が施釉されている。51は瀬戸の入れ子の破片であり、内面降灰釉がかかる。52も瀬戸の入れ子の破片である。口縁部に降灰釉がかかる。53は龍泉窯青磁蓋である。深い草色の釉が厚くかかる。54は龍泉窯青磁鎗蓮弁文碗、単弁である。明るい半透明の草色の釉が厚く施釉される。55は龍泉窯青磁鎗蓮弁文碗である。半透明の草色の釉が厚く施釉されている。56は龍泉窯青磁鎗米色蓮弁文碗である。釉薬が茶褐色の米色青磁であり、口縁は外反し釉薬は透明で厚く、貫入が細かく入る。57は龍泉窯青磁折縁皿である。内体部に蓮弁文が配される。釉は半透明の草色で厚く施釉される。58は龍泉窯青磁折縁皿の口縁部である。明るい草色の釉が厚く施釉される。59は白磁の口元碗である。やや青味がかかった釉が薄く施釉される。60は白磁の口元印花文碗である。口唇部はすっと切られ断面が四角い。内体部にわずかに印花が見える。61も白磁の印花文皿である。白色の透明釉が施釉され、内体部に印花が施文される。62は青白磁の梅瓶の胴部片である。

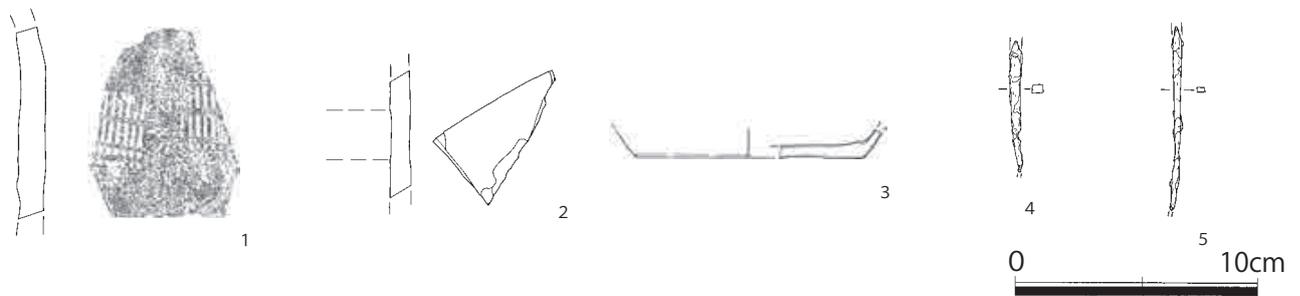


図32 第2面下深掘り坑出土遺物

水色の透明釉で、貫入が入る。63は青白磁の壺の蓋。口唇部から内側露胎する。淡い水色の透明釉がやや厚く施釉される。文様を型捺しによって作り出している。64は青白磁の香炉もしくは仏華瓶の脚部か。脚部下から内側にかけて露胎する。文様は型捺しにより作り出す。淡い青色の透明釉が施釉される。65は白磁である。合子の蓋天井部であろう。文様は型捺しされてた草花文である。釉薬はやや青味がかかった白色の透明釉で内外面施釉される。66は褐釉の壺の頸部である。黒褐釉かも知れない。二次焼成を受け器表が荒れる。67は平瓦。表裏面とも離れ砂後ナデてあり、永福寺Ⅱ期C類と同類である。68は平瓦。表面は離れ砂後ナデてあり、裏面は縄目の叩き目がある。八幡宮D類と同類である。69は平瓦。表面は糸切り痕が顕著で、裏面は叩き目が見えず指頭痕があり、側面は三角形にヘラ削りされている。永福寺Ⅰ期と同類か。70は平瓦である。表面は離れ砂、糸切り痕、ナデが見られ、裏面は縄目の叩き目である。永福寺Ⅰ期A類と同類と見られる。71は軒平瓦。表面は、黒色微砂の離れ砂であり、叩き目の転写が見られる。裏面は叩き目があり、二条線に丸に菱形文か。永福寺Ⅱ期軒平瓦と同類と見られる。72から74は鉄釘である。75は北宋銭で、残存率が悪く読み取れるのは、□宋通□であり、真書である。書体で当てはまるものは皇宋通寶で、初鑄年は1038年である。外径2.5cm、内径2.0cmを測る。76は滑石鍋の加工品である。スタンプを作る途中過程のものか。鏝の裏面は平坦に擦られている。77は方硯の陸部分である。黒色粘板岩であり、鳴滝産若王子石である。裏面は剥離している。成形方法から赤間手である。78は石臼の播り面である。使用面以外は剥離する。79は砥石である。鳴滝産の仕上砥で、裏面は剥離している。80は砥石である。残存率が悪いが、天草産の中砥である。

3. 第2面下深掘り坑出土遺物 (図32 - 1 ~ 5)

調査区の南端部で土層の観察のため、現地表下80cmまで、L字型に東西2.5m×0.5m、南北1.5m×0.5mの深掘り坑を設け掘削した。出土遺物の以下図示しえたものの説明を加える。

1は常滑の甕肩部片であり、格子の押印が見られる。2は褐釉の壺の胴部片である。3は白磁の口元皿底部である。釉は乳白色でやや厚く、底部はぬぐわれている。4、5は鉄釘である。

写真のみの掲載遺物 (図版18)

今回の調査では釘の出土が目立った。その数79本である。2面上、土坑30から目立って出土している。軽石は井戸1の掘り方からの出土である。1側面を平らに擦った痕跡がある。

鉄率は2面上からの出土である。トリベ状のかわらけの出土は3例あり、注視したい。

炭化物は土坑29からのまとまった出土である。

表5 遺物観察表(1)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
8-1	第1面 井戸1	かわらけ皿 小型	(6.3)	(4.4)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
8-2	"	かわらけ皿 小型	(7.8)	(4.6)	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.暗黄灰色 e.やや甘い
8-3	"	かわらけ皿 中型	(10.2)	(5.6)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
8-4	"	かわらけ皿 中型	(10.6)	(5.6)	2.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
8-5	"	かわらけ皿 大型	(11.6)	(6.6)	3.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
8-6	第1面 井戸1裏込め	かわらけ皿 大型	(11.4)	6.2	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
8-7	第1面 井戸1裏込め	瀬戸 折縁皿	7.3	4.0	1.9	b.良土 c.橙灰白色 e.良好 f.緑灰釉 透明
9-1	第1面 かわらけ溜り	かわらけ皿 小型	(7.6)	(4.7)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-2	"	かわらけ皿 大型	(14.9)	(9.6)	3.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-3	"	かわらけ皿 大型	(11.5)	(8.0)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-4	"	かわらけ皿 大型	(13.1)	(7.4)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
9-5	"	かわらけ皿 大型	(13.4)	(8.8)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-6	"	かわらけ皿 大型	(13.0)	(8.0)	3.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-7	"	かわらけ皿 大型	(12.9)	(8.0)	4.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
9-8	"	かわらけ皿 大型	13.0	7.7	3.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-9	"	かわらけ皿 大型	(13.4)	(8.8)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-10	"	かわらけ皿 大型	(12.9)	(8.0)	4.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-11	"	火鉢	—	—	—	a.ナデ b.微砂 長石 c.灰色 e.良好 f.IV類
9-12	"	香炉	(9.6)	—	—	b.微砂 c.黒色 e.良好 f.黒色処理、沈線間に小型菊花文スタンプ、連珠貼り付け文
9-13	"	軒丸瓦	幅4.8 高さ3.7 厚さ(1.5)		—	b.黒色微砂 小石粒 c.灰白色 e.やや甘い f.右廻三巴文
9-14	"	鉄製品 毛抜き	左・長さ4.4 幅0.7 厚さ0.1 右・長さ4.9 幅0.7 厚さ0.1		—	f.頂部欠損
9-15	"	鉄製品 釘	残存長(6.6)×厚さ0.4		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-16	"	"	残存長(6.1)×厚さ0.5		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-17	"	"	残存長(5.1)×厚さ0.5		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-18	"	"	残存長(3.0)×厚さ0.5		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-19	"	"	残存長(3.4)×厚さ0.5		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-20	"	"	残存長(3.0)×厚さ0.4		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
10-1	1面 土坑1	かわらけ皿 小型	(7.1)	(4.0)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
10-2	"	かわらけ皿 小型	11.8	6.9	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
10-3	1面 土坑2	かわらけ皿 大型	(12.8)	(7.4)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
10-4	1面 土坑3	瀬戸 卸皿	—	(6.0)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.良土 硬質 c.黄灰色/釉・緑白色 e.良好
10-5	"	平瓦	幅(6.0) 高さ(7.3) 厚さ2.2		—	a.表：離れ砂、裏面の縄目が転写 裏：縄目の叩き b.微砂 流文 良土 c.灰色 e.良好 f.八幡宮 I期B類と同類
10-6	1面 土坑4	常滑 壺	(10.0)	—	—	a.ヨコナデ b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.暗茶褐色 e.良好
10-7	"	瀬戸 卸皿	(13.0)	—	—	b.良土 c.灰白色/釉 緑灰色 e.良好 f.内体部まで卸目

表6 遺物観察表(2)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
10-8	1面 土坑4	常滑 摩耗陶片	幅6.8 高さ7.0 厚み1.2			全面使用痕あり
10-9	1面 土坑5	白かわらけ 蓋	幅4.8 厚み1.7 凸部幅2.4			a.ヨコナデ b.微砂 雲母 良土 c.灰白色 e.良好 f.二次焼成受ける。
10-10	1面 土坑6	かわらけ皿 小型	(7.1)	(4.0)	2.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-1	1面 土坑7	弥生式土器 壺	幅4.9 高さ3.5 厚み0.8			a.刷毛目 b.微砂 白色粒 赤色粒 黒色粒 良土 c.暗灰色 e.良好
11-2	〃	かわらけ皿 大型	(12.3)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
11-3	〃	常滑甕 押印	肩部片			押印：格子目
11-4	〃	瀬戸 天目碗	体部片			a.ロクロ ヨコナデ b.灰白色 微砂 良土 d.鉄釉 厚手施釉
11-5	1面 土坑8	かわらけ皿 中型	(10.8)	(7.2)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-6	〃	かわらけ皿 大型	(10.8)	(7.2)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-7	1面 土坑10	かわらけ皿 中型	(10.2)	(6.4)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好
11-8	〃	白かわらけ	—	4.0	—	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 b.微砂 雲母 良土 c.灰白色 e.良好
11-9	〃	褐釉 壺	胴部片			a.ヨコナデ b.微砂 良土 c.茶褐色 e.良好
11-10	〃	龍泉窯 青磁折腰鉢	口縁部小片			a.ロクロ b.精良堅緻 d.青灰色半透明 やや厚手施釉
11-11	〃	銭	外径2.4 内径1.9 孔径0.7 厚さ0.1			皇宋通寶 北宋 初鑄年 1038年 f.篆書
11-12	1面 土坑13	かわらけ皿 大型	(13.3)	(7.4)	4.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.ki黄橙色 e.良好
11-13	1面 土坑15	鉄製品 釘	長さ4.7×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
11-14	1面 土坑14	瓦質 香炉	—	(7.0)	—	a.ミガキ b.微砂 小石粒 良土 c.黒色(黒色処理) e.良好 f.菊花スタンプ文、蓮珠文
13-1	1面 柱穴3	瀬戸 香炉	口縁部小片			b.微砂 良土 c.灰色/黒褐釉 e.良好 f.口縁輪花型、二次焼成受ける。
13-2	〃	平瓦	幅4.5 高さ8.5 厚み2.0			a.表：黒色微砂による離れ砂 裏：斜格子の叩き b.微砂 小石粒 白色粒 粗土 c.灰色～橙色 e.良好 f.永福寺Ⅱ期E類と同類
13-3	〃	渥美 摩耗陶片	幅3.0 高さ2.3 厚み1.0			f.全面摩耗している。
13-4	1面 柱穴5	かわらけ皿 大型	(12.2)	(9.0)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-5	1面 柱穴7	かわらけ皿 小型	7.0	4.4	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好
13-6	〃	かわらけ皿 小皿	(6.4)	(4.4)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口唇部油煙煤付着、灯明皿
13-7	1面 柱穴10	東濃型 山茶碗	—	(4.6)	—	a.ロクロ ヨコナデ 高台粗痕 b.微砂 良土 c.灰色 e.良好 f.内底面青色の透明な降灰釉
13-8	〃	龍泉窯 青磁蓮 弁文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰色 精良堅緻 d.草色半透明 やや厚め施釉 f.内外面稜花
13-9	1面 柱穴13	かわらけ皿 小皿	(7.2)	(5.2)	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口唇部油煙煤付着、灯明皿
13-10	〃	瀬戸 碗	(17.9)	—	—	b.微砂 良土 c.釉：緑灰色 透明 e.良好
13-11	〃	鉄製品 釘	長さ3.7×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
13-12	1面 柱穴12	常滑 壺	(19.0)	—	—	a.輪積み技法 内面：指頭痕 横位ナデ b.灰色 長石 石英 砂粒多い 粗土 c.褐色 e.良好
13-13	〃	瀬戸 洗	—	(20.0)	—	a.外底面 外周部へラ削り、蛇の目剥ぎ、体部へラ削り ヨコナデ 内底面 3本の同心円の沈線 b.微砂 良土 c.釉 黄緑灰色 半透明 e.良好
13-14	1面 柱穴18	瀬戸 平碗	—	—	—	a.ヨコナデ b.微砂 良土 c.釉 白色～緑灰色 外体部下方露胎 e.良好
13-15	〃	瀬戸 折縁皿	(20.0)	—	—	b.微砂 良土 c.黄灰白色 釉 刷毛塗り 黄白色 e.良好
13-16	1面 柱穴19	弥生式土器 壺	幅5.3 高さ4.5 厚み0.8			a.刷毛目 b.微砂 白色粒 赤色粒 黒色粒 良土 c.暗灰色 e.良好
13-17	〃	かわらけ皿 小皿	7.6	4.9	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり

表7 遺物観察表(3)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
13-18	1面 柱穴19	常滑甕 押印	胴部片			押印：格子
13-19	1面 柱穴20	平瓦	幅7.0高さ8.4厚み2.0			a.表：離れ砂 縦位ナデ 裏：格子の叩き目 b.微砂 白色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.永福寺Ⅱ期C類と同類
13-20	”	平瓦	幅5.8高さ5.6厚み1.7			a.表：離れ砂 裏：斜格子の叩き目 b.微砂 白色粒 小石粒 粗土 c.灰色～橙色 e.良好 f.永福寺Ⅲ期E類と同類
13-21	1面 柱穴21	かわらけ皿 小型	(7.6)	(5.7)	1.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-22	1面 柱穴23	平瓦	幅6.5高さ8.1厚み1.4			a.表：離れ砂 裏：斜格子に丸目の叩き目 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.暗灰色 e.良好 f.永福寺Ⅲ期E類と同類
13-23	1面 柱穴25	かわらけ皿 小型	7.4	4.2	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-24	”	火鉢	底部片			a.ミガキ 黒色処理 b.灰白色 砂粒 小石粒 気泡多い c.黒色 e.良好 f.Ⅲ類
13-25	”	白磁 口元皿	(11.4)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.白色 透明 やや厚めに施釉 e.良好
13-26	1面 柱穴27	かわらけ皿 小型	(7.6)	(5.4)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
13-27	1面 柱穴29	かわらけ皿 大型	(11.4)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-28	1面 柱穴30	龍泉窯青磁 鎗蓮弁文碗	口縁小片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気孔有り d.草色半透明 やや厚手 施釉
13-29	”	龍泉窯青磁 折縁皿	口縁小片			b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 厚手施釉 e.良好
13-30	1面 柱穴31	かわらけ皿 小型	6.0	4.0	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
13-31	1面 柱穴34	かわらけ皿 小型	(6.9)	(4.2)	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-32	1面 柱穴36	火鉢	口縁部片			a.ヨコナデ 黒色処理 b.橙色 砂粒 白色粒 赤色粒 黒色粒 f.IC類
13-33	1面 柱穴39	瀬戸 仏華瓶	頸部片			b.灰白色 良土 d.鉄釉を施釉 e.良好
14-1	1面上 出土遺物	手づくね かわらけ小型	(8.4)	(7.2)	1.7	a.手捏ね b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-2	”	かわらけ皿 小型	(6.5)	(5.2)	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-3	”	かわらけ皿 小型	(7.6)	(4.7)	1.85	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-4	”	かわらけ皿 小型	(6.8)	(3.8)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 雲母 やや粗 土 c.橙色 e.良好
14-5	”	かわらけ皿 小型	6.6	3.5	2.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-6	”	かわらけ皿 中型	(9.6)	6.0	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-7	”	かわらけ皿 中型	(10.0)	(5.0)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-8	”	かわらけ皿 大型	(11.7)	(7.4)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデが強い。
14-9	”	かわらけ皿 大型	(12.6)	(7.6)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-10	”	かわらけ皿 大型	(12.5)	(7.6)	3.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデが強い。
14-11	”	かわらけ皿 中型	10.4	6.0	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.宅間ガ谷型
14-12	”	かわらけ皿 大型	(14.0)	(7.6)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
14-13	”	かわらけ皿 大型	(11.6)	(6.2)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-14	”	かわらけ皿 大型	(12.7)	(7.2)	4.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
14-15	”	かわらけ皿 大型	(12.9)	(7.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
14-16	”	かわらけ皿 大型	(11.7)	(6.2)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-17	”	かわらけ皿 大型	(12.7)	(7.9)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
14-18	”	かわらけ皿 大型	(13.7)	(9.8)	4.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデが強い

表8 遺物観察表(4)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
14-19	I 面上 出土遺物	かわらけ皿 大型	(14.4)	(8.0)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-20	”	かわらけ皿 大型	(7.3)	(5.5)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.黒灰色 e.良好 f.トリベ状 口唇部から内面気泡
14-21	”	白かわらけ	(6.7)	—	—	a.ロクロ b.微砂 小石粒 やや粗土 c.乳白色 e.良好 f.蓋の可能性あり
14-22	”	火鉢	底部片			a.ミガキ 黒色処理 b.小石粒 良土 c.灰白色 e.良好 f.沈線 花文スタンプ 蓮珠文が施される。IV類
14-23	”	香炉	口縁部片			a.ミガキ 黒色処理 b.黒色粒 小石粒 良土 c.黒色 e.良好 f.瓦質 体部二段の菱形渦巻き文
14-24	”	香炉	底部片			a.ミガキ 黒色処理 b.黒色粒 小石粒 良土 c.黒色 e.良好 f.瓦質
14-25	”	東濃型 山茶碗	口縁部片			a.ロクロ ヨコナデ b.微砂 良土 c.灰白色 e.良好 f.硬質
14-26	”	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.微砂 白色粒 小石粒 c.灰白色 e.良好 f. I 類
14-27	”	備前 すり鉢	体部片			a.条痕 4本 b.微砂 小石粒 c.灰白色 e.良好
14-28	”	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 内面 指頭痕 横位ナデ b.灰白色 長石 白色粒 c.黒褐色 e.良好 f.縁帯が欠ける
14-29	”	瀬戸 香炉	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰色 刷毛塗り e.良好 硬質
14-30	”	瀬戸 香炉	体部片			b.灰白色 良土 c.黒褐色 d.外面鉄釉 内面灰緑色 半透明 e.良好 f.菊花スタンプが施される
14-31	”	瀬戸 平碗	口縁部片			b.灰白色 良土 d.灰緑色 薄い e.良好 硬質
14-32	”	瀬戸 平碗	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰色 薄い e.良好 硬質
14-33	”	瀬戸 丸碗	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰色 透明 e.良好 硬質 f.大窯
14-34	”	瀬戸 天目碗	(12.2)	—	—	b.灰白色 良土 d.黒色 鉄釉 e.良好 硬質
14-35	”	瀬戸 天目碗	(11.2)	—	—	b.灰白色 良土 d.黒色 鉄釉 薄い e.良好 硬質
14-36	”	瀬戸 天目碗	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.茶褐色 鉄釉 e.良好 硬質
14-37	”	瀬戸 折縁小皿	(13.0)	—	—	b.灰白色 良土 d.灰釉 刷毛塗り 薄い e.良好 硬質
14-38	”	瀬戸 折縁深皿	(32.0)	—	—	b.黄灰白色 良土 d.黄白色釉 e.良好 硬質
14-39	”	瀬戸 折縁深皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 刷毛塗り e.良好 硬質
14-40	”	瀬戸 折縁深皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.灰緑色釉 e.良好 硬質
14-41	”	瀬戸 折縁深皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.黄白色釉 e.良好 硬質
14-42	”	瀬戸 折縁深皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.灰緑色釉 e.良好 硬質
14-43	”	瀬戸 折縁深皿	—	(15.4)	—	a.底部回転ヘラ削り b.灰白色 小石粒 やや粗土 d.灰緑色釉 透明 e.良好 硬質 f.内底面菊花スタンプを施す。脚を持つ
15-44	”	瀬戸 直縁大皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-45	”	瀬戸 直縁大皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-46	”	瀬戸 直縁大皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-47	”	瀬戸 香炉	口縁部片			a.口縁輪花型 b.灰白色 良土 d.黒褐色釉 e.良好 硬質 f.二次焼成を受けている。接合関係にないが柱穴3出土の口縁部片と同一個体か
15-48	”	瀬戸 卸皿	(12.0)	—	—	b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質
15-49	”	瀬戸 卸皿	(16.0)	—	—	b.黄灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-50	”	瀬戸 卸皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質
15-51	”	瀬戸 卸皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-52	”	瀬戸 卸皿	—	(9.0)	—	a.ロクロ 底部糸切り b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質

表9 遺物観察表(5)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
15-53	1面上 出土遺物	瀬戸 卸目付大皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-54	〃	瀬戸 加工品	直径4.0×3.8 厚さ0.8			a.底部回転ヘラ削り、周辺を打ち欠き円盤状に成形 b.黄灰白色 良土 d.黄灰白色 e.良好 硬質
15-55	〃	龍泉窯青磁 広口壺	—	—	—	b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 薄手施釉 e.良好 f.取っ手部分
15-56	〃	龍泉窯青磁 盤	—	—	—	b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 厚手施釉 e.良好 f.貼り付け双魚文
15-57	〃	龍泉窯青磁 碗	(8.0)	—	—	b.精良堅緻 c.暗灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 厚手施釉 e.良好
15-58	〃	龍泉窯青磁 鎗蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気孔有り d.草色半透明 やや薄手施釉
15-59	〃	龍泉窯青磁 印花文碗	—	(7.4)	—	a.ロクロ 高台内蛇の目釉剥ぎ 内底面印花文 b.精良堅緻 気孔有り d.草色 半透明 厚手施釉
15-60	〃	龍泉窯青磁 折縁皿	(12.0)	—	—	b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 厚手施釉 e.良好
15-61	〃	龍泉窯青磁 器種不明	口縁部片			a.稜花状 b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 厚手施釉 e.良好 f.二次焼成を受けている
15-62	〃	白磁 口元皿	(9.8)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや薄手に施釉 e.良好
15-63	〃	白磁 口元皿	(10.8)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや厚手に施釉 e.良好
15-64	〃	白磁 碗	—	(7.8)	—	a.外底部露胎 b.灰白色 気泡あり d.乳白色 透明 薄手に施釉 e.良好
15-65	〃	青白磁 水注	(3.4)	—	—	a.口縁 b.灰白色 精良堅緻 d.水青色 半透明 厚手に施釉 e.良好
15-66	〃	青白磁 梅瓶	胴部片			b.灰白色 精良堅緻 d.水青色 半透明 厚手に施釉 e.良好 f.二次焼成を受けている
15-67	〃	青白磁 香炉	脚部片			b.灰白色 精良堅緻 d.水青色 半透明 気泡あり e.良好
15-68	〃	黒褐釉 器種不明	胴部片			b.灰色 精良堅緻 d.黒褐色 内面露胎 e.良好
15-69	〃	平瓦	幅(6.7)高さ(15.3) 厚み2.2			a.表 糸切り後ナデ 裏 縄目叩き 離れ砂 b.灰色 小石粒 良土 c.灰色 e.良好 f.永福寺A類 I期と同類
15-70	〃	瓦 加工品	幅4.5高さ(4.3) 厚み2.0			a.平瓦を加工、側面摩耗 b.小石粒 良土 c.灰白色
15-71	〃	金銅製品 不明	長さ5.1幅0.5			不明品 部分的に金が残る。
15-72	〃	銭	外径2.5内径1.8 孔径0.6厚さ0.15			景德元寶 北宋 初鑄年 1004年 f.真書
15-73	〃	砥石 仕上砥	(3.0)×(3.0)			a.片面のみ使用 c.黄灰白色 f.鳴滝産
15-74	〃	基石	2.2×2.3			c.黒色
15-75	〃	近世陶器 灯明皿	口縁部小片			b.灰白色 良土 硬質 c.茶褐色 e.良好 f.漆継ぎ痕あり
15-76	〃	土人形 兎型	幅3.0高さ2.3			b.橙色 砂 白色粒 良土 c.橙色 e.良好
15-77	〃	鉄製品 鍵	長さ6.6幅0.5			近現代
18-1	2面 建物1 P 44	かわらけ皿 小型	(8.0)	(6.2)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 yaや粗土 c.橙色 e.良好
18-2	〃	かわらけ皿 大型	(13.4)	(9.1)	(3.3)	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
18-3	〃	東濃型 山茶皿	(7.1)	5.2	1.65	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 黒色粒 良土 c.灰色 e.良好 f.糸目が体部に上がる 内底面摩耗し赤色顔料付着
18-4	〃	常滑 壺	(9.8)	—	—	a.輪積み技法 内面 指頭痕 横位ナデ b.微砂 長石 やや粗土 c.褐色 e.良好 f.縁帯内側が欠損
18-5	〃	緑褐釉 広口壺	長さ(3.6)幅(4.9) 厚さ(0.5)			a.横位の耳がつく 耳の上に線刻による文様あり b.微砂 精良堅緻 c.暗緑灰色 e.良好 f.二次焼成受ける
18-6	〃	褐釉 壺	胴部片			a.ヨコナデ b.精良堅緻 長石少量入る c.暗褐色～茶褐色 e.良好
18-7	〃	龍泉窯青磁 鎗蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気孔有り d.草色半透明 厚手施釉
18-8	〃	青白磁 合子蓋	小片			a.型作り文様 b.精良堅緻 d.淡青灰色 半透明 気泡あり
18-9	2面 建物1 P 46	かわらけ皿 中型	(10.6)	(7.0)	2.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 yaや粗土 c.橙色 e.良好

表10 遺物観察表(6)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
18-10	2面 建物1 P46	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 c.灰白色 e.良好 f. I類
18-11	"	平瓦	(10.0) × (7.8)			a.表 離れ砂 裏 格子目叩き 離れ砂 b.灰色 白色流文 良土 c.灰白色 e.良好 f.八幡宮 B類、永福寺 I類と同類
18-12	"	平瓦	(8.2) × (9..8)			表裏 黒色微砂による離れ砂 b.砂多く流文みられる やや粗土 f.永福寺Ⅲ期と同類
18-13	2面 建物1 P 76	かわらけ皿 大型	14.2	9.4	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.やや甘い
18-14	"	常滑 摩耗陶片	長さ5.6幅4.4厚さ1.0			常滑片口鉢Ⅱ類の口縁部を使用、口唇部 打痕 側面を摩耗する
18-15	"	丸瓦	(12.8) × (5.3)			a.表 へう削り 裏 布目 b.瓦質 砂 良土 c.黒灰色 e.良好 f.極楽寺創建時に類似
18-16	2面 建物1 P 87	かわらけ皿 中型	10.2	5.6	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
18-17	"	かわらけ皿 中型	10.0	5.6	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
18-18	"	かわらけ皿 大型トリベ状	口縁部片			a.ロクロ トリベ状口縁部気泡目立つ b.微砂 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 やや粗土 c.灰色 e.良好
18-19	"	白磁 口元皿	7.6	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや薄手に施釉 e.良好
18-20	"	鉄製品 釘	長さ(5.8) × 幅3.0			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
18-21	"	鉄製品 釘	長さ(5.8) × 幅3.0			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
18-22	2面 建物1 P 90	東濃型 山茶碗	(12.6)	—	—	a.ロクロ 口縁の内側まで卸目 b.微砂 良土 c.灰白色 e.良好
18-23	"	火鉢	底部片			a.ヨコナデ 底部砂底 b.小石粒 雲母 良土 c.暗灰色 e.良好 f.Ib類
18-24	2面 建物1 P 98	かわらけ皿 小型	7.3	4.9	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
18-25	"	かわらけ皿 大型	(11.6)	(6.6)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.板状圧痕強い
20-1	2面 建物2 P 53	かわらけ皿 中型	(9.8)	(6.0)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
20-2	2面 建物2 P 68	常滑 片口鉢	—	(12.6)	—	a.輪積み技法 体部下方へう削り 高台貼り付け b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f. I類
20-3	2面 建物2 P 81	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	—	(5.2)	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 高台内露胎 b.精良堅緻 気孔有り d.緑灰色 半透明 厚手施釉
20-4	"	白磁 印花文皿	—	(4.2)	—	a.底部釉を拭い露胎する b.白色 精良堅緻 d.白色 半透明 薄手に施釉 e.良好
20-5	2面 建物2 P 82	白磁 口元印花文皿	(12.3)	—	—	b.白色 精良堅緻 d.白色 半透明 薄手に施釉 e.良好
20-6	2面 建物2 P 84	かわらけ皿 小型	7.6	4.8	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.体部に糸切り切り上げ痕あり 内底面ナデ強い
20-7	2面 建物2 P 89	かわらけ皿 小型	(6.8)	(4.4)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
20-8	"	かわらけ皿 大型	(12.2)	(7.8)	3.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
20-9	2面 建物2 P 91	かわらけ皿 大型	—	(7.0)	—	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
20-10	"	龍泉窯青磁 無文碗	口縁部片			a.ロクロ 左回転 b.白色 精良堅緻 d.灰緑色 半透明 厚い 貫入が左上から右下へ入る。
20-11	"	白磁 合子蓋	(8.5)	—	—	b.白色 精良堅緻 d.乳白色 不透明 やや薄手に施釉 e.良好 f.クシガキ状の文様
20-12	2面 建物2 P 95	かわらけ皿 小型	(7.3)	(5.6)	1.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部煤付着、灯明皿
20-13	"	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f. I類
20-14	"	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 粗土 c.灰色 e.良好 f. I類
21-1	2面 かわらけ溜り	かわらけ皿 小型	(7.1)	(5.0)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い
21-2	"	かわらけ皿 小型	(8.4)	(5.5)	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿
21-3	"	かわらけ皿 中型	(9.3)	(4.2)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿
21-4	"	かわらけ皿 大型	(6.8)	(4.4)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 良土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い

表11 遺物観察表(7)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
21-5	2面 かわらけ溜り	かわらけ皿 大型	(13.4)	(8.1)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
21-6	"	白かわらけ 蓋	(8.6)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 軟質 c.乳白色 やや赤味を帯びる e.良好
21-7	"	白かわらけ 蓋	(8.8)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 やや赤味を帯びる e.良好
21-8	"	白かわらけ 蓋	(7.2)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 やや赤味を帯びる e.良好 f.摘み部の直径3.2 高さ1.0
21-9	"	白かわらけ 蓋	(8.4)	—	—	a.摩滅著しいがヨコナデが見れる b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 e.良好 f.摘み部の直径3.2 高さ1.2
21-10	"	白かわらけ 蓋	(8.0)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.灰白色 e.やや甘い
21-11	"	白かわらけ 蓋	(5.5)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 e.良好 f.摘み部の直径3.0 高さ1.1 側面著しく摩滅
21-12	"	白かわらけ 蓋	(5.5)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 e.良好 f.摘み部の直径3.4 高さ1.0 側面著しく摩滅
21-13	"	白かわらけ 蓋	(5.0)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 e.良好 f.摘み部の直径3.2 高さ1.0 側面著しく摩滅
21-14	"	白かわらけ 台		2.2		a.ヨコナデ b.微砂少量 砂粒 c.灰白色 e.良好 f.台は削り出し、上下に貫通しない穴がある、内底面と底部は火を受け赤味を帯びる、外体部煤けている
21-15	"	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好 f.Ⅱ類
21-16	"	瀬戸 入子	小片			a.輪花状にへらで刻みをつける b.微砂 良土 c.灰白色 e.良好 f.内面に紅が残る
21-17	"	砥石 仕上砥	幅3.2×高さ(3.7) ×厚み(0.8)			a.片面のみ使用 裏面剥離している c.黄橙灰色 f.鳴滝産
22-1	2面 土坑(1) D17	かわらけ皿 小型	7.3	4.1	2.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿
22-2	"	かわらけ皿 小型	7.4	5.3	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.打ち欠き痕あり
22-3	"	白かわらけ皿 小型	—	4.4	—	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 良土 c.灰白色 e.良好 硬質
22-4	"	瀬戸 片口入子	5.4	1.6	3.5	a.ロクロ 底部へら削り b.砂 良土 c.灰色 e.良好 f.糸切り引き上げ痕が体部につく、へらにより片口を突き出す
22-5	"	銭	外径2.4 内径1.9 孔径0.7 厚さ0.13			皇宋通寶 北宋 初鑄年 1038年 f.篆書
22-6	2面 土坑(1) D18	かわらけ皿 小型	7.3	5.3	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
22-7	"	かわらけ皿 小型	(7.6)	(4.8)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-8	"	かわらけ皿 小型	(7.7)	(4.8)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿
22-9	"	かわらけ皿 中型	(10.7)	(6.0)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-10	"	かわらけ皿 大型	(11.7)	(7.0)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-11	"	かわらけ皿 大型	(12.8)	(7.4)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-12	"	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好 f.Ⅱ類
22-13	2面 土坑(1) D19	かわらけ皿 小型	(7.4)	(5.1)	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 カクセン石 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い
22-14	"	瀬戸 折縁深皿	(21.0)	—	—	a.体部回転へら削り b.黄灰色 微砂 良土 d.灰白色 不透明 漬け掛け e.良好
22-15	2面 土坑(1) D20	かわらけ皿 小型	(7.9)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い
22-16	"	かわらけ皿 小型	(8.2)	(6.0)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い
22-17	"	かわらけ皿 大型	(12.4)	(7.8)	3.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-18	"	かわらけ皿 大型	(11.8)	(7.4)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 良土 粉質 c.橙色 e.良好
22-19	"	青白磁 梅瓶	胴部片			b.灰色 微砂 精良堅緻 d.水青色 透明 厚手に施釉 e.良好
22-20	"	鉄製品 釘	残存長(4.9)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
22-21	2面 土坑(1) D21	龍泉窯青磁 無文碗	(9.9)	—	—	a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.灰緑色 半透明 厚い 気泡入る

表12 遺物観察表(8)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
22-22	2面 土坑(1) D22	瀬戸 入子	(5.8)	(3.5)	2.0	a.輪花状にヘラで刻みをつける ロクロ 外底右回転糸切痕 b.微砂 良土 c.灰 白色 e.良好
22-23	2面 土坑(1) D23	かわらけ皿 小型	(7.1)	(4.2)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.糸切り切り上げ痕が体部に残る
22-24	”	かわらけ皿 小型	(7.9)	(4.3)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿。内底面のナデが強い
22-25	”	かわらけ皿 大型	(12.4)	7.9	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
22-26	”	かわらけ皿 大型	(12.0)	7.4	3.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面のナデが特に強い
22-27	”	鉄製品 釘	残存長(6.0)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-1	2面 土坑(2) D24	白磁 口元印花文皿	(6.2)	(1.9)	0.7	a.外体部高台内露胎 b.白色 精良堅緻 d.白灰色 半透明 薄手に施釉 e.良好
23-2	2面 土坑(2) D25	かわらけ皿 小型	(7.5)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.やや粗土 f.内底面のナデが強い
23-3	2面 土坑(2) D26	かわらけ皿 小型	(7.9)	(4.3)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 やや良土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿内底面のナデが強い
23-4	”	鉄製品 釘	残存長(5.8)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-5	2面 土坑(2) D27	青白磁 梅瓶	胴部片			b.白色 微砂 精良堅緻 d.青色 半透明 気泡あり やや厚手に施釉 e.良好
23-6	”	鉄製品 釘	残存長(6.4)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-7	2面 土坑(2) D28	弥生式土器 壺	幅6.2 高さ3.8 厚み1.2			a.刷毛目 b.微砂 白色粒 赤色粒 黒色粒 良土 c.暗灰色 e.良好
23-8	”	かわらけ皿 小型	(7.7)	4.3	2.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.粗土 f.内底面のナデが強い
23-9	”	かわらけ皿 小型	(8.3)	(6.5)	2.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 やや良土 c.橙色 e.良好 f.外体部煤けている
23-10	”	火鉢	口縁部～体部			a.輪花状 外 ミガキ 黒色処理 菊花スタンプ 内 横位ミガキ b.暗灰色 砂 砂粒 やや粗土 c.黒色～橙色 e.良好 f.菊花文スタンプ 皿類
23-11	”	銭	外径2.4 内径1.8 孔径0.6 厚さ0.15			紹聖元寶 北宋 初鑄年 1094年 f.行書
23-12	2面 土坑(2) D31	かわらけ皿 大型	(12.0)	7.3	2.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
23-13	”	常滑 甕	(28.5)	—	—	a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.暗灰色 長石 砂 小石粒 c.褐色 e.良好
23-14	2面 土坑(2) D33	かわらけ皿 小型	7.0	5.6	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強く口縁までかかる
23-15	”	かわらけ皿 大型	11.7	7.9	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
23-16	”	かわらけ皿 大型	11.7	7.4	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
23-17	”	かわらけ皿 大型	(12.0)	(6.4)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
23-18	”	かわらけ皿 大型	(12.6)	(8.0)	3.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小 石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い 口縁部油煙煤付着、灯明皿
23-19	”	鉄製品 釘	残存長(8.4)×厚さ0.5			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-20	”	鉄製品 釘	残存長(5.5)×厚さ0.6			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-21	2面 土坑(2) D34	かわらけ皿 小型	(8.0)	(4.9)	2.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.黒褐色 e.粗土 f.二次的に強く火を受け内外面煤が付着。灯明か?
23-22	”	かわらけ皿 大型トリベ状	(6.6)	(4.2)	1.6	a.ロクロ トリベ状 内側は気泡が目立ち 外側は亀裂が走る b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黒灰色 e.良好
23-23	”	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気孔あり d.緑灰色 半透明 やや 薄手施釉
24-1	2面 土坑(3) D36	褐釉 壺	胴部片			a.ヨコナデ b.灰褐色 精良堅緻 c.暗褐色 e.良好
24-2	”	丸瓦	(4.8)×(10.0) 厚み2.2			a.表 横位ナデ 縦位叩き目 裏 横位糸切り 布目 b.砂 白色粒 良土 c.黒灰色 e.良好 f.永福寺 I期 A類と同類
24-3	2面 土坑(3) D37	かわらけ皿 小型	(6.8)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
24-4	”	かわらけ皿 大型	(12.7)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
24-5	”	東濃型 山茶碗	—	(6.0)	—	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 内 無釉 内底面指頭 体部ヨコナデ 外 施釉 b.灰 色 緻密な良土 c.透明釉 e.良好

表13 遺物観察表(9)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
24-6	2面 土坑(3) D37	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 d.淡緑灰色 半透明 やや厚手施釉
24-7	2面 土坑(3) D38	かわらけ皿 小型	(7.8)	(5.7)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
24-8	”	龍泉窯青磁 器種不明	破片			a.内 凸状に草花文、外 線描き蓮弁 b.灰白色 精良堅緻 c.緑灰色 d.半透明 薄い
24-9	2面 土坑(3) D29	かわらけ皿 小型	7.5	5.1	2.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
24-10	”	かわらけ皿 小型	7.5	5.0	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
24-11	”	かわらけ皿 小型	7.5	5.0	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
24-12	”	かわらけ皿 大型	(11.8)	(6.5)	2.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
24-13	”	かわらけ皿 大型	(12.7)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
24-14	2面 土坑(3) D35	かわらけ皿 小型	7.4	4.9	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
24-15	”	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f. I 類
24-16	”	瀬戸 入子	(7.4)	(4.8)	1.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 b.灰白色 砂 小石粒 良土 c.淡橙色～.灰白色 e.良好
24-17	”	鉄製品 釘	残存長(5.4)×厚さ0.3			a.鍛造 断面四角形 頂部を欠失
24-18	”	銭	外径2.4 内径1.8 孔径0.6 厚さ0.13			景德元寶 北宋 初鑄年 1004年 f.真書
25-1	2面 土坑30(1)	かわらけ皿 小型	(7.3)	5.1	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
25-2	”	かわらけ皿 小型	(7.4)	(5.3)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
25-3	”	かわらけ皿 小型	(8.2)	(5.2)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
25-4	”	かわらけ皿 小型	6.4	5.1	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.体部に糸切りの引き上げ痕あり 口縁部油煙煤付着、灯明皿
25-5	”	かわらけ皿 大型	(12.6)	(7.6)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る 作りが雑
25-6	”	かわらけ皿 大型	(13.1)	(9.0)	3.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
25-7	”	白かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.7	a.ロクロ ヨコナデ b.微砂 良土 c.乳白色 e.良好 f.蓋の可能性あり
25-8	”	火鉢	口縁部片			a.ヨコナデ 黒色処理 b.黒灰色 砂 砂粒 c.黒色 e.良好 f. I C 類
25-9	”	火鉢	—	(33.5)	—	a.体部下位へラ削り ヨコナデ b.黒灰色 砂 砂粒 c.橙色 e.やや甘い f. II 類
25-10	”	火鉢	—	(32.5)	—	a.輪花状の刻み見られる 黒色処理 体部 指頭 工具による雑なナデ ヨコナデ 底部砂底 b.橙灰色 砂 小石粒 c.黒灰色 e.良好 f. III 類
25-11	”	常滑 壺	(14.3)	—	—	a.輪積み技法 内面：指頭痕 横位ナデ b.灰色 長石 石英 砂粒多い やや粗土 c.暗褐色 e.良好
25-12	”	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文皿	(14.7)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 d.淡緑灰色 透明 厚手施釉
25-13	”	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	(14.5)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気泡あり d.緑灰色 半透明 厚手施釉 f.鎚が浅い
25-14	”	白磁 口元印花文皿	—	(7.4)	—	a.底部釉を拭う b.乳白色 精良堅緻 d.乳白色 透明 薄手に施釉 e.良好
25-15	”	褐釉 壺	5.6	—	—	a.ヨコナデ b.灰褐色 精良堅緻 c.暗褐色 光沢なし不透明 口縁から胴部降灰あり、緑褐色 e.良好 f.胴部に熔着あり 口縁と胴部は接合しないが同一個体である
25-16	”	平瓦	(4.1)×(8.8)×2.3			a.表 離れ砂 裏面の叩き目転写 裏 格子目と三条線の叩き 離れ砂 b.砂 長石少量 良土 c.灰色～橙色 e.良好 f.八幡宮 F 類と同類
26-17	2面 土坑30(2)	平瓦	(4.1)×(8.8)×2.3			a.表 離れ砂 裏 格子叩き目 離れ砂 b.砂 小石粒多い 粗土 c.暗灰色 e.良好 f.永福寺 III 類と同類
26-18	”	鉄製品 釘	残存長(9.8)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 先端部欠失
26-19	”	鉄製品 釘	残存長(6.2)×厚さ0.5			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
26-20	”	銭	外径－内径－ 孔径－厚さ0.12			□祐元寶 北宋 f.篆書 景祐元寶もしくは嘉祐元寶
26-21	”	滑石 加工品	(13.1)×(4.3)×2.4			a.三面摩滅する。温石か

表14 遺物観察表(10)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
27-1	2面 柱穴(1)P41	褐釉 壺				胴部片 a.ヨコナデ b.茶褐色 精良堅緻 c.暗褐色 e.良好 f.二次焼成うける
27-2	”	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	—	3.7	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.暗灰白色 精良堅緻 d.深緑灰色 半透明 薄手施釉 f.高台内露胎
27-3	2面 柱穴(1)P45	かわらけ皿 小型	(6.8)	(5.0)	1.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-4	”	常滑 甕				口縁部 a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.暗灰色 長石 砂 小石粒 黒色粒 c.暗褐色 e.良好
27-5	”	白磁 口元印花文皿				口縁部片 a.内面印花 b.灰白色 精良堅緻 d.白色 透明 薄手に施釉 e.良好
27-6	2面 柱穴(1)P48	かわらけ皿 大型	(12.9)	(7.8)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-7	2面 柱穴(1)P50	かわらけ皿 小型	(7.8)	(5.8)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
27-8	”	かわらけ皿 小型	(7.8)	(5.6)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
27-9	”	かわらけ皿 小型	(7.6)	(6.0)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
27-10	”	かわらけ皿 小型	7.7	6.0	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-11	”	かわらけ皿 小型	7.6	5.9	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-12	”	かわらけ皿 中型	(10.9)	(6.0)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-13	”	かわらけ皿 大型	(11.7)	(7.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-14	”	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	(14.1)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 d.青緑灰色 半透明 厚手施釉
27-15	2面 柱穴(1)P51	東濃型 山茶碗	(8.0)	(5.0)	1.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 体部ヨコナデ b.灰色 微砂 緻密な良土 e.良好 f.内底面 指一本による浅いナゲ 紅が残る
27-16	”	瀬戸 緑釉小皿	(11.0)	5.2	(2.7)	a.ロクロ 口縁部ヨコナデ 体部二段の回転ヘラ削り 底部右回転糸切痕 高台 やや雑な削り出し b.灰色 砂 黒色粒 良土 c.灰白色 d.緑釉 口唇部のみ 厚い e.良好 f.P.51と接合
27-17	2面 柱穴(1)P73	白磁 口元皿	(9.6)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや薄手に施釉 e.良好 f.口唇部に油煙 煤着く P.51と接合
27-18	2面 柱穴(1)P54	火鉢				口縁部片 a.ヘラ削り b.暗灰色 砂 砂粒 やや粗土 c.暗灰色 e.良好 f.穿孔あり IB類
27-19	2面 柱穴(1)P56	尾張型 山茶碗				口縁部片 a.ヨコナデ b.灰色 微砂 長石 黒色粒 e.良好
27-20	”	白磁 口元皿	(10.6)	—	—	b.灰色 微砂 精良堅緻 d.灰白色 半透明 厚手に施釉 e.良好 f.釉厚く、体部に 釉垂れする
27-21	2面 柱穴(1)P57	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	(17.9)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.灰色 精良堅緻 d.暗緑色 半透明 厚手施釉 f.蓮弁文雑な彫り
27-22	”	白磁 口元皿	(10.6)	—	—	b.白色 微砂 精良堅緻 d.白色 半透明 やや厚手に施釉 e.良好
27-23	2面 柱穴(1)P59	常滑 甕				口縁部 a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.暗灰色 長石 砂 黒色粒 c.暗褐色 e.良好
27-24	”	瀬戸 合子蓋	(6.6)	(5.4)	1.3	a.口縁露胎 天井部、側面施文 b.白色 硬質 d.青緑色 透明 e.良好
27-25	2面 柱穴(1)P61	瀬戸 卸皿	(12.0)	—	—	b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質
28-1	2面 柱穴(1)P64	平瓦	(12.6) × (13.9) × 2.0			表裏 黒色微砂による離れ砂 b.砂多く 小石粒みられる やや粗土 f.永福寺Ⅲ期E類と同類
28-2	2面 柱穴(1)P66	かわらけ皿 小型	(7.3)	(4.4)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが強い
28-3	”	かわらけ皿 小型	(7.3)	(4.8)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
28-4	”	かわらけ皿 大型	(11.4)	(6.8)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
28-5	”	かわらけ皿 大型	(11.4)	(5.8)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが強い 口唇部に油煙煤付着 灯明皿
28-6	”	かわらけ皿 大型	(11.7)	(7.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが強い
28-7	”	かわらけ皿 大型	(13.7)	(7.6)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが強い
28-8	2面 柱穴(2)P70	かわらけ皿 小型	8.0	4.4	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが強い

表15 遺物観察表(11)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
28-9	2面 柱穴(2)P70	かわらけ皿 大型	(11.4)	(7.1)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
28-10	〃	白磁 口兀皿	底部片			a.内底面印花文 b.白色 精良堅緻 d.白灰色 透明 薄手に施釉 e.良好 f.底部中 央が盛り上がる
28-11	2面 柱穴(2)P71	かわらけ皿 小型	(7.2)	(4.8)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁が煤けている 灯明皿
28-12	〃	白かわらけ	(9.6)	—	—	a.ヨコナゲ b.微砂 c.淡橙白色 e.良好 f.蓋の可能性あり
28-13	〃	砥石 中砥	幅4.6×高さ(3.0) ×厚み1.3			a.両面使用 c.淡黄色 f.伊予産
28-14	2面 柱穴(2)P75	かわらけ皿 大型	(11.2)	(6.5)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
28-15	2面 柱穴(2)P79	かわらけ皿 小型	7.4	5.7	1.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
28-16	〃	かわらけ皿 小型	(7.5)	(5.6)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石 粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが強い 口唇部摩耗し油煙煤付着 灯明皿
28-17	〃	鉄製品 釘	残存長(4.1)×厚さ0.3			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
28-18	2面 柱穴(2)P93	かわらけ皿 小型	(7.4)	(4.6)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
28-19	2面 柱穴(2)P97	かわらけ皿 小型	(6.8)	(5.2)	1.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが強い
29-1	1面下2面上 出土遺物	かわらけ皿 小型	(5.8)	(3.3)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石 粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口唇部油煙煤付着 灯明皿
29-2	〃	かわらけ皿 小型	(5.6)	(3.8)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 良土 c.橙色 e.良 好 f.内底面ナゲ調整
29-3	〃	かわらけ皿 小型	(6.7)	(3.6)	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
29-4	〃	かわらけ皿 小型	7.0	4.1	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
29-5	〃	かわらけ皿 小型	(7.5)	(5.5)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-6	〃	かわらけ皿 小型	(7.2)	(4.8)	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面中央にナゲ調整
29-7	〃	かわらけ皿 小型	(7.7)	(6.0)	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面に強いナゲ調整
29-8	〃	かわらけ皿 小型	7.4	6.0	1.6	a.全体に粗雑な成形 ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲 母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.やや良好 f.内底面雑なナゲ調整
29-9	〃	かわらけ皿 小型	(7.4)	(4.2)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-10	〃	かわらけ皿 小型	(7.7)	(4.8)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面に強いナゲ調整
29-11	〃	かわらけ皿 小型	(7.8)	(4.6)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口唇部油煙煤付着 灯明皿 内底面にナゲ
29-12	〃	かわらけ皿 小型	(7.5)	(5.0)	2.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面中央にナゲ調整
29-13	〃	かわらけ皿 小	(7.7)	(4.2)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.摩滅著しい
29-14	〃	かわらけ皿 小型	(7.7)	(5.6)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面中央にナゲ調整
29-15	〃	かわらけ皿 小型	(9.0)	(5.6)	2.4	a.成形粗雑 ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.中皿か
29-16	〃	かわらけ皿 小型	(7.1)	(4.2)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面中央にナゲ調整
29-17	〃	かわらけ皿 小型	(7.6)	(4.4)	2.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-18	〃	かわらけ皿 大型	(11.6)	(7.0)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-19	〃	かわらけ皿 大型	(12.0)	(6.8)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-20	〃	かわらけ皿 大型	(12.0)	(8.0)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-21	〃	かわらけ皿 大型	11.4	6.1	3.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面強いナゲ調整
29-22	〃	かわらけ皿 大型	(13.3)	8.4	4.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.全体に鉄分が付着する
29-23	〃	かわらけ皿 大型	(13.3)	(7.2)	3.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 粉質良土 c.橙色 e.良好

表 16 遺物観察表 (12)

() は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
29-24	1面下2面上 出土遺物	かわらけ皿 大型	(12.2)	8.0	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ調整
29-25	〃	かわらけ皿 大型	(12.8)	(6.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面に強いナデ調整
29-26	〃	かわらけ皿 大型	(14.5)	(9.2)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 やや良土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面ナデ調整
29-27	〃	かわらけ皿 大型	(14.7)	(9.0)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
29-28	〃	かわらけ皿 大型	(13.4)	(7.2)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 良土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ調整
29-29	〃	白かわらけ 高坏	(8.5)	(6.8)	(13.7)	a.坏 凸部貼り付け面強いナデ 貫通しない穴があく 体部ヨコナデ 脚部 指頭と縦位のナデ 台部との接合部へラ状工具縦位ナデ b.微砂 c.乳白色 e.良好 f.坏部と脚部は接合関係にないが同一個体である
29-30	〃	火鉢	口縁部片			a.外体部 指頭 b.灰色 砂 小石粒 c.灰色 e.良好 f.IC類
29-31	〃	火鉢	—	(21.6)	—	a.底部 砂底 体部 ヨコナデ b.灰色 砂 小石粒 c.灰色 e.良好 f.IB類
29-32	〃	火鉢	口縁部片			a.黒色処理 b.橙色 小石粒 c.黒色 e.良好 f.III類 花文スタンプあり
29-33	〃	火鉢	(28.0)	—	—	a.黒色処理 b.灰白色 砂 小石粒 c.黒灰色 e.良好 f.III類
29-34	〃	伊勢系 鏝鍋	口縁～体部片			a.体部 ササラ状工具で掻き削られている 口縁 ヨコナデ b.暗灰色 小石粒 金雲母 c.黄灰白色 e.良好
29-35	〃	尾張型 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 ヨコナデ b.灰白色 砂 小石粒 c.灰白色 e.良好 f.I類
29-36	〃	常滑 片口鉢	底部片			a.輪積み技法 貼り付け高台の上はへら削り b.砂 白色粒 小石粒 c.橙色 e.良好 f.内底面摩滅する 胎土だけ見るとII類に似るが、I類
29-37	〃	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 ヨコナデ b.灰色 砂 白色粒 小石粒 c.暗赤褐色 e.良好 f.II類
29-38	〃	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 ヨコナデ b.砂 小石粒多い c.橙色 e.良好 f.II類
29-39	〃	備前 すり鉢	体部片			a.1条の目目6本で構成 b.橙灰色 砂 小石粒 白色粒 c.灰色 e.良好
29-40	〃	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.橙色 小石粒多い c.暗褐色 e.良好
29-41	〃	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.灰白色 小石粒多い c.褐色 e.良好 f.縁下部欠損
29-42	〃	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.灰白色 小石粒多い c.灰白色 e.良好
29-43	〃	常滑甕 押印	肩部片			押印：格子
29-44	〃	常滑 摩耗陶片	長さ5.6幅4.4厚さ1.0			側面を3辺及び表面をくまなく摩耗する
29-45	〃	瀬戸 壺	(11.8)	—	—	b.灰白色 良土 d.黒褐色 鉄釉 不透明 e.良好 硬質 f.釉は全体にはがれ僅かに残る
29-46	〃	瀬戸 平碗	口縁部片			b.灰白色 良土 d.灰緑色釉 不透明 e.良好 硬質
30-47	〃	瀬戸 折縁深皿	(20.6)	—	—	b.灰白色 良土 d.緑灰色 透明 e.良好 硬質 f.二次焼成を受ける
30-48	〃	瀬戸 折縁深皿	—	(13.0)	—	a.底部へら削りし露胎 内底面4条の同心円刻まれる b.黄灰白色 良土 d.緑灰色 透明 e.良好 軟質
30-49	〃	瀬戸 緑釉皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.口唇部のみ施釉 緑釉 透明 e.良好 軟質
30-50	〃	瀬戸 片口卸皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質
30-51	〃	瀬戸 入子	(6.6)	—	—	b.灰白色 良土 c.灰白色 e.良好 硬質
30-52	〃	瀬戸 入子	(8.6)	—	—	b.黄 灰白色 良土 c.黄 灰白色 e.良好 硬質
30-53	〃	龍泉窯青磁 蓋	小片			b.暗灰白色 精良堅緻 d.暗 灰緑色 半透明 厚い
30-54	〃	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.灰白色 精良堅緻 d.明緑灰色 半透明 厚手施釉 f.単弁
30-55	〃	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.灰白色 精良堅緻 d.緑灰色 半透明 厚手施釉
30-56	〃	龍泉窯青磁 米色鎚蓮弁文碗	(11.3)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.橙灰白色 精良堅緻 d.茶色 透明 厚手施釉 f.細かい貫入が入る

表17 遺物観察表(13)

()は復元値

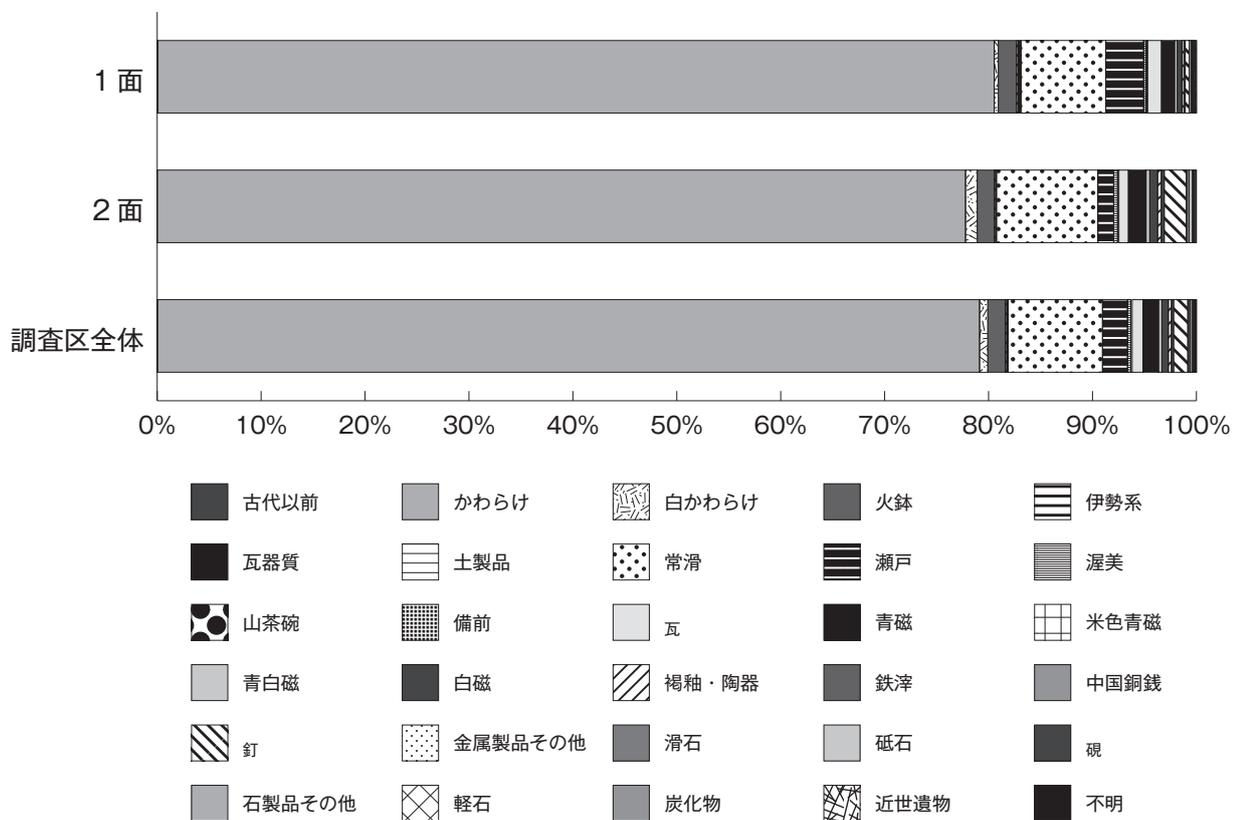
挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
30-57	1 面下 2 面上 出土遺物	龍泉窯青磁 折縁皿	(11.8)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.緑灰色 透明 厚手施釉 f.内面蓮弁文
30-58	”	龍泉窯青磁 折縁皿	口縁部片			b.灰.白色 精良堅緻 d.緑灰色 半透明 厚い
30-59	”	白磁 口兀碗	口縁部片			b.灰白色 精良堅緻 d.白色 透明 薄手に施釉 e.良好
30-60	”	白磁 口兀印花文碗	(8.0)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色 透明 薄手に施釉 e.良好 f.内面印花 口唇部四角く切られる
30-61	”	白磁 口兀印花文皿	(9.4)	—	—	b.白色 精良堅緻 d.白色 透明 薄手に施釉 e.良好 f.内面草花文印花
30-62	”	青白磁 梅瓶	胴部片			b.灰白色 精良堅緻 d.淡青色 透明 やや厚手に施釉 貫入あり e.良好
30-63	”	青白磁 壺蓋	(8.8)	—	1.3	a.口唇部から内側露胎 文様型捺し b.白色 精良堅緻 d.淡青色 透明 厚手に施釉 e.良好
30-64	”	青白磁 仏華瓶	脚部			a.文様型捺し 脚部下から内側露胎 b.白色 精良堅緻 d.淡青色 やや厚手に施釉 e.良好 f.香炉の脚部の可能性あり
30-65	”	青白磁 合子蓋	天井部片			a.文様草花文 型捺し b.白色 精良堅緻 d.淡青色 透明 薄手に施釉 e.良好
30-66	”	褐釉 壺	頸部片			a.ヨコナデ b.灰白色 精良堅緻 c.黒褐色 不透明 e.良好 f.二次焼成を受ける 黒褐釉か
30-67	”	平瓦	(13.0) × (7.8) × 2.1			a.表裏 ナデ 離れ砂 b.灰白色 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f.永福寺Ⅱ期C類と同類
30-68	”	平瓦	(6.2) × (5.2) × 2.0			a.表 ナデ 裏 縄目叩き b.灰色 小石粒多い 粗土 c.灰色 e.良好 f.八幡宮D類と同類
30-69	”	平瓦	(4.0) × (7.3) × 2.1			a.表 糸切り 裏 指頭痕 b.橙色 小石粒多い 粗土 c.橙色 e.良好 f.側面三角形にへら削り 永福寺Ⅰ類と同類
31-70	”	平瓦	(14.3) × (13.8) × 2.2			a.表 糸切り 裏 縄目叩き目 b.灰色 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f.永福寺Ⅰ類A類と同類
31-71	”	軒平瓦	(8.3) × (9.8) × 2.2			a.表 黒色微砂 叩き目転写 裏 二条線に丸に菱形文叩き目 b.灰白色 小石粒 粗土 c.灰白色 e.良好 f.永福寺Ⅱ類と同類
31-72	”	鉄製品 釘	残存長(4.7) × 厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
31-73	”	鉄製品 釘	残存長(4.9) × 厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
31-74	”	鉄製品 釘	残存長(5.7) × 厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
31-75	”	銭	外径2.4 内径1.9 孔径0.7 厚さ0.15			□宋通□北宋 f.真書 書体で当てはまるのは皇宋通寶 初鑄年1038年
31-76	”	滑石 加工品	(5.6) × (3.5)			滑石鍋の鏝の部分を使用 裏面は平坦に擦られている スタンプ加工途中のものか
31-77	”	石製品 硯	(6.4) × (4.4) × 1.6			方硯 裏面剥離している 鳴滝産 若王子石 赤間手
31-78	”	石製品 石臼	(4.7) × (4.9) × (1.4)			使用面以外剥離 使用面摩滅する
31-79	”	砥石 仕上砥	3.4 × (6.8) × (0.6)			一面のみ使用 裏面剥離 鳴滝産
31-80	”	砥石 中砥石	(4.4) × (1.6) × (3.0)			二面使用 二方剥離 天草産
32-1	2 面下 深掘り坑	常滑甕 押印	肩部片			押印：格子
32-2	”	褐釉 壺	胴部片			a.ヨコナデ b.灰色 精良堅緻 c.褐色 e.良好
32-3	”	白磁 口兀皿	—	(8.8)	—	b.灰白色 微砂 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや厚手に施釉 e.良好
32-4	”	鉄製品 釘	残存長(5.2) × 厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
32-5	”	鉄製品 釘	残存長(7.4) × 厚さ0.3			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失

表18 出土遺物計量表(1)

			1面		2面		トレンチ		表採		総計	
古代以前古墳以降			2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
土器	かわらけ	手捏ね	2	0.08%	6	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.14%
		ロクロ	1431	57.29%	2394	75.66%	49	73.13%	41	89.13%	3915	67.79%
		不明	577	23.10%	60	1.90%	5	7.46%	2	4.35%	644	11.15%
	白かわらけ		8	0.32%	14	0.44%	0	0.00%	0	0.00%	22	0.38%
		高坏	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		蓋	1	0.04%	20	0.63%	0	0.00%	0	0.00%	21	0.36%
	火鉢	不明	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		I類	7	0.28%	28	0.88%	1	1.49%	0	0.00%	36	0.62%
		II類	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		III類	22	0.88%	14	0.44%	0	0.00%	0	0.00%	36	0.62%
	伊勢系	IV類	4	0.16%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.10%
		不明	10	0.40%	7	0.22%	0	0.00%	0	0.00%	17	0.29%
		伊勢系鍔鍋	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	瓦器質	伊勢系鍋	2	0.08%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%
		器種不明	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
土製品	土器質	鉢	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		香炉	4	0.16%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.10%
国産陶器	常滑	人形	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		壺	8	0.32%	17	0.54%	0	0.00%	0	0.00%	25	0.43%
		甕	182	7.29%	247	7.81%	6	8.96%	1	2.17%	436	7.55%
		片口鉢I類	10	0.40%	23	0.73%	3	4.48%	1	2.17%	37	0.64%
		片口鉢II類	2	0.08%	16	0.51%	0	0.00%	0	0.00%	18	0.31%
		山皿	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		山茶碗	1	0.04%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		すり常滑	1	0.04%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		不明	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		瀬戸	壺類	7	0.28%	5	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	12
	甕		0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	瓶子		0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	仏華瓶		1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	碗		6	0.24%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.12%
	天目碗		7	0.28%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	10	0.17%
	卸皿		9	0.36%	4	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	13	0.23%
	折縁皿		34	1.36%	8	0.25%	0	0.00%	0	0.00%	42	0.73%
	皿		10	0.40%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	13	0.23%
	洗		1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	香炉類		3	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
	入子		8	0.32%	11	0.35%	0	0.00%	0	0.00%	19	0.33%
	渥美		山皿	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2
		器種不明	4	0.16%	8	0.25%	0	0.00%	0	0.00%	12	0.21%
		加工品	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		甕	4	0.16%	9	0.28%	0	0.00%	0	0.00%	13	0.23%
		壺	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	山茶碗	片口鉢	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		すり渥美	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		山茶碗	3	0.12%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.10%
	備前	擂鉢	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	瓦	平瓦	25	1.00%	20	0.63%	0	0.00%	0	0.00%	45	0.78%
		軒平瓦	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		丸瓦	5	0.20%	8	0.25%	0	0.00%	0	0.00%	13	0.23%
軒丸瓦		1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%	
瓦加工品		1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
舶載	青磁	壺	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		鉢	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		碗	14	0.56%	14	0.44%	0	0.00%	0	0.00%	28	0.48%
		蓮弁文碗	3	0.12%	29	0.92%	0	0.00%	0	0.00%	32	0.55%
		稜花内外蓮弁文碗	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		皿	2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		折縁皿・盤	8	0.32%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	10	0.17%
		稜花皿	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		折腰皿	2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		合子の蓋	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	米色青磁	香炉	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		白堆文器種不明	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		蓮弁文碗	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		壺	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		梅瓶	3	0.12%	5	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.14%
青白磁	碗	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
	合子	0	0.00%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%	
	水注	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	

表19 出土遺物計量表(2)

			1面		2面		トレンチ		表採		総計	
船 載	青白磁	香炉	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		脚部	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	白磁	壺	2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		鉢	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		碗	2	0.08%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%
		口元碗	1	0.04%	6	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.12%
		皿	0	0.00%	9	0.28%	0	0.00%	0	0.00%	9	0.16%
		口元皿	5	0.20%	3	0.09%	1	1.49%	0	0.00%	9	0.16%
		合子蓋	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	器種不明	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%	
褐釉・陶器	壺	2	0.08%	10	0.32%	1	1.49%	0	0.00%	13	0.23%	
	盤	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
	その他	2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%	
鉄 滓	鉄滓		0	0.00%	4	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%
金属製品	中国銅銭		3	0.12%	5	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.14%
	鉄	釘	10	0.40%	68	2.15%	1	1.49%	0	0.00%	79	1.37%
	その他		4	0.16%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.09%
石 製 品	滑石	滑石鍋	1	0.04%	4	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.09%
		滑石鍋加工品	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		滑石	2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		滑石加工品	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	砥石	中砥・天草	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		中砥・伊子	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		仕上砥・鳴滝	1	0.04%	7	0.22%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.14%
	硯	鳴滝	2	0.08%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%
		ひき臼	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		チャート	2	0.08%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.09%
その他	碁石	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
石	軽石		0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
自然遺物	炭化物(炭)		0	0.00%	4	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%
近世遺物			4	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	1	2.17%	5	0.09%
不 明			0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
合 計			2498	100%	3164	100%	67	100%	46	100%	5775	100%



第四章 まとめ

1. 遺構の変遷

遺物の組成を含めこの場の使われ方ははっきりしている。また、今回の調査では掘削深度の規制があり、2面のみ調査であった。しかし手づくねかわらけ等の、面の年代を遡る遺物の出土があることや周辺の遺跡から、遺跡の歴史が鎌倉時代以前に始まることは容易に想像できよう。

以下のように遺跡の変遷を追うが、年代としてはあまり差が出なかった。

今回は2面のみ調査であったが遺跡は3時期に分けられよう。

I期：第2面が相当する。掘立柱建物が2軒建つ。柱穴の重複関係、建物の軸方位、出土遺物から短期間に建て替えられたものと思われ、土地所有者は変わらないであろう。建物は2間×3間以上で、東西、北側に展開する。建物1の柱穴87では柱穴の中央にかわらけが2枚重ねて埋納されていた(図18-16・17)。おおむね13世紀後葉から14世紀前葉のもののみられ、建物及びI期の廃絶期が示される。かわらけ廃棄もしくは埋納遺構とした土坑29・柱穴50・66もいずれも建物より南側に位置するため建物との関係性は注視すべきであろう。土坑30・35の安山岩の集積は周辺もしくはこの地に礎石建物が存在したことを表し、ある程度の規模の建物があったことが推測されよう。遺物の出土傾向を見ると、第1面に比べ貿易陶磁は目に見えて増加した。どれも小片であり、この期に属するものではないにしろ周辺もしくは前時代の遺物の紛れ込みであることは確かである。周辺を含めこの地が屋敷地であったことが窺える。また、先に触れた礎石集石遺構の存在から周辺に寺院があったことも視野に入れたい。I期の年代は13世紀後葉から14世紀前葉までとする。

II期：かわらけ、白かわらけにより祭祀を行った時期である。確実にI期の建物や遺構が廃絶した後であり、第1面の地形がなされる前である。年代は14世紀前葉である。ここで一時期、祭祀行為を行った時期を設けたい。

III期：第1面が相当する。砂質凝灰岩を組んだ井戸、かわらけ溜り、土坑、柱穴の検出がある。第1面は上層を削平されており、全ての遺構が面に伴うものではなく、上層より掘り込まれた遺構もあるため、15世紀の遺物を伴う遺構も見られた。柱穴は多く検出したが建物は捉えられなかった。しかし石組みの井戸の存在から居住空間の縁辺部であることが想定できる。検出された井戸は鎌倉石の切石によるしっかりとした石組みを持つ物であり、やはり武家屋敷を連想する。井戸の年代は14世紀後半から15世紀である。第1面の年代は14世紀代が主体で15世紀までの幅を持ちたい。

2. 出土遺物と計量比について

出土した遺物を総破片数計量し表5にまとめた。やはり飛び抜けてかわらけは多いが、第1面のかわらけ溜りや第2面のかわらけ廃棄・埋納遺構によるものも大きいと思われる。第1面のかわらけ溜りは平面的な出土であった。大皿を主体とし、その対比は、大皿、小皿、不明の順で294:16:421であった。そこからもわかるように残存率が悪く細かな破片ばかりであったことは、いわゆる「宴会」後の廃棄によるものではなく、そこで投げ割った様な行為が看取され、祭祀的な様相が強く感じられる。また、第2面のかわらけ廃棄・埋納遺構は3カ所あった。各遺構の大皿と小皿(中皿)の対比は、土坑29は19:8。柱穴50は10:1(中皿)土坑66は19:1である。大皿が主体であり、供膳具の構成を持たないのではないか。土坑や柱穴といった落ち込みそのものの廃棄に伴う埋納儀礼の一種、もしくはその地に対する祭祀的な要素が色濃く伝わる。いずれも建物1・2より南側であることも注視したい。

第2面のかわらけ溜りのかわらけは74片出土し、図示しえたのは5点である。その内2点の小型と中型のかわらけは口縁に油煙煤を付着させる。白かわらけは20片出土している。そのほとんどは蓋のようであり、図示しえたものは8点である。また、第2面上まで掘り下げる間に至近の距離で白かわらけ質の高坏の脚部とそれに伴う坏部の出土もある(図29-29)。胎土・成形から在地産のものと考えられる。

中国の青銅器の祭器に「豆(トウ)」という高坏がある。土器としては新石器時代から存在し、青銅器としては西周前期からあるが、増えるのは西周後期以降で、戦国時代まで作成された。春秋時代後期からは細長いフォルムになり、蓋付きになったという。今回出土した高坏はその模倣であり日常の飲食器ではなく、何かの祀り事の後に、意識的に高坏を割って廃棄している可能性があるとして河野真知郎氏から御教示を賜った。

出土した白かわらけは蓋のみである。市内の遺跡でこの器形は時折出土している。1992年に報告された「無量寺跡」のやぐらの調査ではロクロ成形の白かわらけと一緒に蓋がまとまって検出された。その中の三点は墨書土器であり、「□庚申□」と解釈された。庚申信仰が日本に伝わったのは8世紀後半で、朝鮮半島経由ではないかと言われている(飯島1998)。また、民間に広まり始めたのは室町時代後期とされる。庚申信仰は中国の道教で説く、庚申の夜は三尸(さんし)の虫が睡眠中の身体から抜け出し、天に昇り天帝に罪過を告げるとする三尸説を中心に、仏教、道教、修験道、呪術的な医学、日本の民間の様々な信仰や習俗が集合して独自の展開をした。平安時代では主に酒饌を賜り、碁、詩歌管絃その他の遊びをしながらの徹夜であった。形式こそ道教の説く三尸説とは違うが、目的と精神は三尸説同様長生きである。『吾妻鏡』では「守庚申」として記事が載る。その初見は建暦三年(1213年)三月十九日の「今夜御所に庚申を守り御會あり。」とある。しかしこの日は鎌倉中不穩のため営中の庚申会を中止している。その後も、建保五年(1217年)八月十五日「明日に望みて庚申を守り、當座の和歌御會あり。」、嘉禎三年(1238年)三月九日「今夜新御所に始めて和歌の御會あり。庚申を守らるるなり。」などの記事があり庚申の夜は夜を徹して和歌に興じた様子を物語る。また、平安時代前期の天台宗僧侶円仁による『入唐求法巡礼行記』の承和五年(838)十一月二十六日の条に「その晩に中国の人がみな寝なかったのは、日本の正月庚申の夜と同じ」と記されている。次いで市内遺跡の出土例をあげると、1990年に報告された「若宮大路周辺遺跡群」では未報告資料であるが、白かわらけの蓋に「度嶂散(どしょうさん)」と墨書されていたものがある(馬淵和雄氏提供、能芝勉氏教示による)。他に、1999年に報告された「北条時房・顕時邸跡」ではやはり白かわらけの蓋に「□□散」と墨書され、報告者は薬壺の蓋であろうかと指摘している。同様のものが京都府の鳥羽離宮から出土している。京都では「白色土器」として報告されているこの土器の基本的な器形は碗、皿(高台付きと無高台がある)、高坏、三足盤、耳皿、台付き皿、蓋、壺類などがある。鳥羽離宮から平安末期にあたる「白色土器」の蓋が出土している。しかも墨書されており、「度嶂散」「白散」と書かれていた。「度嶂散」「白散」は邪気払いに年始に飲用する薬名とみられ、『延喜式』典薬寮には元旦御薬として記載されている。この蓋はそれらの容器のものと見ることができよう。との報告がある(平尾1994・吉村1994)。出土傾向として、特異な出土状況を示す例が内裏やその周辺に集中している。この土器が宮中を中心とする特定の用途に使用された器物として理解出来る可能性を示唆していると指摘されている。

今回のかわらけ溜りには墨書土器の出土はなかったが、上記した遺物との関連は強く、祭祀的な要素を大いに含む。また、図21-12・13のように遺物が円盤状に摩滅していることは注視すべきである。人為的ととれるからである。共伴遺物として灯明皿が出土している点も興味深い。年代は13世紀後葉から14世紀前葉が考えられる。

釘とみられる鉄製品は遺跡全体で79本の出土である。掘立柱建物が主体の本遺跡にしてはかなり多いとみていいだろう。その内18本は土坑30からの出土であり、有機物の残らない土壌がら木製品は残存していないが、

釘を多用した木製品の存在が土坑30内に想定できる。また釘の多さは建物に関わるものかもしれない。

1997年に馬淵が試みた総破片数計量による中世都市鎌倉の食器消費の状況から論じた食文化のあり方(1997馬淵)をふまえ、遺跡の傾向を見ていきたい。

馬淵は市内を都市中核部・武家屋敷・町屋地区・海岸部の四つに分け、とりわけ「土師器皿」(かわらけ)の消費のあり方に注目して比較検討している。今回の遺跡は位置的に都市中核部と海岸部から外れ、武家屋敷、町屋的に該当するが、遺構は石積みの井戸と柱穴ばかりであった。それだけでは馬淵の分けた残りの武家屋敷、町屋地区のいずれに該当するかは不明である。遺物の比較を見ていきたい。かわらけ、国産陶器、中国陶磁器の順で78.98:11.84:2.71となる。かわらけは武家屋敷的もしくは町屋的であり、国産陶器は武家屋敷的である。意外に数値の出た中国陶磁器は武家屋敷に最も近い。遺物の全体の出土傾向は馬淵の分類によれば、武家屋敷的と言える。もちろん目立って完形品が出土している訳ではなくどれも破片ばかりであり、客土・包含層出土によるものが多いが、周辺の犬懸ヶ谷、宅間ヶ谷に管領屋敷があったとされており、この二つの谷に挟まれた遺跡地もそういった性格は色濃いのではないか。

京都での「白色土器」は宮中を核とした貴族社会の伝統的な行事に供されるという特殊な用途を持つ。第2面のかわらけ溜りもまた公的な富裕層の存在を思わせる。そして時を空けずして建て替えられた2軒の掘立柱建物の存在、礎石建物を連想させる土坑30・35の集石、第1面の石組みの井戸等、この地は管領屋敷の一角であったことが窺えないか。

引用・参考文献

- 神奈川県企画調査部県史編集部1973『神奈川県史 資料編』1・2 (財)神奈川県共済会
上本進二2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡』東国歴史考古学研究所
馬淵和雄1997「食器から見た中世都市鎌倉」『国立民族博物館研究報告』71 国立歴史民族博物館
馬淵和雄2004「中世史学としての土器研究—モノ・空間認識・文化伝播—」『中近世土器の基礎研究』xⅧ日本中近世土器研究会
馬淵和雄1994「武士の都鎌倉」『中世の風景を読む』2 新人物往来社
貫志正造・永原慶二1989『全譯 吾妻鏡』3・5 新人物往来社
河野真知郎1993「中世鎌倉火鉢考—東国との関連において—」『考古論叢 神奈河』2 神奈川県考古学会
河野真知郎1992「鎌倉の搬入土器と在地土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中近世土器研究会
清水菜穂1994「「かわらけ」考(3)—鎌倉市検出の一括廃棄遺構に関する若干の基礎的検証—」『中世都市研究』3 中世都市同人会
高柳光壽1967『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
西岡芳文2004「港湾都市六浦と鎌倉」『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院
上田明美1981「「横大路」考」『鎌倉考古』5 鎌倉考古学研究所
松尾剛次1993『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館
平尾政幸1994「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店
吉村正親1994「墨書土器」『平安京提要』角川書店
秋山進午1979『古代中国の土器 陶磁体系33』平凡社
石井進1988「都市と景観の読み方」『日本の歴史・別冊』朝日新聞
石井進1989『よみがえる中世3』平凡社
芸能史研究会編『日本芸能史 2 古代—中世』法政大学出版局
安田次郎『寺社と芸能の中世』山川出版
石井進他『神奈川の地名』平凡社
鈴木庸一郎『宅間谷東やぐら群』(財)かながわ考古学財団
鈴木庸一郎・菊川英政2001「『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査」神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・(財)かながわ考古学財団
原廣志「出土瓦について」2002『永福寺跡』鎌倉市教育委員会



▲第1面近景(南から)



▲第1面全景(井戸1を中心に・北から)



▲第1面全景(南から)



▲第1面上遺物出土状況(北から)



▲第1面かわらけ溜り遺物出土状況(東から)



▲第1面井戸1（北から）



▲第1面井戸1西面（東から）

▼第1面井戸1南東隅接合面（北西から）



▲第1面井戸1東面（西から）



▲第1面井戸1南面(北から)



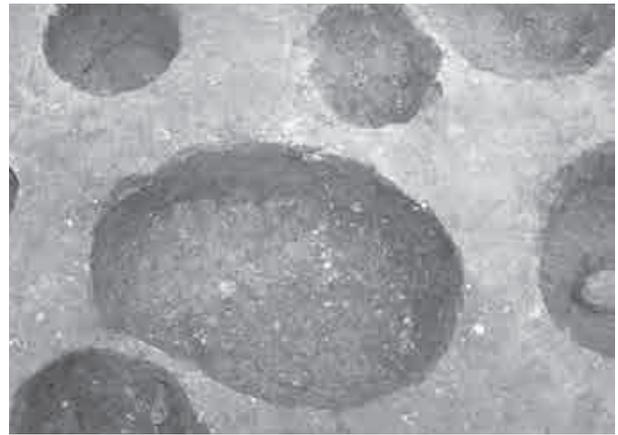
▲第1面井戸1南面鑿痕アップ



▲第1面井戸1北面(南から)



▲第1面柱穴102(南から)



▲第1面土坑1(南から)



▲第1面土坑3(北から)



▲第1面土坑4(北から)



▲第1面土坑5(西から)



▲第1面土坑6(北から)



◀第1面土坑13周辺(東から)





▲第2面全景（南から）



▲第2面全景（東から）



▲第2面建物・柱穴53・87（東から）



▲第2面柱穴87遺物出土状況（南から）



▲第2面かわらけ溜り（東から）



▲第2面土坑19(南から)



▲第2面土坑20(東から)



▲第2面土坑23(東から)



▲第2面土坑26(西から)



▲第2面土坑27(西から)



▲第2面土坑29(南から)



▲第2面土坑30・35(北から)



▲第2面土坑30(北から)



▲第2面土坑35(東から)



▲第2面土坑35 (南西から)



▲第2面上遺物出土状況 (南から)



▲第2面柱穴50 (北から)



▲第2面柱穴50 遺物出土状況 (北から)



▲ 2面下深掘坑（東から）



▲ 調査区南壁土層堆積



▲ 調査区東壁土層堆積



図8 第1面井戸 I



図9 第1面かわらけ溜り

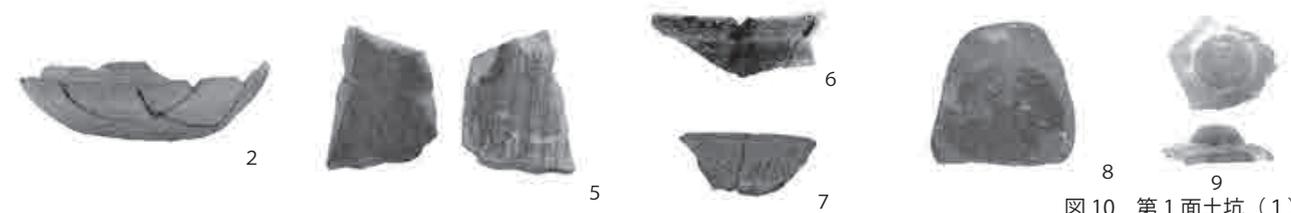


図10 第1面土坑 (1)

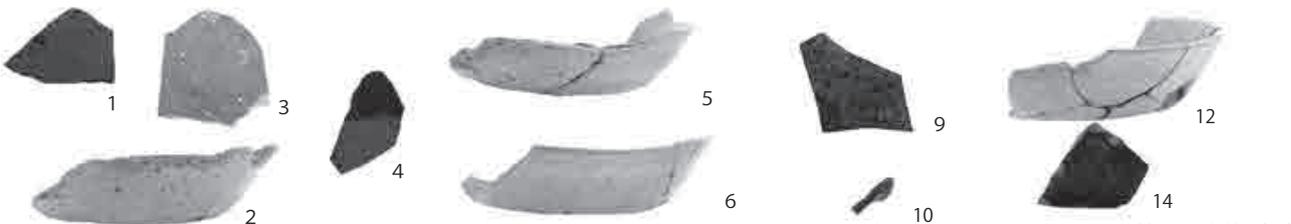


図11 第1面土坑 (2)

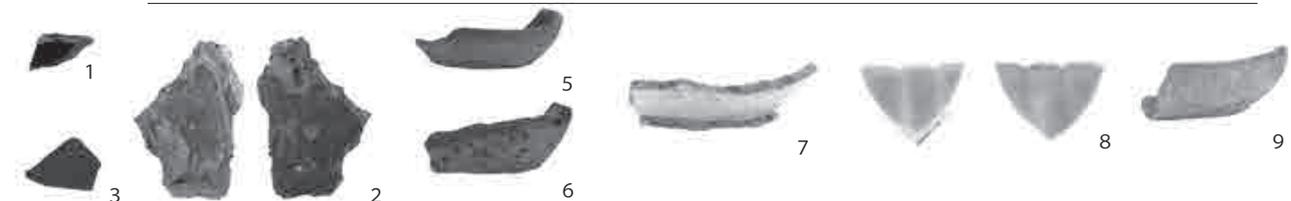


図13 第1面柱穴

图版 13

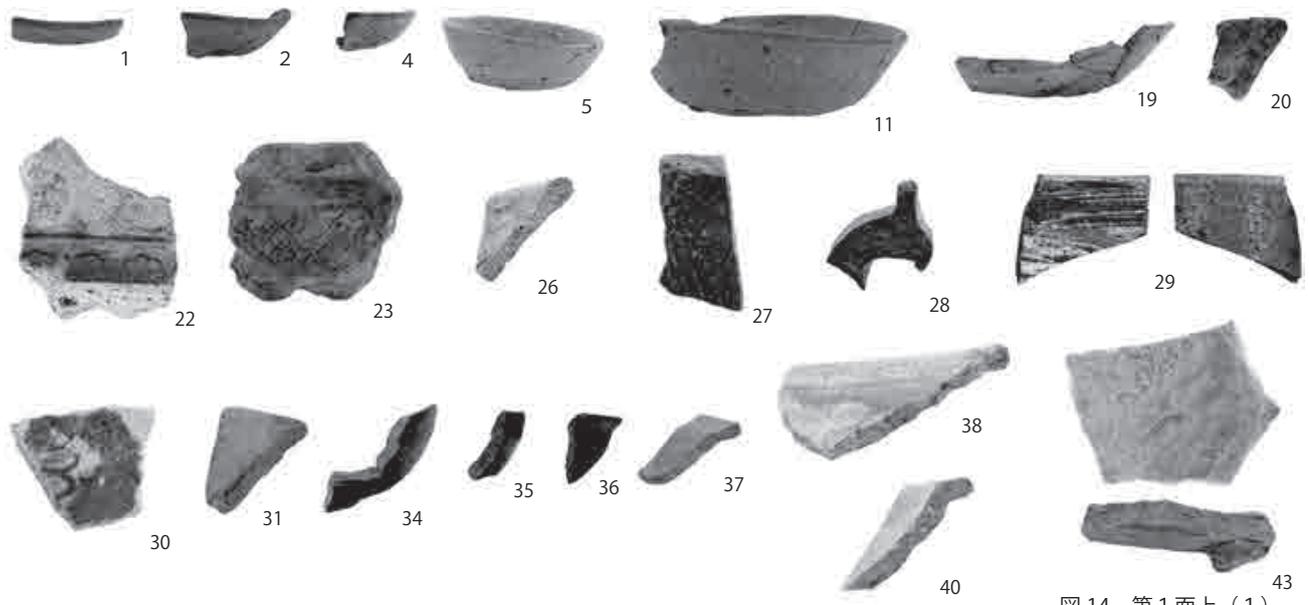


图 14 第 1 面上 (1)

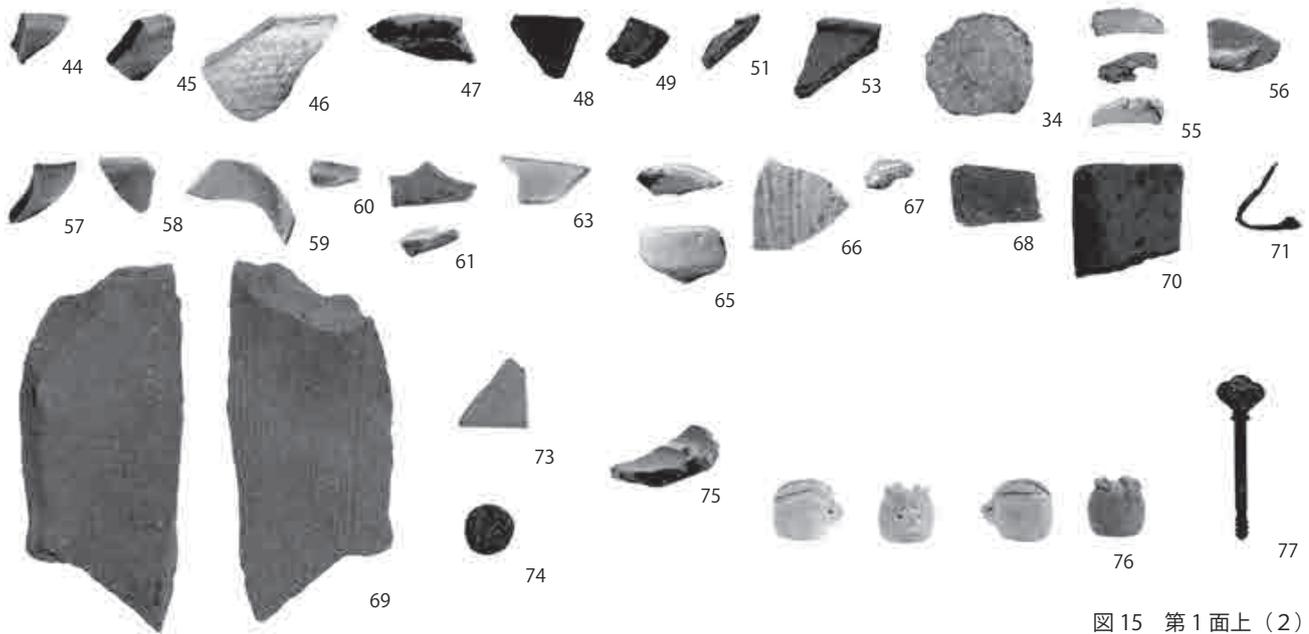


图 15 第 1 面上 (2)



图 18 第 2 面建物 1



16・17 出土状況

図 18 第 2 面 建物 1



図 20 第 2 面 建物 2

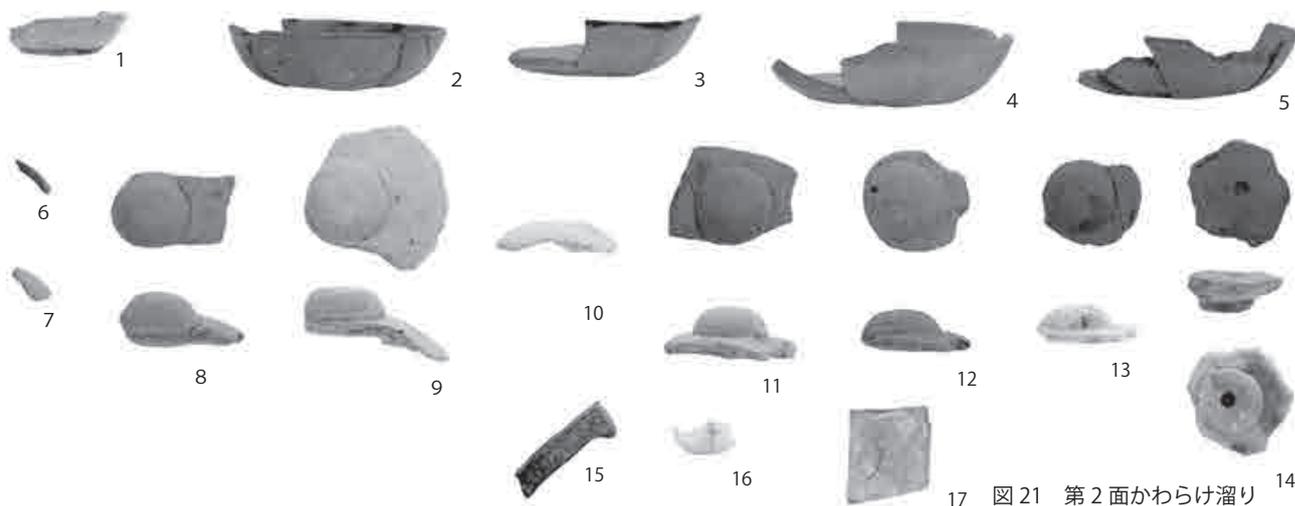


図 21 第 2 面かわらけ溜り

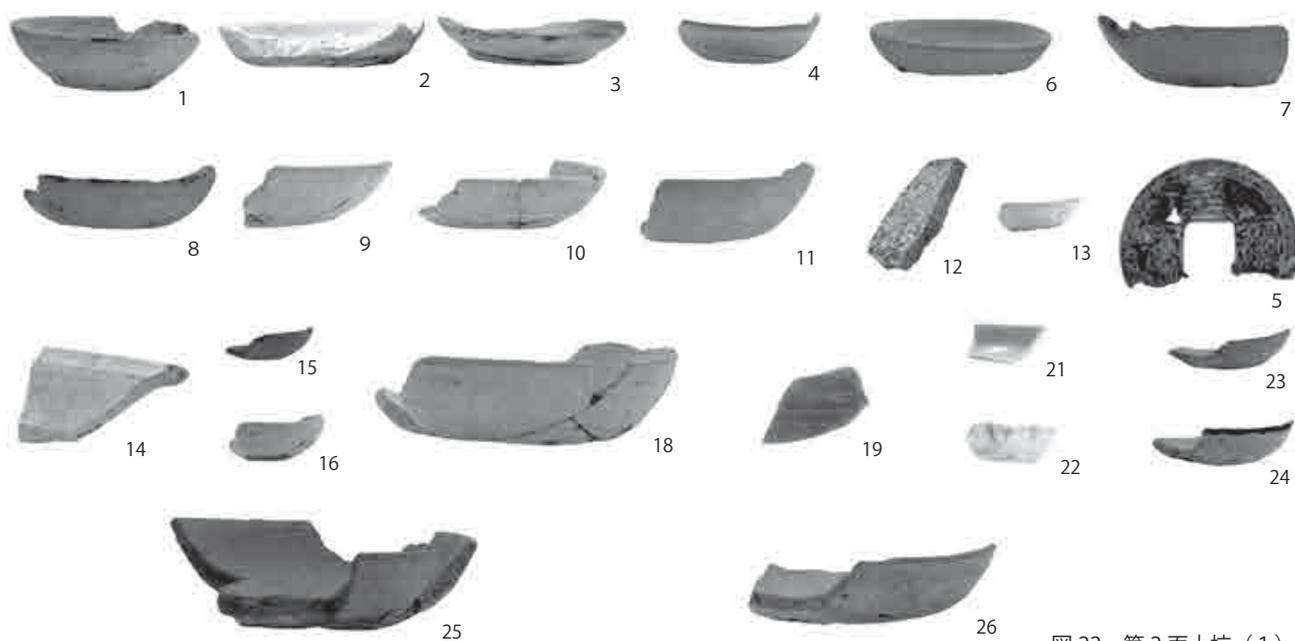


図 22 第 2 面土坑 (1)



图 23 第 2 面 土坑 (2)



图 24 第 2 面土坑 (3) 18

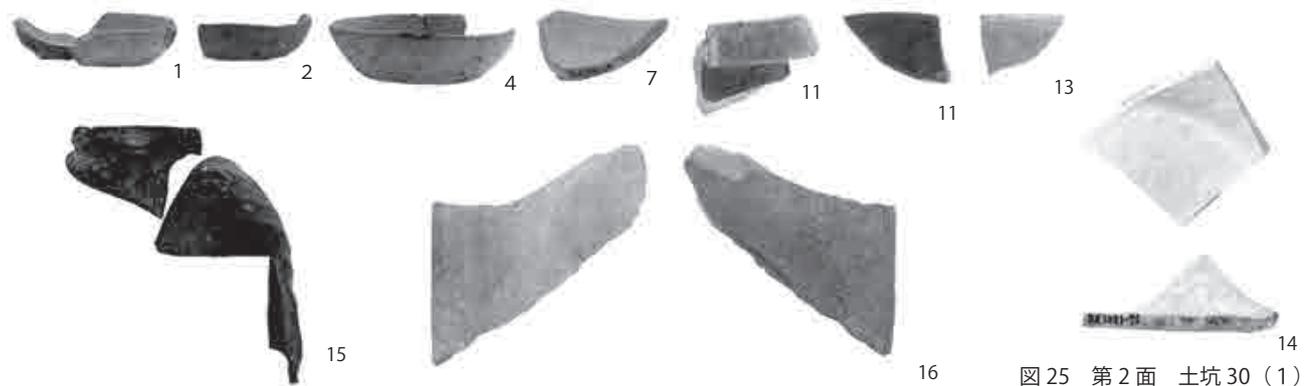


图 25 第 2 面 土坑 30 (1)



图 26 第 2 面 土坑 30 (2)

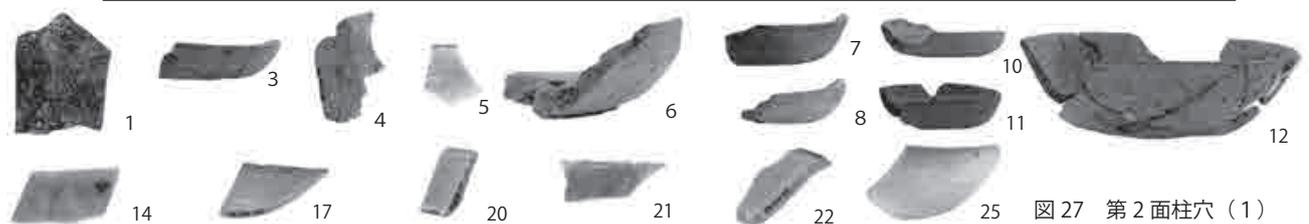


图 27 第 2 面柱穴 (1)



图 27 第 2 面 柱穴 (1)

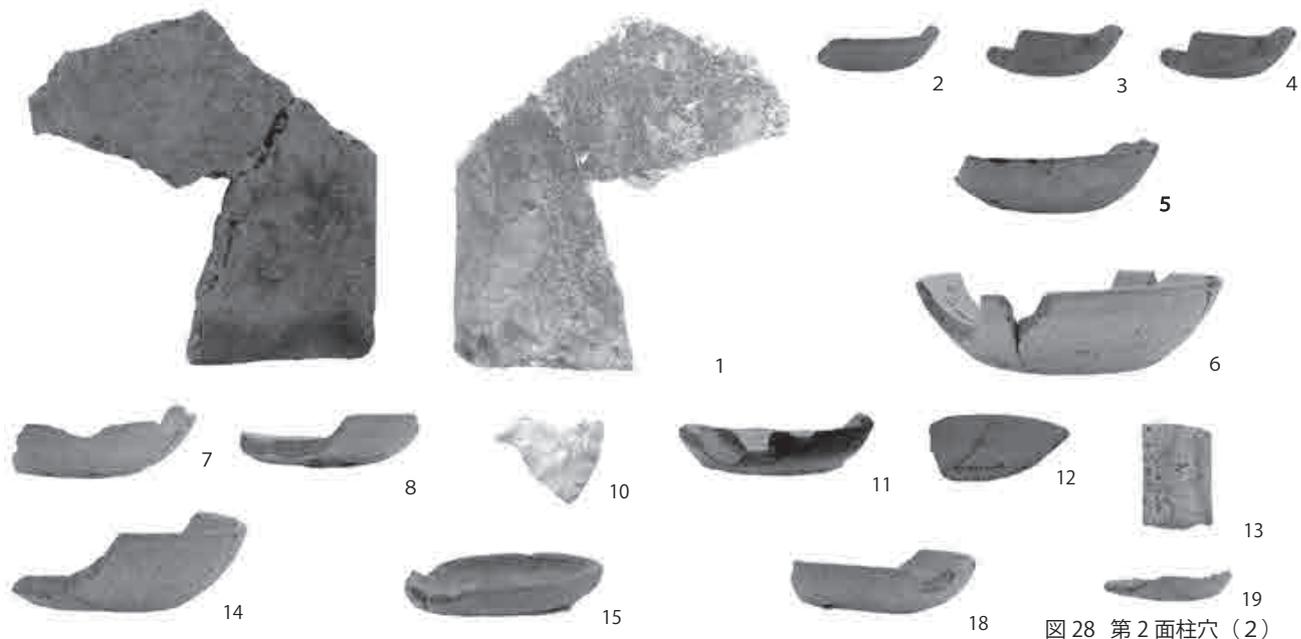


图 28 第 2 面柱穴 (2)

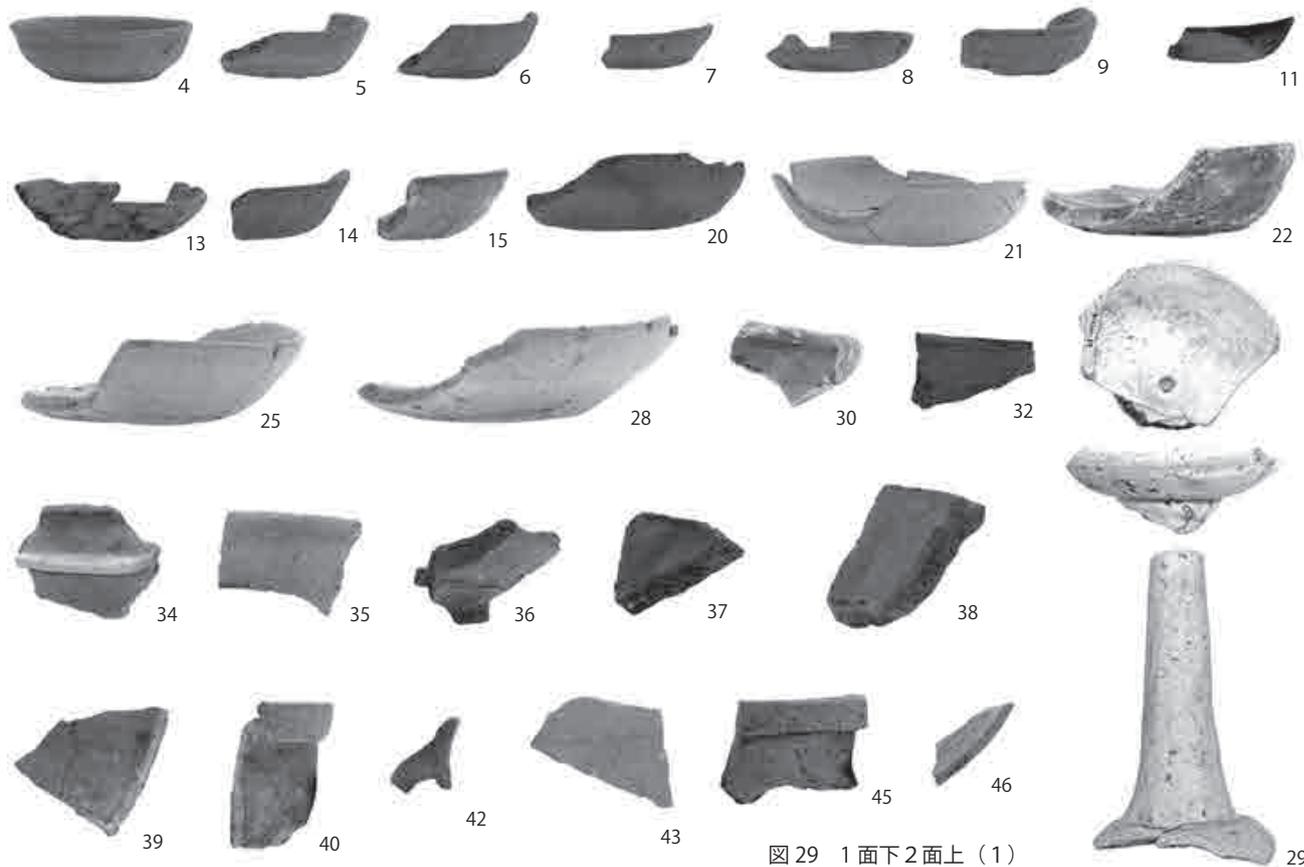


图 29 1 面下 2 面上 (1)

图版 17

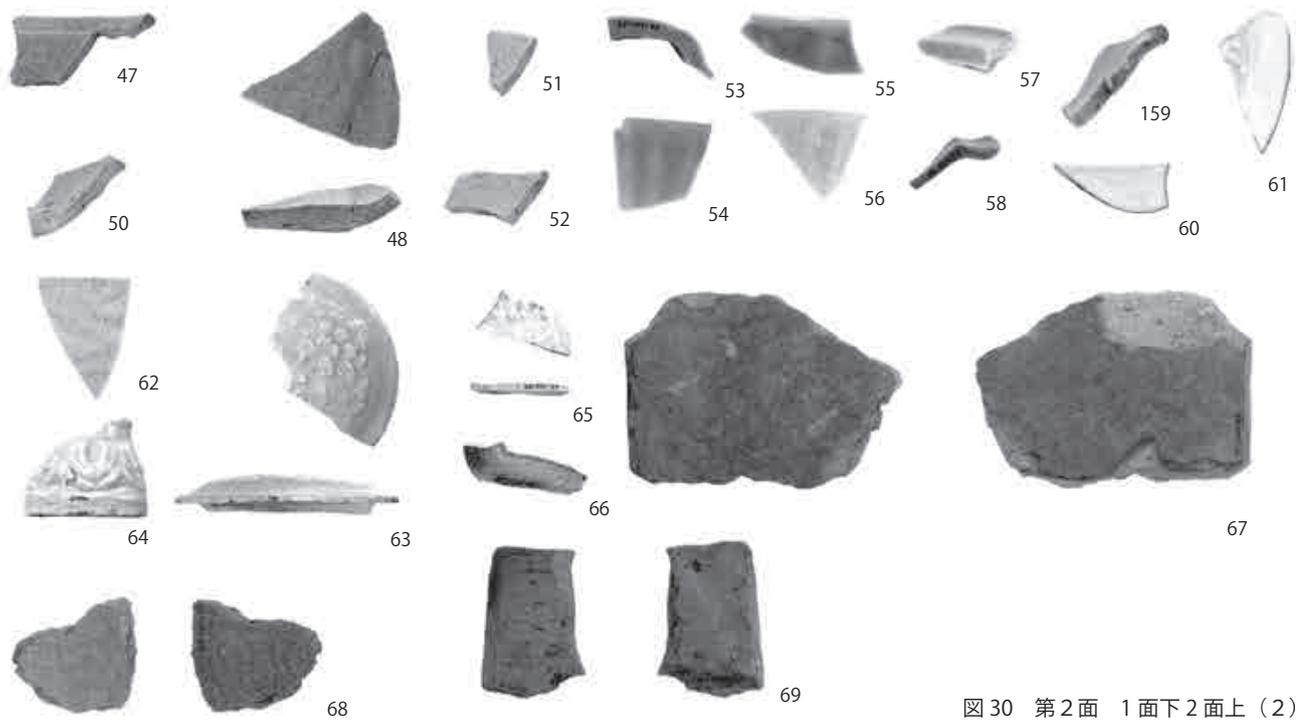


图 30 第 2 面 1 面下 2 面上 (2)

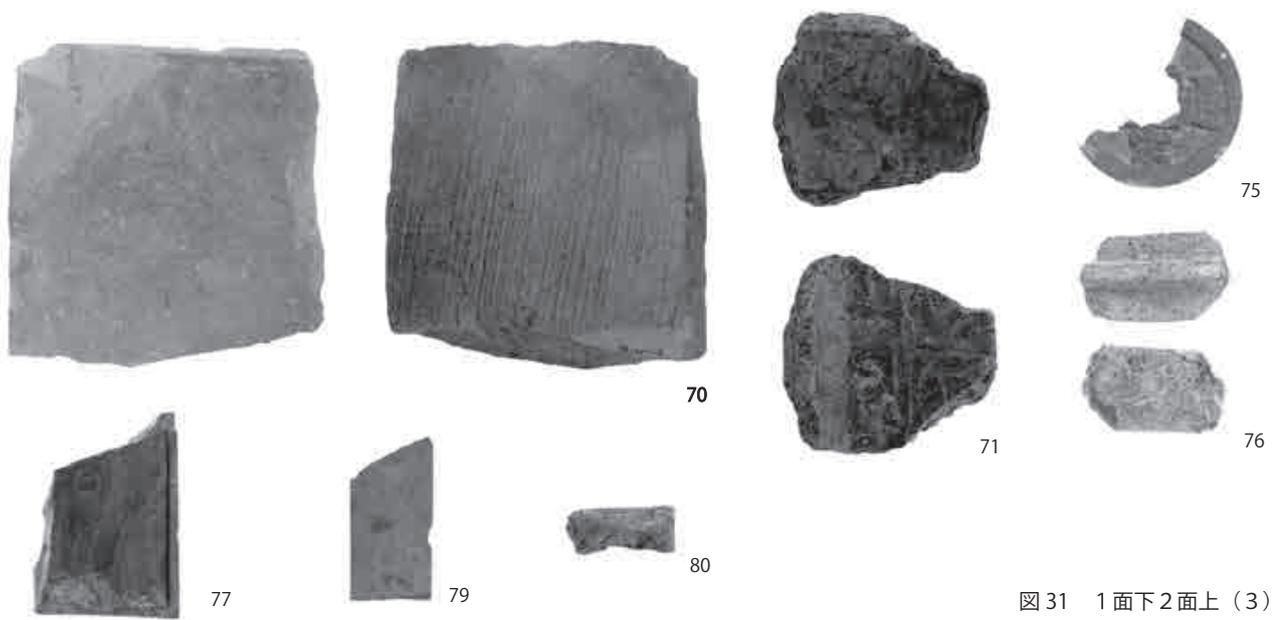


图 31 1 面下 2 面上 (3)

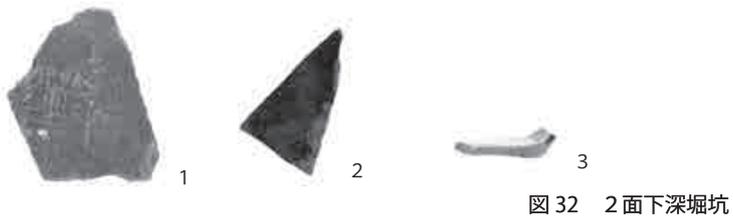


图 32 2 面下深堀坑



出土した釘



チャート



使用痕のある軽石



鉄滓



炭化物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいぎんきゅうちようさほうこくしよ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成25年度調査報告							
巻次	30 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	福田 誠/山口正紀/山口正紀/押木弘己/押木弘己/根本志保							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2014年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たまなわじょうあと 玉縄城跡	神奈川県鎌倉市 植木字植谷戸 207番1外	14204	63	35° 21' 07"	139° 31' 02"	20080414 ～ 20080516	76.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
うえずぎさだまさていあと 上杉定正邸跡	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷二丁目 195番2	14204	188	35° 18' 23"	139° 33' 22"	20090213 ～ 20090410	25.00	店舗併用 住宅 (地盤の柱状改良)
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	神奈川県鎌倉市 材木座四丁目 579番4	14204	279	35° 19' 28"	139° 33' 02"	20090413 ～ 20090605	50.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 364番17	14204	242	35° 19' 13"	139° 33' 19"	20090416 ～ 20090601	39.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
こめまちいせき 米町遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目 2311番5	14204	245	35° 18' 52"	139° 33' 13"	20090623 ～ 20090831	53.60	個人専用 住宅 (深基礎)
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺二丁目 569番10	14204	33	35° 18' 10"	139° 33' 30"	20120614 ～ 20120726	60.00	個人専用 住宅 (地盤の表層改良)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たまなわじょうあと 玉縄城跡	城館跡	中世	溝、土坑、柱穴	かわらけ、国産陶磁器、 石製品、木製品	七曲坂に向かう谷戸 の入口部を塞ぐ形で 溝が掘られている。
うえずぎさだまさていあと 上杉定正邸跡	城館跡	中世	道路状遺構、溝、 溝条遺構、囲炉裏、 土坑、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、瓦、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製 品、土師器等	
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	都市	中世	土坑、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、瓦、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製 品	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	井戸、溝、柱穴列、 土坑	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、木製品	13～15世紀代の南 北溝を検出。「小町 大路」前身の道路側 溝と考えられる。
こめまちいせき 米町遺跡	都市	中世	道路、溝、板壁建 物、土坑、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、金属製品、石 製品、骨製品、木製品	簡素なつくりの板壁 建物を検出。中世町 屋地区の一端が垣間 見られた。
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	屋敷跡	中世	掘立柱建物、井戸、 かわらけ溜まり、 土坑、柱穴	かわらけ、白かわらけ、 国産陶器、舶載陶磁器、 金属製品、石製品等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30

平成 25 年度発掘調査報告

(第 2 分冊)

発行日 平成 26 年 3 月 31 日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 芝浦エンジニアリング株式会社

